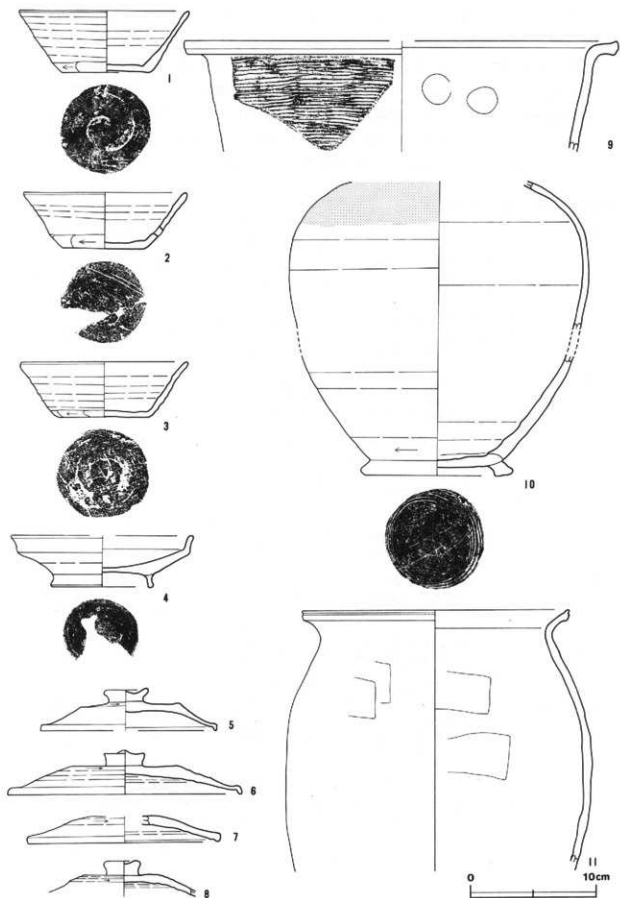


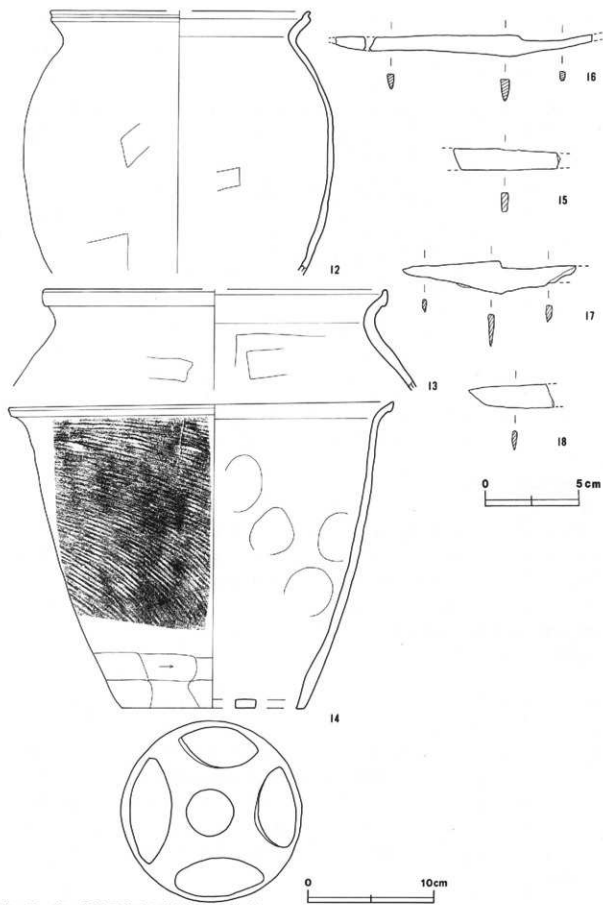
一部の覆土下層から、2の須恵器環が西壁寄りの覆土下層から、3の須恵器環が北西コーナー部と東壁寄りの覆土下層から、5と8の須恵器蓋、第89図12の土師器甕が第1号竈内から、第88図6の須恵器蓋が東壁寄りの覆土上層から覆土下層にかけて、7の須恵器蓋、第89図15と18の刀子が第1号竈東脇の覆土下層から、第88図10の須恵器蓋が東壁寄りの覆土中層、および中央部と北西コーナー部の覆土下層から、11の土師器甕と第89図14の須恵器甕が第1号竈西袖内と甕手前の覆土下層から、16と17の刀子が西壁寄りの覆土上層から覆土中層にかけてそれぞれ出土している。また、第1号竈の灰から出土した炭化米は、調理時に混入したと考えられる。所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀前半）と考えられる。

第32号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第88図 1	環 須 恵 器	A 13.7	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄色 普通	90% P 229 覆土下層 (北東コーナー)
		B 4.9				
		C 7.0				
2	環 須 恵 器	A 13.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜と1つの孔を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄色 普通	50% P 230 覆土下層 (西壁寄り)
		B 4.4				
		C 6.5				
3	環 須 恵 器	A 13.2	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 褐色 普通	50% P 231 覆土下層 (北西コーナー、 東壁寄り)
		B 4.4				
		C 7.2				
4	蓋 須 恵 器	A [14.5]	高台部から底部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	50% P 232 覆土中層 (西壁寄り、 第2甕手前)
		B 4.1				
		D 8.0				
		E 0.9				
5	蓋 須 恵 器	A [14.0]	口縁部の一部欠損。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、外反気味に開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 灰色 普通	70% P 233 第1号竈内 (竈奥)
		B 3.4				
		F 3.3				
		G 1.1				
6	蓋 須 恵 器	A 18.6	口縁部の一部欠損。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、外反気味に開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	70% P 234 覆土上層一下層 (東壁寄り)
		B 3.5				
		F 3.2				
		G 1.3				
7	蓋 須 恵 器	A 15.3	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、内響気味に開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英 砂粒 灰色 普通	40% P 235 覆土下層 (第1号竈東側)
		B (2.2)				
8	蓋 須 恵 器	B (3.0)	つまみから天井部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、直線的に開く。	つまみ・天井部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P 236 二次焼成 第1号竈内 (竈奥)
		F 2.8				
		G 1.2				
9	鉢 須 恵 器	A [34.4]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内響気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面アテ具成り。	石英 雲母 砂粒 灰色 普通	20% P 237 覆土中層 (第1号竈東側)
		B (8.8)				
10	蓋 須 恵 器	B (23.1)	高台部から体部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は内響気味に立ち上がり、上位で最大径を有する。	体部内外面ロクロナデ、外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。ヘラ記号有り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 砂粒 内面 珪オリーブ色 外面 褐色 粘 灰オリーブ色 普通	40% P 243A・B 体部外面上位・ 底部内面自然釉 覆土中層 (東壁寄り) 覆土下層 (沖矢屋・北西コーナー)
		D 12.0				
		E 1.2				



第88图 第32号住居跡出土物実測图(1)



第89图 第32号住居跡出土遺物実測図(2)

第88号	11	堯 土師器	A 21.2 B (20.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内腔気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。一部ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	50% P238 二次地成 第1号室内 (西袖内) 覆土下層 (甕手前)
第89号	12	堯 土師器	A [20.6] B (20.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内腔気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア に白い斑点 普通	20% P239 第1号室内 (甕裏・東袖内)
第90号	13	堯 土師器	A [27.2] B (8.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内腔気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 明褐色 普通	10% P240 覆土中層 (第1号甕東側)
第91号	14	甕 須恵器	A 30.5 B 24.3 C 14.4	体部と口縁部の一部欠損。平底。5孔を有する。体部は内腔気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面上位平行クツナ、下位ヘラナデ。内面アチ具痕有り。底部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	80% P241 第1号室内 (西袖内) 覆土下層 (第1号甕手前)

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
15	刀子	(5.6)	1.2	0.4	(6.40)	覆土下層(第1号甕東側)	M21
16	刀子	[13.5]	1.1	0.4	(12.0)	覆土上層(西壁寄り)	M22
17	刀子	(9.2)	1.8	0.4	(7.85)	覆土中層(西壁寄り)	M23
18	刀子	(4.5)	1.3	0.3	(2.90)	覆土下層(第1号甕東側)	M24

第35号住居跡(第90図)

位置 調査1区西南部、D5e3区。

重複関係 本跡は第16・27・30号掘立柱建物跡、第242・243号土坑と重複している。第242・243号土坑が、本跡の南壁寄りの床面を掘り込んでいることから、いずれの土坑よりも本跡が古い。また、本跡が、第16号掘立柱建物跡のP4、第27号掘立柱建物跡のP9とP10、第30号掘立柱建物跡のP3・P4・P5を掘り込んでいることから、いずれの掘立柱建物跡よりも本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.88m、短軸3.65mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は35~41cmで、垂直に立ち上がる。

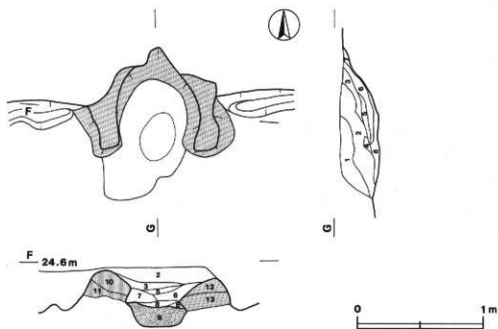
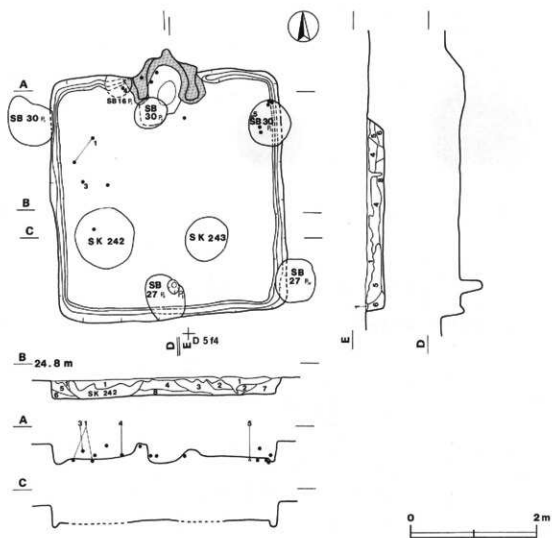
壁溝 全周している。上幅11~25cm、下幅2~7cm、深さ4~9cmで、断面形はU字状である。

床 全面が粘土質で、平坦で締まっている。

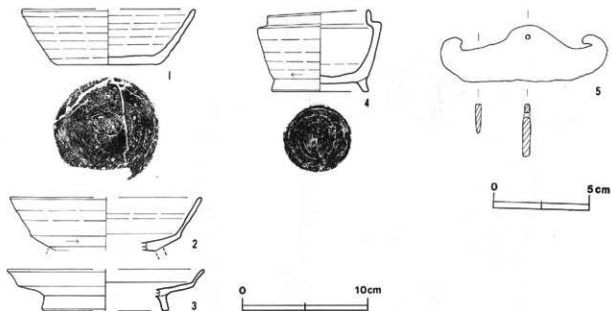
竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、突口部から煙道部まで125cm、最大幅116cm、壁外への掘り込み38cmである。火床部は、床面を21cmほど掘りくぼめた後、暗赤褐色土を貼り、深さ5cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾して立ち上がる。土層は13層に分けられた。そのうち、1~8層は天井部の崩落土など、9層は火床面の貼床層、10~13層は袖部断面の土層である。

壁土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子を少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を微量含む、粘性は弱く、締まっている。
- 2 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・赤褐色土・砂を少量、ローム中ブロックを微量含む、粘性は弱く、締まりはない。



第90图 第35号住居跡実測图



第91図 第35号住居跡出土遺物実測図

- | | | |
|----|-------|--|
| 3 | 灰 褐色 | ローム粒子・砂を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 赤 褐色 | 焼土粒子を多量、焼土小ブロックを中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 | 灰 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 | 褐 褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 7 | 暗 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・灰を少量、灰褐色粘土小ブロック・粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。 |
| 8 | 褐 褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 9 | 暗 赤褐色 | ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 10 | 灰 黄褐色 | 灰褐色粘土粒子を多量、砂を中量、焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 11 | 灰 黄褐色 | 灰褐色粘土粒子を多量、砂を中量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 12 | 暗 褐色 | ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 13 | 暗 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

ピット P1は長径21cm、短径17cmの楕円形で、深さ36cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなり、1層から3層は、ブロック状の堆積状況がみられることから人為堆積、4層から8層は自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 暗 褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性はなく、締まっている。 |
| 2 | 暗 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | 褐 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 黒 褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性はなく、締まっている。 |
| 5 | 褐 褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性はなく、締まっている。 |
| 6 | 褐 褐色 | ローム粒子を中量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 7 | 黒 赤褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性はなく、締まっている。 |
| 8 | 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片79点、須恵器片98点、鉄製品1点(火打金)、鉄洋2点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが、特に西半分からの出土が多く、約45%を占める。竈内から出土したものは約17%、北東部から出土したものが約15%、南東部から出土したものが約9%、南西部から出土したものが約27%、北西部から出土したものが約18%、その他が約14%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約37%、覆土中層が約38%、覆土下層と床面直上が約25%である。第91図1の須恵器が西壁寄りの覆土下層から、3の須恵器盤が覆土上層から、2の須恵器高台付杯が北東コーナー部寄りの覆土下層から、4の須恵器短頸壺が竈の西袖脇の覆土下層から、5の火打金が東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片は、火熱を受けていないこと、すべて細片で、7層から出土していることから、住居廃

絶後に廃棄された可能性が高いと考えられる。

所見 火打金と鉄滓が出土しているが、鍛冶炉などの鍛冶関連施設をはじめ、床面や覆土中からは炭化材や焼土痕などは確認されていない。よって、本跡との関係については不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後半）と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	坏	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 黄灰色 普通	50% P245 覆土下層 (西壁寄り)
	須恵器	B 4.4	体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。			
		C 8.2				
2	高台付坏	A [15.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な段を持ち、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P246 覆土下層 (北東コーナー)
	須恵器	B (4.2)				
3	甕	A [15.6]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	砂粒 黄灰色 普通	20% P247 覆土上層 (西壁寄り)
	須恵器	B 3.3				
		D [10.0]				
		E 1.4				
4	短頸壺	A 8.1	口縁部の一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に立ち上がり、上位で最大径を有する。口縁部は直立する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒 灰色 普通	95% P248 覆土下層 (甕西脇)
	須恵器	B 6.5				
		D 7.7				
		E 1.0				

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
5	火打金	8.8	2.9	0.4	0.2	26	覆土下層(東壁寄り)	M25

第36号住居跡(第92図)

位置 調査Ⅰ区西南部、D5 e5区。

重複関係 本跡は第27・29号掘立柱建物跡と重複している。本跡が、第27号掘立柱建物跡のP1を、第29号掘立柱建物跡のP1を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.87m、短軸3.67mの方形である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は44~50cmで、外傾して立ち上がる。

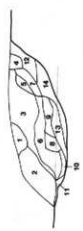
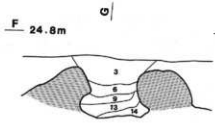
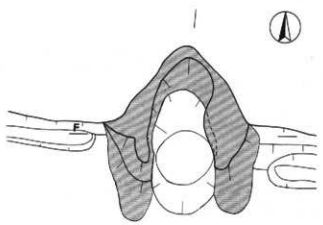
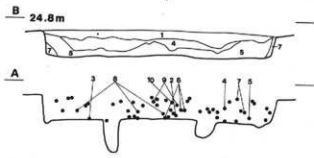
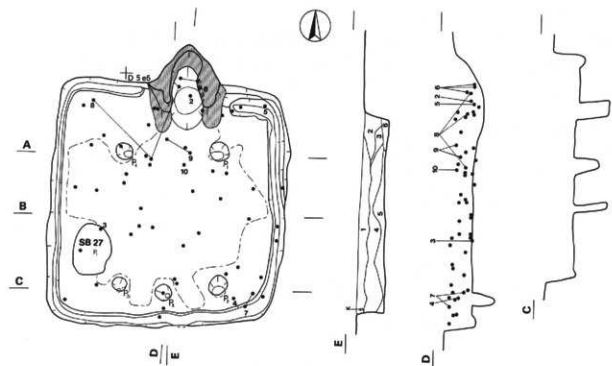
壁溝 全周している。上幅14~30cm、下幅4~18cm、深さ4~8cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

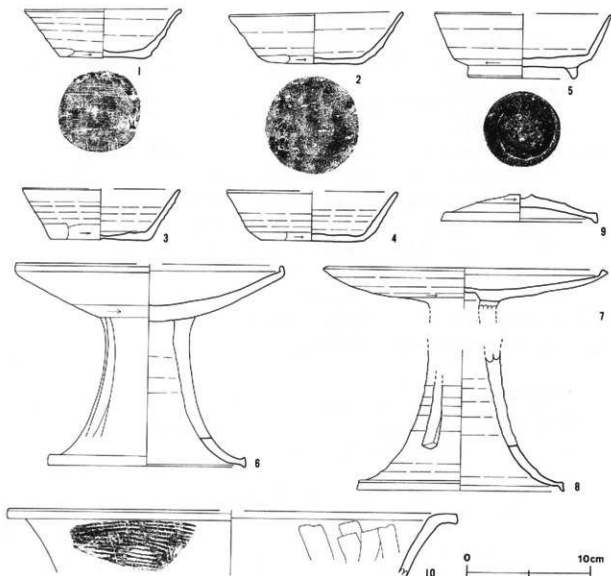
竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、美口部から煙道部まで134cm、最大幅124cm、壁外への掘り込み61cmである。火床部は、床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 黒褐色 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 灰褐色 砂を中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。



第92図 第36号住居跡実測図



第93図 第36号住居跡出土遺物実測図

- 4 暗褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。煙道部の堆積層と思われる。
- 5 褐色 灰褐色粘土小ブロックを中量、ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。煙道部の残存層と思われる。
- 6 にぶい黄褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。天井部の崩落土と思われる。
- 7 暗赤褐色 焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。煙道部の残存層と思われる。
- 8 暗褐色 焼土粒子を中量、焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 9 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 10 暗褐色 ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 11 暗褐色 ローム粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 12 褐色 ローム粒子・焼土粒子を多量、焼土小ブロックを中量、炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。煙道部の堆積層と思われる。
- 13 にぶい黄褐色 灰を多量、焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
- 14 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

ピット 5か所 (P1～P5)。P1とP3・P4は径20～30cmの円形、P2は長径31cm、短径28cmの楕円形で、深さ27～56cmである。いずれも各コーナー部付近に位置し、主柱穴と考えられる。P5は長径27cm、短径24cmの楕円形で、深さ43cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性はなく、締まっている。
 2 ぶい赤褐色 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
 3 棕褐色 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性はなく、締まりはない。
 4 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 5 暗褐色 ローム粒子を中量、焼土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 6 暗赤褐色 焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
 7 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、炭化粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器片299点、須恵器片271点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土している。竈内から出土したものは約8%、北東部から出土したものが約15%、南東部から出土したものが約20%、南西部から出土したものが約22%、北西部から出土したものが約25%、その他が約10%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約25%、覆土中層が約36%、覆土下層、床面直上、壁溝や貼床内からの出土が約39%で一番多い。第93図2の須恵器杯と6の須恵器高盤が竈内から、3の須恵器杯が西壁寄りの覆土下層から、5の須恵器高台付杯が北東コーナー部寄りの覆土下層から、8の須恵器高盤が竈内と竈周辺の覆土中層からそれぞれ出土している。竈内から出土した2の須恵器杯、6と8の須恵器高盤は火熱を受けておらず、8は竈外から出土した破片と接合したことから、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、遺物の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第36号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
93図1	須恵器	A	12.6	平底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちへら削り。底部回転へら削り後、一方向の手持ちへら削り。	石英 雲母 砂粒	100% P250 覆土中
		B	4.0			黄灰色	
		C	6.8			普通	
2	須恵器	A	13.8	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちへら削り。底部回転へら削り後、一方向の手持ちへら削り。	石英 雲母 砂粒	90% P251 竈内
		B	4.3			黄灰色	
		C	7.6			普通	
3	須恵器	A	12.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちへら削り。底部回転へら削り後、へら削り。	長石 雲母 砂粒	40% P252 覆土下層
		B	4.1			黄灰色	(西壁寄り)
		C	7.9			普通	
4	須恵器	A	13.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反している。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちへら削り。底部回転へら削り後、へら削り。	雲母 砂粒	30% P253 覆土中層 (南東コーナー)
		B	4.0			黄灰色	
		C	8.2			普通	
5	高台付杯 須恵器	A	14.2	口縁部の一部欠損。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に不明瞭な稜を持ち、内側気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転へら削り。底部回転へら削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒	80% P254 覆土下層 (北東コーナー)
		B	5.2			黄灰色	
		D	8.8			普通	
		E	1.0				
6	高盤 須恵器	A	21.6	裾部・体部・口縁部の一部欠損。脚部はラッパ状に広がり、3孔を有する。裾部は短く、口唇部はつまみ上げられている。平底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。口縁端部は直立している。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転へら削り。脚部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒	70% P256 竈内
		B	16.2			灰白色	
		D	15.9			普通	
		E	12.0				
7	高盤 須恵器	A	22.1	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。口縁部は上位に不明瞭な稜を持ち、端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へら削り。	雲母 砂粒	30% P257 覆土上層～下層 (南東コーナー)
		B	3.2			黄灰色	
8	高盤 須恵器	B	11.3	裾部と脚部の破片。脚部はラッパ状に広がり、3孔を有する。裾部は短く、端部は直曲して垂下する。	脚部貼り付け、ロクロナデ。	長石 砂粒	40% P258 竈内 覆土中層 (竈周辺)
		D	16.6			黄灰色 普通	

9	炭 灰 痕 跡	A 12.6 B (2.2)	天井形から口縁部の破片。天井部は内層灰味に、壁やかに聞く。L1層部は外反して、端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部面転へラ削り。	長石 雲母 砂粒 灰色 普通	40% P259 龍内 覆土中層 (竜内辺)
	鉄 灰 痕 跡	A [36.0] B (5.2)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ、内層灰味に立ち上がる。L1層部は強く外反し、中位に明確な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	L1層部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タケキ、内面一部へラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 ぶい黄褐色 普通	10% P260 覆土上層 (竜手前)

第38号住居跡 (第94図)

位置 調査I区南西部、D5g6区。

規模と平面形 長軸3.52m、短軸3.50mの方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高は25~31cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 竜内辺を除き、巡っている。上幅12~30cm、下幅3~8cm、深さ2~6cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。南東コーナ一部に、竈の構築材のような灰褐色粘土が確認されており、その付近から第95図11の刀子、12の不明鉄製品が出土している。

竈 北壁中央に砂混じりの多量の黒褐色土と少量の灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで105cm、最大幅125cm、壁外への掘り込み64cmである。火床部は、床面を4cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているが、赤変硬化していない。煙道部は緩やかに外傾して、のち垂直に立ち上がる。第95図9の土師器小形甕は竈中央に逆位で置かれている。ほとんど火熱を受けていないが、支脚として利用されたと考えられる。

竈土層解説

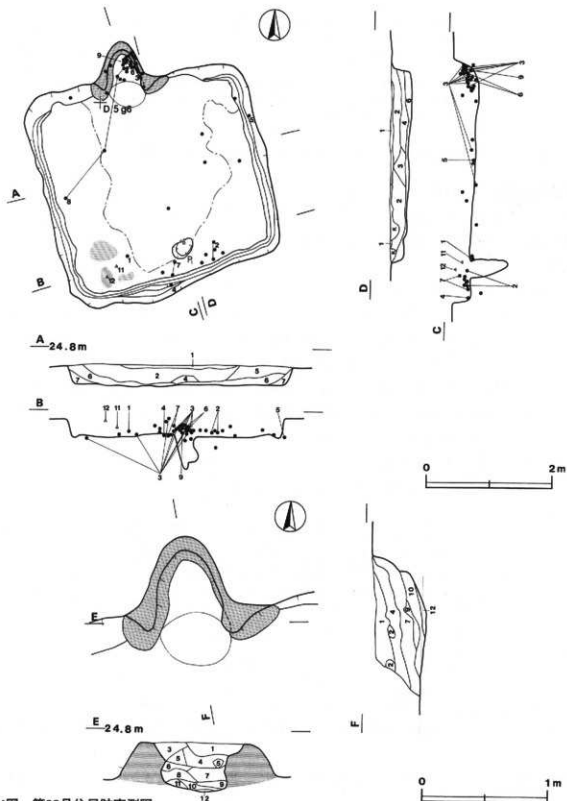
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 灰褐色 灰褐色粘土粒子を中ローム質、ローム粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 灰褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 灰褐色 ローム粒子を少量、灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 暗赤褐色 炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 暗赤褐色 焼土粒子を中量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 灰褐色 灰を多量、炭化粒子・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。火熱を受けた天井部の焼土が崩落した層と思われる。
- 暗赤褐色 炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 灰褐色 灰を多量、焼土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。灰を主体とした層と思われる。
- 灰褐色 灰を多量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。灰層と思われる。

ピット P1は長径42cm、短径25cmの楕円形で、深さ64cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットである。

覆土 7層からなり、ロームブロックを多量に含み、ブロック状の堆積状況がみられることから、人為堆積と思われる。

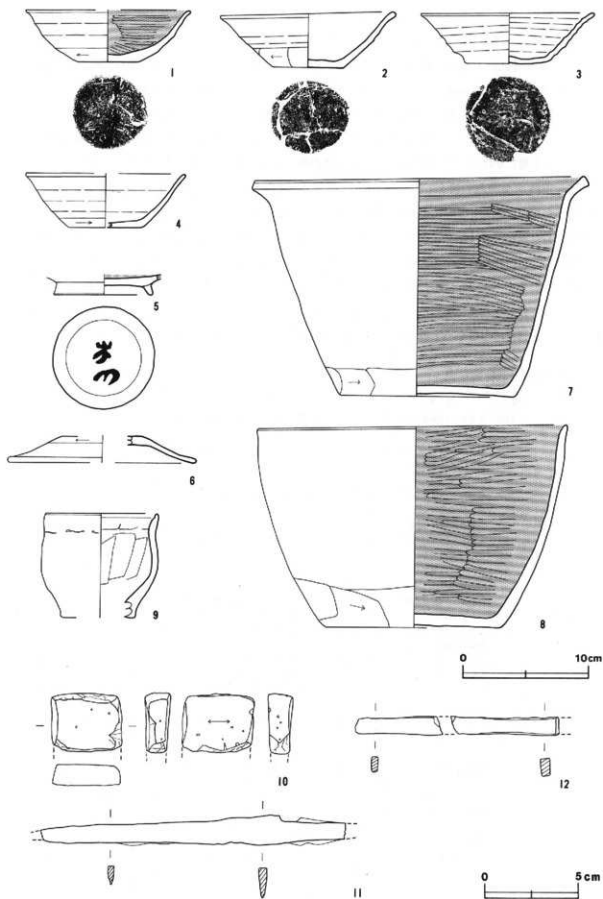
土層解説

- 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子を中量、炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロック・焼土粒子を中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。



第94図 第38号住居跡実測図

- 4 極暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を中量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを中量、炭化粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。



第95图 第38号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片169点, 須恵器片185点, 灰釉陶器1点, 石器1点(砥石), 鉄製品2点(刀子, 不明鉄製品)が出土している。遺物は, 竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが, 特に東半分集中している。竈内から出土したものは約13%, 北東部から出土したものが約26%, 南東部から出土したものが約27%, 南西部から出土したものが約16%, 北西部から出土したものが約16%, ビット内を含めその他が約2%である。また, 竈を除いた遺物の出土層位は, 覆土上層が約20%, 覆土中層が約48%で一番多く, 覆土下層, 床面直上とビット内が約32%である。第95図1の上師器坏, 2と4の須恵器坏が南壁寄りの覆土下層から, 7の土師器鉢が覆土中層から覆土下層にかけて, 3の須恵器坏, 6の須恵器蓋, 9の土師器小形甕が竈内から, 5の須恵器高台付坏(墨書「宗門」)が東壁の覆土下層から, 8の土師器鉢が竈内と西壁寄りの覆土下層から, 11の刀子と12の不明鉄製品が南西コーナー部の覆土上層と覆土中層から(粘土塊の上から)それぞれ出土している。また, 竈内から出土した灰釉陶器は把手付きの長頸瓶の肩部で, 把手は欠損している。細片であるため, 実測できなかった。時期は, 折戸10号窯式の8世紀後半と考えられることから, 後世の擾乱による混入の可能性が高い。竈内から出土した多くの土器片は, 火熱を受けていないこと, 8の土師器鉢は竈外から出土した破片と接合していることから, 住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代前期(9世紀前半)と考えられる。

第38号住居跡出土遺物観察表

図号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図1	土師器 環	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 中位と下位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位手持ちへラ削り。内面から底部内面にかけてへラ磨き。底部手持ちへラ削り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 褐色 普通	60% P263 内面黒色処理 覆土下層 (南壁寄り)
		B 4.2				
		C 5.0				
2	須恵器 環	A 14.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り後, ナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア 普通	60% P264 覆土下層 (南壁寄り)
		B 4.5				
		C 5.5				
3	須恵器 環	A 13.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 下位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転へラ削り後, ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰オリーブ色 普通	50% P265 二次焼成 竈内 (火床部東側)
		B 4.1				
		C 6.8				
4	須恵器 環	A [12.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 中位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り後, ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P266 覆土下層 (南壁寄り)
		B 4.3				
		C [6.0]				
5	高台付坏 土師器	B (1.6)	高台部から底部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。	底部外面回転へラ削り後, ナデ。内面へラ磨き。高台部貼付け, ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 内面 黒色 外面 灰黄褐色 普通	30% P267 内面黒色処理 底部外壁墨書「宗門」 墨土層(南壁寄り)
		D 8.0				
		E 0.8				
6	須恵器 蓋	A [15.0]	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で, 外反気味に開く。	天井部・口縁部内外面ロクロナデ。天井部回転へラ削り。	長石 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	10% P268 竈内 (火床部中央)
		B (2.1)				
7	鉢 土師器	A 26.3	体部と口縁部の 部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し, 中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。外面下部へラ削り。内面から底部内面にかけてへラ磨き。	長石 石英 砂粒 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	70% P269 内面黒色処理 覆土中層~下層 (南壁寄り)
		B 17.6				
		C 14.0				
8	鉢 土師器	A 24.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面横ナデ。体部外面下位へラ削り。内面から底部内面にかけてへラ磨き。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 褐色 普通	60% P270 内面黒色処理 竈内(火床部中央) 覆土下層 (西壁寄り)
		B 16.1				
C 14.0						

第95図 9	小形型 上脚器	A 8.9	底部と体部の一部欠損。平底。体部からL線部にかけ、内壁気味に立ち上がる。口縁部はわずかに反外し、踵部はつまみ上げられている。	L線部内外面横ナデ。体部内外両ナデ、内面一部ヘラナデ。底部平手持ちヘラ削り、輪積痕有り。	長石 石英 砂粒 にぶい橙色 普通	80% P271 鑑内 (火床部中央)
		B 8.3				
		C [6.0]				

図版番号	種 別	計 測 値			石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			
10	風 石	(3.0)	3.8	1.4	(23)	凝灰岩	覆土中層～下層 Q10

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重量 (g)
11	刀 子	(16.1)	1.6	0.4	(21)	覆土中層 (南西コーナー)	M26
12	不明鉄製品	(10.7)	1.0	0.5	(16)	覆土上層 (南西コーナー)	M27

第39A号住居跡 (第96図)

位置 調査I区南西部、D5b6区。

重複関係 本跡は第39B・41号住居跡と重複している。本跡が、第39B号住居跡の竈と第41号住居跡の南壁中央付近の覆土を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が新しい。

規模と平面形 長軸5.46m、短軸4.34mの長方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は43～54cmで、外傾して立ち上がる。北壁に灰褐色粘土混じりの褐色土を貼り付けて補強している。

北壁土層解説

- 褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を中量、焼土小ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。竈の掘り方部の上層と思われる。
- 褐色 灰褐色粘土粒子を多量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。粘土を泥状にして壁に貼り込んでいる。非常に緻密である。
- 暗褐色 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。竈の掘り方部の土層と思われる。
- 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。壁溝の覆土。
- 黒暗褐色 ローム粒子を多量、焼土中ブロックを中量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。貼床層。

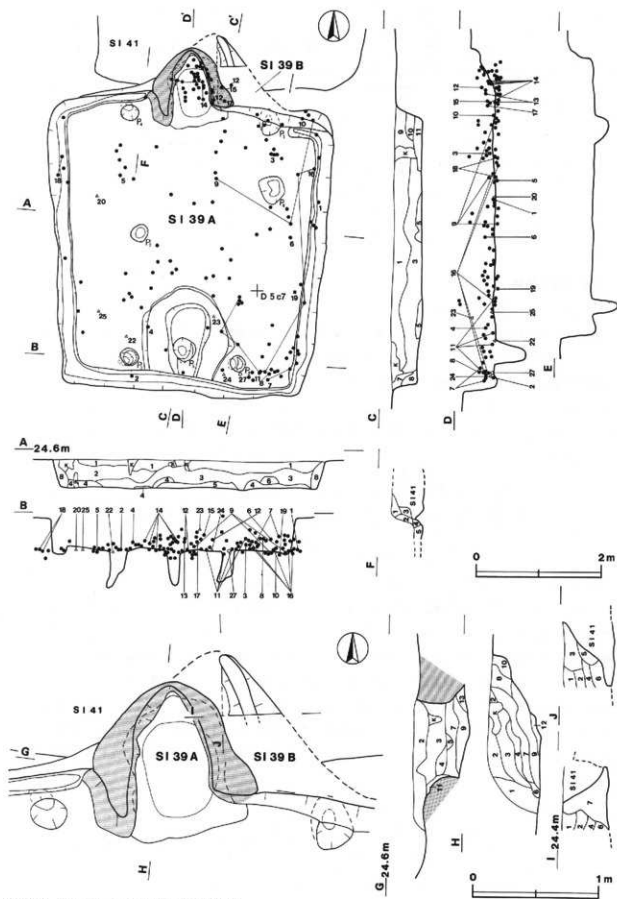
壁溝 全周している。上幅10～35cm、下幅4～27cm、深さ6～14cmで、断面形はU字状である。

床 余面が平坦で、全面に黒暗褐色土により貼床が施されて、締まっている。出入口ピット付近を除き、硬く踏み固められている所は確認できなかった。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで125cm、最大幅130cm、壁外への掘り込み50cmである。火床部は、床面を2cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は、緩やかに立ち上がる。東袖部内から出土した第97図12の須恵器鉢、13の土師器釜、第98図15の須恵器釜、第99図17の須恵器飯は、13を一番下にして進位で重ねられており、竈の補強材として利用されたものと思われる。

竈土層解説

- 灰 色 ローム粒子・焼土粒・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒・灰褐色粘土粒子・砂を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒・灰褐色粘土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 灰 褐色 砂を中量、ローム粒子・焼土粒・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 赤 褐色 焼土粒を中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 暗 褐色 灰褐色粘土粒子・砂を少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 灰 褐色 焼土小ブロック・焼土粒・灰褐色粘土粒子・砂を中量、ローム粒子・炭化粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 褐 色 焼土粒を多量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量、焼土中ブロック・灰を少量含み、締まりはない。



第96图 第39A·39B号住居跡実測图

9	暗褐色	砂を中量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。
10	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量、灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子を少量含む、粘性は弱く、硬く締まっている。
11	暗赤褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含む、粘性を帯び、締まっている。
12	暗褐色	灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・灰を少量含む、粘性は弱く、締まりはない。
13	褐色	灰褐色粘土粒子を中量含む、粘性を帯び、締まっている。甕の構築材と思われる。

ピット 7か所（P1～P7）。P1・P2とP4は長径26～42cm、短径22～33cmの楕円形で、いずれも深さ50～70cmである。P3は径約26cmほどの円形で、深さ62cmである。P1とP4は北壁寄りに、P2とP3は南壁寄りに位置し、同一線上にあることから、いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径36cm、短径33cmの円形で、深さ48cmである。南壁寄りに位置し、その周囲は馬蹄形状に3cmほど盛り上がり、踏み固められていることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は東壁寄りのP1とP2のほぼ同一線上P1寄りに位置し、長径40cm、短径37cmの不整形円で、深さ22cmである。P7は西壁寄りのP3とP4のほぼ同一線上半ばに位置し、径26cmの円形で、深さ7cmである。性格はどちらも不明である。

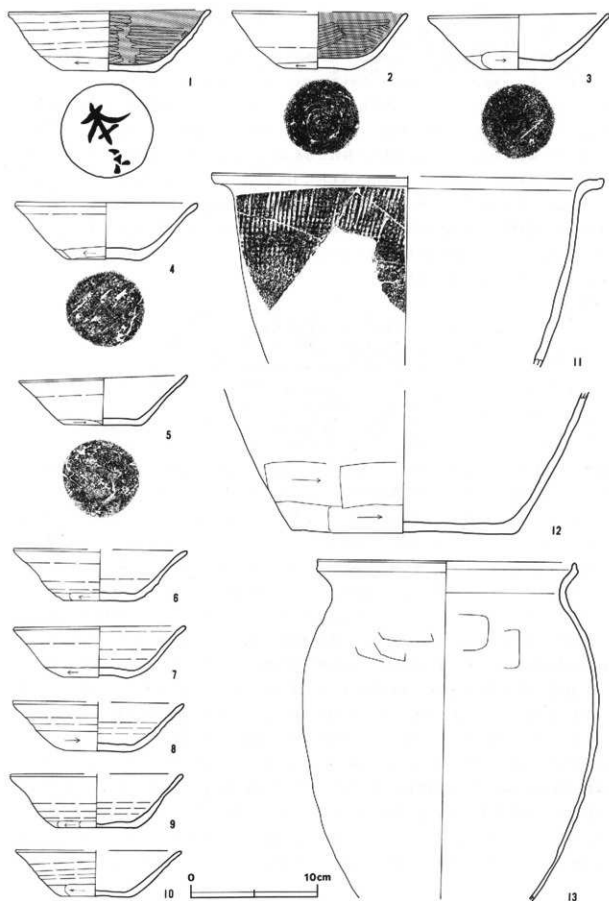
覆土 11層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

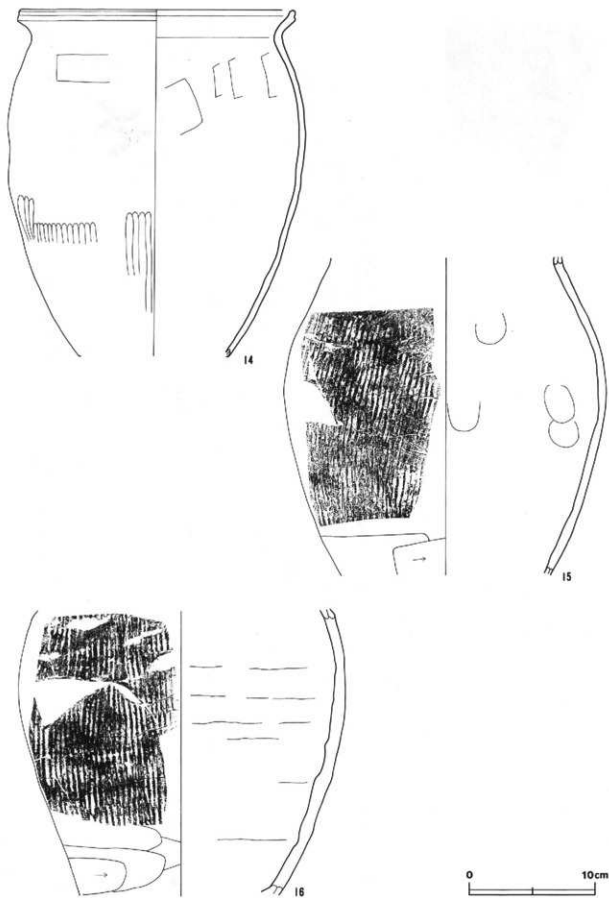
1	褐色	ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。
2	暗褐色	焼土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まっている。
4	暗赤褐色	焼土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。
5	いりば褐色	灰を中量、焼土小ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まっている。
6	黒褐色	焼土粒子を少量、ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを微量含む、粘性は弱く、締まっている。
7	黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。
8	褐色	ローム粒子・焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まっている。
9	いりば褐色	焼土粒子を中量、炭化粒子・焼土小ブロックを少量、ローム小ブロックを微量含む、粘性は弱く、締まっている。
10	暗褐色	灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含む、粘性を帯び、締まっている。
11	暗赤褐色	灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む、粘性を帯び、締まっている。

遺物 土師器片1064点、須恵器片776点、灰釉陶器2点、石器1点（砥石）、鉄製品7点（刀子5、鉄鏝2）が出土している。遺物は、甕と住居跡全体の覆土中から出土しており、甕内から出土したものは約9%、北東部から出土したものが約22%、南東部から出土したものが約22%、南西部から出土したものが約19%、北西部から出土したものが約16%、P6内、壁溝から出土したものを含めて、その他が約12%である。特に、東壁寄りに約44%が集中している。また、甕を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約27%、覆土中層が約24%、覆土下層と床面直上が約43%が一番多く、その他が約6%である。第97図1の上師器環（黒書「本戸」）が東壁寄りの覆土下層から、2の土師器環と4の須恵器環が南壁寄りの覆土下層から、3と10の須恵器環が北東コーナ部の覆土下層から、5の須恵器環と第99図18の灰釉陶器椀（黒書「T.」）が西壁寄りの床面直上から、第97図12の須恵器鉢と13の土師器甕、第98図15の須恵器甕、第99図17の須恵器甕が甕の東側袖部内から、第98図14の土師器甕が甕内火床部中央から、第99図19の砥石が東壁寄りの床面直上から、20の刀子と25の鉄鏝が西壁寄りの覆土下層から、22の刀子が南西コーナ部の覆土下層から、23の刀子が南壁寄りの覆土中層から、24の刀子が覆土下層からそれぞれ出土している。18の灰釉陶器椀は、狭猿窯産の黒笹14号甕式と考えられる。甕内から出土したその他の土器片の多くは、上位層から出土しており、住居廃絶後に投棄された可能性がある。

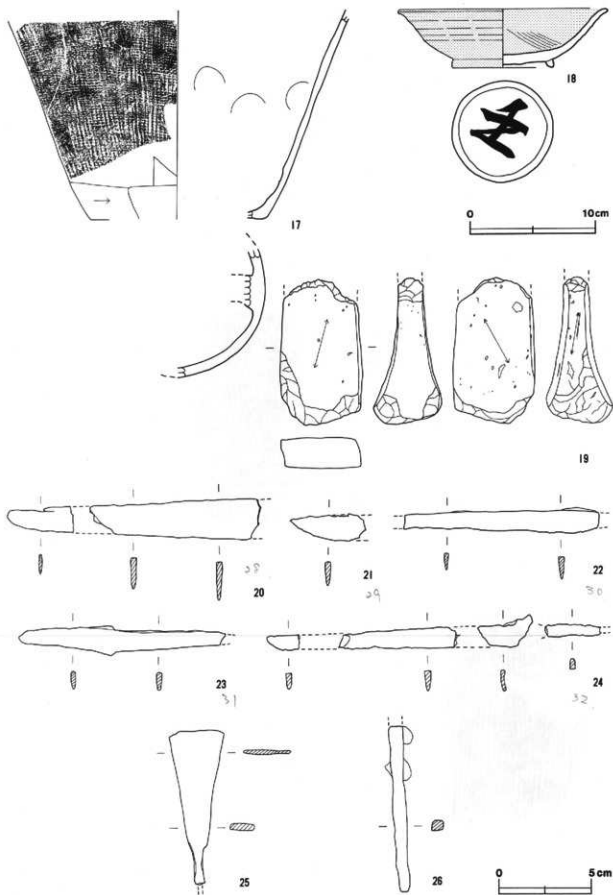
所見 本跡は第39B号住居跡の廃絶後に、甕を含む北壁を作り替えて使用されたと考えられる。その根拠は、第39B号住居跡の甕（火床面）の高さと本跡の甕（火床面）と床面の高さはほとんど等しく、床面に掘り込んだ形跡が確認されていないこと、北東コーナ部と北西コーナ部の壁際から竈脇にかけて灰褐色粘土による補強がされていることである。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀前葉）と考えられる。



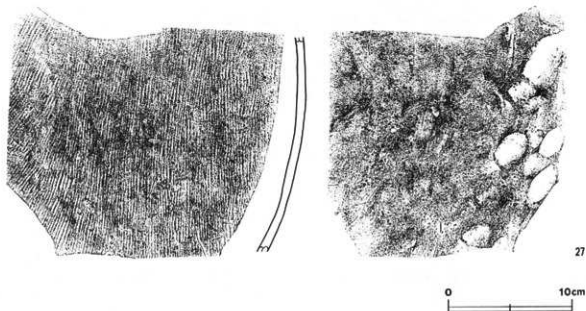
第97图 第39A号住居跡出土遺物実測図(1)



第98图 第39A号住居跡出土遺物実測図(2)



第99图 第39A号住居跡出土遺物実測図(3)



第100図 第39A号住居跡出土遺物実測図(4)

第39A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	土師器	A 15.9	平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 ぶい橙色 普通	100% P273 内面黒色処理 底部外面遺着「本内」 覆土下層 (東壁寄り)
		B 5.0				
		C 7.4				
2	土師器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 ぶい黄褐色 普通	60% P274 内面黒色処理 覆土下層 (南壁寄り)
		B 4.6				
		C 5.4				
3	須恵器	A 14.4	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位ヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 スコリア 砂粒 ぶい褐色 普通	90% P275 内面黒色処理 覆土下層 (北東コーナー)
		B 4.5				
		C 5.6				
4	須恵器	A 14.4	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は強く外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、一方のヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 黒褐色 普通	90% P276 覆土下層 (南壁寄り)
		B 4.5				
		C 5.8				
5	須恵器	A 13.5	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は強く外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	80% P277 床面直上 (西壁寄り)
		B 4.1				
		C 6.0				
6	須恵器	A [13.7]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	50% P278 覆土下層 (東壁寄り)
		B 4.0				
		C 5.6				
7	須恵器	A 13.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	50% P279 覆土中層~下層 (南東コーナー)
		B 4.1				
		C 5.6				

074 8	坏 須 恵 器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り後、へラ削り。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	40% P280 覆十中層 (南東コーナー)
		B 3.9				
		C 5.2				
9	坏 須 恵 器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへラ削り。底部回転へラ削り後、へラ削り。	長石 砂粒 黄灰色 普通	40% P281 覆上下層 (中央部、 東壁寄り、 北東コーナー)
		B 4.3				
		C 6.4				
10	坏 須 恵 器	A [13.2]	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへラ削り。底部回転へラ削り後、へラ削り。	雲母 砂粒 黄灰色 普通	70% P282 覆上下層 (北東コーナー)
		B 3.7				
		C 5.6				
11	鉢 須 恵 器	A [31.2]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい黄褐色 普通	20% P283 覆上下層 (南東コーナー) 床面点上 (中央部、東壁寄り)
		B (15.0)				
12	鉢 須 恵 器	B (11.3)	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ、外面下位へラ削り。底部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P287 覆内 (東袖内)
		C 18.0				
13	甕 土 師 器	A 20.6	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部へラナデ。	長石 石英 砂粒 にぶい棕色 普通	60% P284 覆内 (東袖内)
		B (26.9)				
第98図 14	甕 土 師 器	A 21.7	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部は棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部へラナデ。体部外面中位からへラ磨き。	長石 石英 砂粒 スコリア にぶい棕色 普通	60% P285 覆内 (火床部)
		B 27.4				
		C [12.0]				
15	甕 須 恵 器	B (25.2)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ、外面下位へラ削り。内面アテ具痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい黄褐色 普通	20% P286 覆内 (東袖内)
16	鉢 須 恵 器	B (22.6)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ、外面下位へラ削り。内面ナデ、輪襖痕有り。	雲母 スコリア 砂粒 にぶい黄褐色 普通	50% P301 覆上下層 (南東コーナー～ 北東コーナー)
第99図 17	甕 須 恵 器	B (16.5)	底部と体部の破片。平底。多孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ、下位へラ削り。内面アテ具痕有り。底部ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい黄褐色 普通	20% P288 覆内 (東袖内)
		C [14.0]				
18	碗 灰釉陶器	A 16.8	体部と口縁部の一部欠損。高台部は内状で、短く、直線的に薄く。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面へラ磨き。底部回転へラ削り。輪襖痕有り。	砂粒 内外面 灰白色 釉 浅黄色 良好	70% P289 底部外面磨き「工」 床面直上 (西壁寄り) 顔枚産産 (皿壁14号底式)
		B 4.7				
		D 8.0				
		E 0.6				

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
19	砥 石	(7.7)	4.4	3.6	(104)	凝灰岩	北西直上(東壁寄り)	Q11

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
20	刀 子	[13.4]	2.1	0.3	(22.0)		覆上下層 (西壁寄り)	M28
21	刀 子	(4.0)	1.5	0.3	(2.28)		覆上中層	M33

第99図22	刀	子	(10.3)	1.2	0.3	(11.26)	覆上下層 (南西コーナー)	M30
23	刀	子	(10.8)	1.6	0.3	(12.0)	覆十中層 (南壁寄り)	M31
24	刀	子	[17.6]	1.1	0.3	(9.83)	覆土下層 (南壁寄り)	M32
25	鉄	錐	(8.1)	2.9	0.3	(12.0)	覆土下層 (西壁寄り)	M29
26	鉄	錐	(8.8)	0.8	0.5	(9.65)	覆土中	M34

図取番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
第100図 27	変 須 器	体部	体部は内燐気味に立ち上がる。外面平行タタキ。内面ナデ、アテ具痕、指頭痕有り。	TP23 覆土下層 (南壁寄り) 灰色、外面 自然釉

第39B号住居跡 (第96図)

重複関係 本跡は第39A・41号住居跡と重複している。第39A号住居跡が、本跡の竈を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、本跡が第41号住居跡の南壁寄りの覆土を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

主軸方向 N-0°

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。東側の袖部の一部が残存してのみである。竈全体の規模は、不明であるが、残っている袖部は高さ(7)cm、幅(9)cmである。土層は7層に分けられた。そのうち、1～6層は天井部や袖部の崩落土など、7層は袖部の土層である。

竈土層解説

- 1 褐色 砂を中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 暗赤褐色 焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロックを少量、灰を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 暗赤灰色 灰を中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 5 にぶい赤褐色 ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 6 暗赤灰色 灰を多量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 7 にぶい赤褐色 灰を中量、焼土粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

所見 前述したように、本跡の竈と北壁が壊された後に、第39A号住居跡として再利用されたと考えられることから、規模、壁溝、床、ピットなどは第39A号住居跡と同じと推定される。時期は、重複している第39A・41号住居跡の推定時期から、奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。

第41号住居跡 (第101・102図)

位置 調査1区南西部、D5a6区。

重複関係 本跡は第39A・39B号住居跡と重複している。第39A・39B号住居跡が、本跡の南壁中央付近の覆土を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.26m、短軸3.94mの方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は56～59cmで、外傾して、一部垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅14～33cm、下幅7～18cm、深さ10～16cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁と東壁の2か所で確認された。北壁のものを第1号竈、東壁のものを第2号竈として記述する。遺存状態から、当初は東壁に第2号竈が作られ、破壊された後に、新たに北壁に第1号竈が作られ、住居廃絶時まで使用されていたと考えられる。

第1号竈は北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と

両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで171cm、最大幅165cm、壁外への掘り込み95cmである。火床部は、床面を7cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は、緩やかに立ち上がる。第104図11の土師器変は、東袖部内から逆位で出土していることから、竈の補強材として利用されたものと思われる。土層は11層に分けられた。そのうち、1～8層は天井部や袖部の崩落土や灰層など、9～11層は袖部断面の土層である。

第2号竈は東壁中央に砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部と煙道部が残存している。袖部は残存していない。床面にも粘土の痕跡は認められず、第2号竈は第1号竈に作り替えられる際に破壊されたものと考えられる。現状での規模は、火床部から煙道部まで(47)cm、最大幅(66)cm、壁外への掘り込み46cmである。火床部は、床面とほぼ同じ高さに作られており、火熱を受けているが、赤変硬化はしていない。煙道部は緩やかに立ち上がる。

第1号竈土層解説

- | | |
|----------|---|
| 1 暗褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子を中量、ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子を微量含む、締まりはない。 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を微量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 6 灰褐色 | 灰を多量、焼土中ブロックを中量、焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 7 暗褐色 | 灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 9 灰褐色 | 砂を含む灰褐色粘土を多量、焼土粒子を微量含む、粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 10 におい褐色 | ローム粒子・砂を含む灰褐色粘土を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 11 灰褐色 | ローム粒子・砂を含む灰褐色粘土を少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |

第2号竈土層解説

- | | |
|---------|---|
| 1 袖部赤褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを微量含む、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 2 褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 3 灰褐色 | 灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を微量含む、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 4 赤褐色 | 焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量、灰褐色粘土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 5 におい褐色 | 焼土粒子を多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを少量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを微量含む、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 6 におい褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含む、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 7 明赤褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 8 褐色 | ローム粒子を中量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |

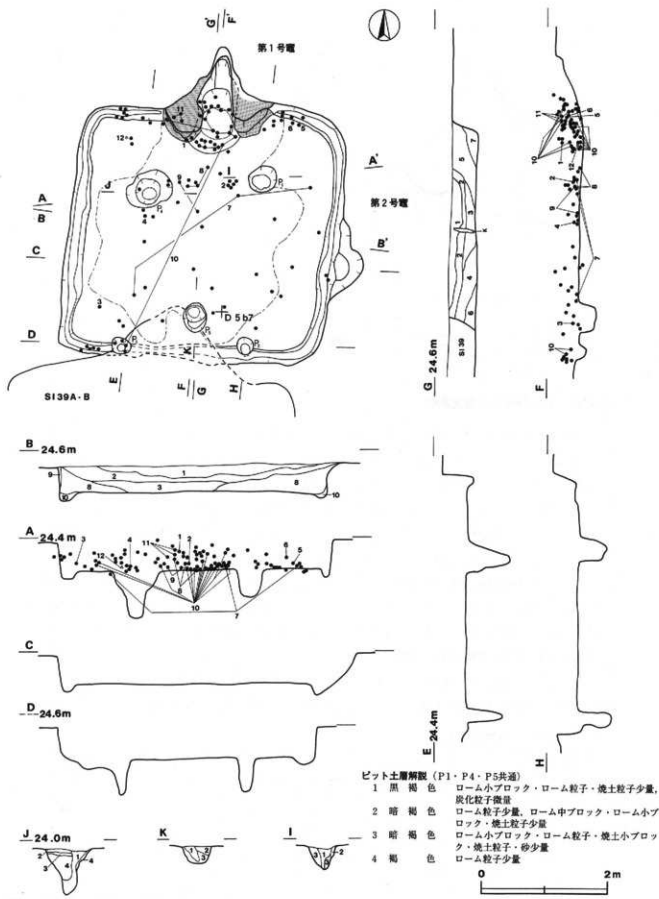
ピット 5か所(P1～P5)。P1からP4は長径31～75cm、短径22～56cmの楕円形で、いずれも深さ45～70cmである。各コーナー部寄りに位置し、いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径49cm、短径38cmの楕円形で、深さ30cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり、自然堆積と思われる。

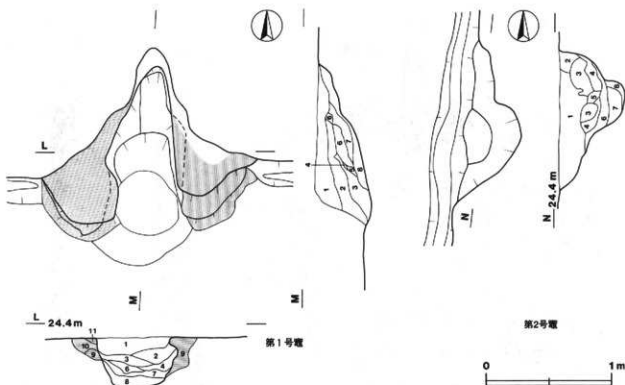
土層解説

- | | |
|--------|---|
| 1 黒褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子を中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子を中量、炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含む、粘性を帯び、締まっている。 |
| 6 黒褐色 | 黒褐色土粒子を中量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含む、締まっている。 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、炭化物・炭化粒子・焼土中ブロックを少量含む、粘性を帯び、締まっている。 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を中量、炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含む、粘性は弱く、締まっている。 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子を多量含む、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含む、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片604点、須恵器片452点、鉄製品1点(不明鉄製品)、礫1点が出土している。遺物は、竈と住



第101図 第41号住居跡実測図



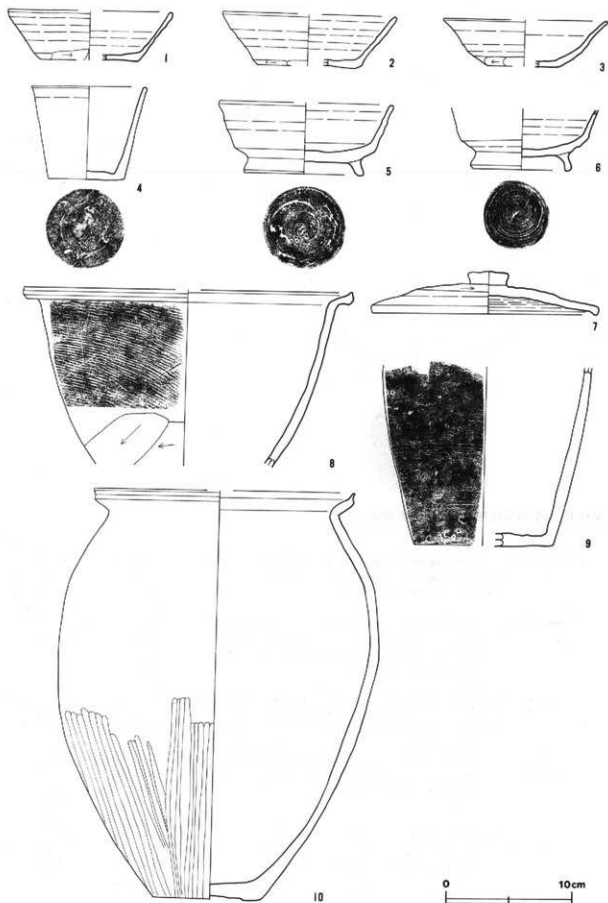
第102図 第41号住居跡電測図

居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約13%、北東部から出土したものが約20%、南東部から出土したものが約29%、南西部から出土したものが約17%、北西部から出土したものが約14%、ピット、壁溝から出土したものが約2%、その他が約5%である。特に、東壁寄りに約49%が集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約37%、覆土中層が約23%、覆土下層と床面直上が約36%、ピットと壁溝が約2%、その他が約2%である。第103図2の須恵器坏が中央部の覆土下層から、8の須恵器鉢が覆土中層から覆土下層にかけて、4のコップ形土器が南西部の覆土上層から覆土中層にかけて、および中央部の覆土下層から、5の須恵器高台付坏が北東コーナー部の覆土下層から、6の須恵器高台付坏が覆土中層から、7の須恵器蓋が中央部と東壁寄りの覆土下層と南西コーナー部の床面直上から、9の須恵器長頸壺が南西部の覆土中層と中央部の覆土下層から、10の土師器甕が南西コーナー部の覆土中層と竈手前の覆土下層、および竈内から、第104図11の土師器甕が竈内と覆土中からそれぞれ出土している。10の土師器甕は、焚口部から火床部中央にかけて出土しているが、火熱を受けていないことから、住居廃絶後に投棄された可能性がある。

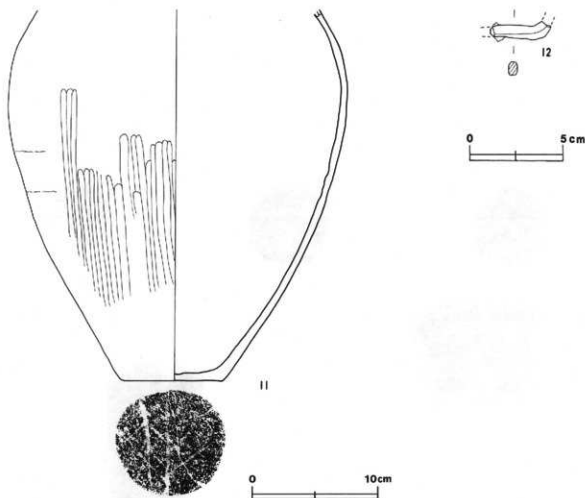
所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代中期（8世紀中葉）と考えられる。

第41号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図	1 須恵器 坏	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	30% P 290 覆土中層 (西袖手前)
		B 3.9				
		C [7.8]				
2	2 須恵器 坏	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 褐灰色 普通	30% P 291 覆土下層 (中央部)
		B 4.1				
		C [8.0]				
3	3 須恵器 坏	A [13.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに反反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰色 普通	20% P 292 覆土中層 (南西コーナー)
		B 3.7				
		C [5.8]				



第103图 第41号住居跡出土遺物実測図(1)



第104図 第41号住居跡出土遺物実測図(2)

第103図 4	コップ形土器 須恵器	A 9.2	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	長石 砂粒 黄褐色 普通	90% P 293 覆土上層 (南西部) 覆土中層 (南西部) 覆土下層 (中央部)
		B 7.4				
		C 6.0				
5	高台付坏 須恵器	A [13.8]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に明瞭な稜を持ち、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐灰色 普通	60% P 294 覆土下層 (北東コーナー)
		B 5.7				
		D 9.4				
		E 1.2				
6	高台付坏 須恵器	B (4.9)	高台部から体部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 灰白色 普通	60% P 295 覆土中層 (北東コーナー)
		D 8.2				
		E 1.2				
7	壺 須恵器	A 17.9	口縁部の一部欠損。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 暗灰黄色 普通	80% P 296 覆土下層 (東壁寄り、中央部) 床面直上 (南西コーナー)
		B 3.4				
		F 3.2				
		G 1.2				
8	鉢 須恵器	A [26.2]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。口縁部の上端と下端に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。	長石 砂粒 褐灰色 普通	40% P 297 覆土中層～下層 (中央部)
		B (14.0)				

第103図	長 頸 症	B (14.3)	底部から腰部の破片。平底。腰部から口縁部にかけて、内層気味に立ち上がる。	腰部内外面ロクロナデ。底部回転へラ削り、ナデ。	長石 砂粒 内面 灰色 袖 暗オリーブ色	30% P300 外面自然熱 覆土中層 (南西コーナー) 覆土下層(中央部)
9	肌 患 者	C [11.0]				
10	亮 土 師 器	A [20.7] B 32.5 C 8.5	底部から口縁部の破片。平底。腰部から口縁部にかけて、内層気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。腰部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。腰部内外面ナデ。外面下位へラ磨き。	石英 雲母 砂粒 粒色 普通	60% P288 壺内 覆土中層 (南西コーナー) 覆土下層(電手前)
第104図	亮 土 師 器	B (29.4) C 8.0	底部から腰部の破片。平底。腰部は内層気味に立ち上がる。	腰部内外面ナデ。腰部外面下位へラ磨き、輪襷痕有り。底部外面木葉痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 粒色 普通	60% P209 壺内(西縁) 覆土中

図版番号	種 別	計 測 値				出 上 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
12	不明鉄製品	(3.2)	0.7	0.6	(3.28)	覆土下層(北西コーナー)	M35

第44号住居跡(第105・106図)

位置 調査Ⅰ区南部、D 5 g9区。

規模と平面形 南西コーナー部分が調査区域外であることから、長軸(5.30)m、短軸(5.16)mの方形と推定される。壺の西側に棚部が付設されている。長さ194cm、幅82cmの長方形で、床からの高さは52cmである。棚部を除いた規模は、長軸5.16m、短軸4.86mの方形である。

棚部土層解説

- 1 褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロック・暗褐色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 黒褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 褐色 ローム粒子を中量、暗褐色土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を中量、暗褐色土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は59~64cmで、外傾して立ち上がる。

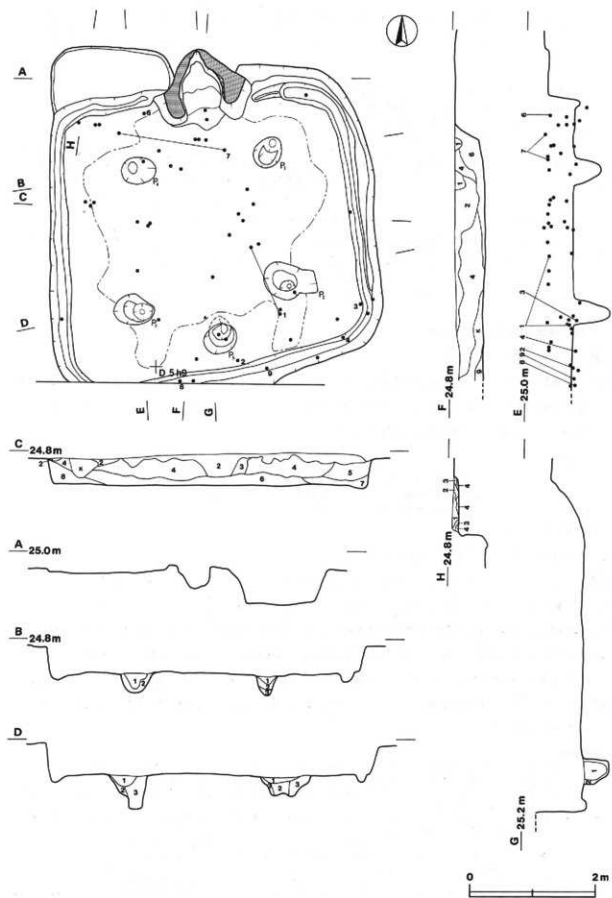
壁溝 全周している。上幅21~44cm、下幅7~15cm、深さ6~14cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

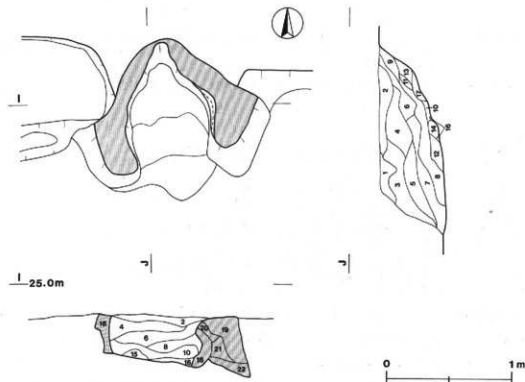
竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで127cm、最大幅156cm、壁外への掘り込み26cmである。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は、緩やかに立ち上がる。土層は22層に分けられた。そのうち、1~17層は天井部や袖部の崩落土など、18~22層は袖部断面の土層である。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土中ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土小ブロック・粘土粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 明赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・砂を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 灰黄褐色 砂を少量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 9 赤灰褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを微量含み、粘性を弱く、締まりはない。



第105图 第44号住居跡実測図



第106図 第44号住居跡遺実測図

- | | | |
|----|--------|---|
| 10 | にひい黄褐色 | 砂を多量、灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 11 | 赤褐色 | 焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 12 | 褐色 | ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 13 | 赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 14 | 灰褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、灰褐色粘土粒子・砂を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 15 | 明赤褐色 | 焼土粒子を多量、焼土小ブロックを中量、ローム粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 16 | 灰黄褐色 | ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 17 | 赤褐色 | 焼土小ブロックを多量、焼土粒子を中量、ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 18 | にひい褐色 | 灰褐色粘土粒子を多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 19 | 暗褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 20 | 褐色 | ローム粒子を多量、灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 21 | 暗褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 22 | 暗褐色 | 焼土粒子を中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。 |

ピット 5か所 (P1~P5)。P1からP4は長径52~67cm、短径40~45cmの楕円形で、いずれも深さ43~62cmである。各コーナー部寄りに位置し、いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径54cm、短径47cmの楕円形で、深さ67cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

- | | | | |
|----|---|------|--|
| P1 | 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量、焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| P2 | 1 | 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム大ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| | 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| P3 | 1 | 黒褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| | 2 | 暗褐色 | ローム粒子を多量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| | 3 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| P4 | 1 | 極暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

	2	暗色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを少量、炭化物・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
	2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、ローム大ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性を帯び、締まっている。

覆土 9層からなり、ローム・灰褐色粘土粒子を含む上層がブロック状に堆積していることから、人為堆積と思われる。

土層解説

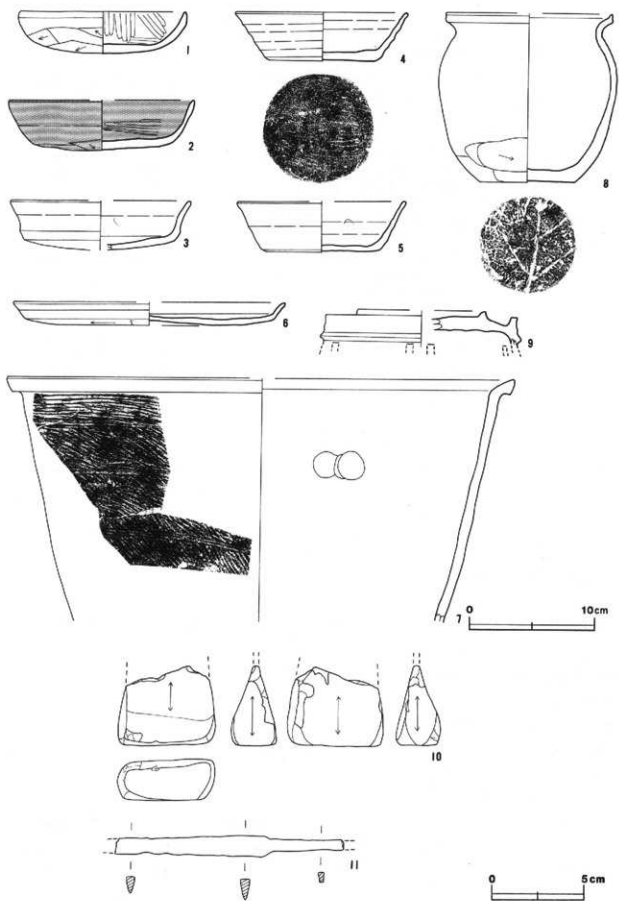
	1	灰褐色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子・灰褐色粘土小ブロック・粘土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・粘土粒子・砂を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	5	暗褐色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性はなく、締まっている。
	6	黒褐色	ローム粒子・灰褐色粘土大ブロック・粘土中ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	7	黒褐色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	9	褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片373点、須恵器片286点、土製品1点(支脚)、石器1点(砥石)、鉄製品1点(刀子)、礫4点、石1点(雲母片岩)、鉄滓2点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約5%、北東部から出土したものが約28%、南東部から出土したものが約22%、南西部から出土したものが約10%、北西部から出土したものが約17%、P1、P2、壁溝、西側欄部から出土したものが約2%、その他が約16%である。特に、東壁寄りに約50%が集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約51%、覆土中層が約16%、覆土下層と床面直上が約27%、欄部と床面より下のピットと壁溝からのものが約2%、その他が約4%である。第107図1の須恵器坏が中央部の覆土上層と南壁寄りの覆土下層から、2の土師器坏が北西部の覆土下層と南壁寄りの床面直上から、3の土師器坏と4の須恵器坏が南東コーナー部の床面直上から、5の須恵器坏が北西部の覆土上層と覆土下層、および竈内から、6の須恵器盤が北西部の覆土上層から覆土下層にかけて、8の上師器小形甕と9の須恵器円面甕が南壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片は、火熱を受けておらず、接合関係がない細片がほとんどであることから、住居廃絶後に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代前期(8世紀前葉)と考えられる。

第44号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	許測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図	土師器	A 132	底部から口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて、内側気味に立ち上がる。口縁縁部は直立する。	口縁部内外面・体部内外面横ナデ。体部外面から底部外面にかけて手持ちヘラ削り。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。	砂粒 褐色 普通	60% P302 覆土上層 (中央部) 覆土下層 (南壁寄り)
		B 3.3				
2	土師器	A [146]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、内側気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面横ナデ。体部外面から底部外面にかけて手持ちヘラ削り。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。	スコリア 砂粒 にぶい褐色 普通	50% P303 内外面黒色処理 床面直上 (南壁寄り) 覆土下層(北西部)
		B 4.0				
		C 10.0				
3	土師器	A [142]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、内側気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面横ナデ。底部外面ナデ。	スコリア 砂粒 にぶい褐色 普通	30% P304 床面直上 (南東コーナー)
		B 3.9				
		C [120]				



第107图 第44号住居跡出土遺物実測図

第107図 4	坏 須恵器	A 13.7	底面から口縁部の破片。平底。 体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナテ。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P305 床面直上 (南東コーナー)
		B 3.9				
		C 8.6				
5	坏 須恵器	A (13.2)	底面から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナテ。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	50% P306 窠内 覆土上層 (北西部) 覆土下層 (北西部)
		B 4.0				
		C 9.0				
6	甗 須恵器	A (21.6)	底面から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、上位と中位に明瞭な稜を持つ。内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナテ。外面下位回転ヘラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	30% P307 覆土上層～下層 (北西部)
		B 1.9				
		C (19.8)				
7	钵 須恵器	A (40.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、肩部は折り返されている。	口縁部内外面・体部内外面口クロナテ。体部外面平行タタキ、内面アテ具板有り。	雲母 砂粒 灰黄色 普通	20% P308 覆土上層～中層 (甗手前北西部)
		B (19.3)				
8	小形甗 上層器	A (13.3)	底面から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナテ。体部外面下位ヘラ削り、内面ヘラナデ。底部外面木書痕有り。	長石 石英 雲母 スコリア 砂粒 にぶい棕色 普通	50% P309 床面直上 (清野寄り)
		B 13.4				
		C 7.4				
9	円面甗 須恵器	A (15.2)	甗部の破片。内提・外提は断面が四角形。	甗部内外面口クロナテ。	雲母 砂粒 褐灰色 良好	20% P310 床面直上 (清野寄り)
		B (2.9)				

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
10	甗石	(4.2)	5.1	2.2	(52)	凝灰岩	覆土上層	Q12

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
11	刀	f	(12.0)	1.1	0.5	(13)	覆土中	M38

第45号住居跡 (第108図)

位置 調査Ⅰ区中央部、D 6b1区。

重複関係 本跡は第46号住居跡と重複している。本跡が、第46号住居跡の北西コーナー部寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸2.47m、短軸2.35mの方形である。

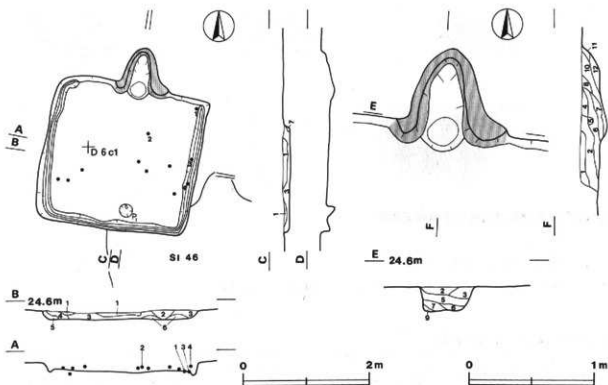
主軸方向 N-9°-W

壁 壁高は9～19cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁際の一部を除いて、巡っている。上幅13～21cm、下幅2～5cm、深さ4～6cmで、断面形はじ字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と内側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで82cm、最大幅93cm、壁外への掘り込み62cmである。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は、緩やかな階段状に立ち上がる。



第108図 第45号住居跡実測図

覆土層解説

- | | | |
|----|-----|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム中ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 2 | 灰褐色 | ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子を中量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 4 | 灰褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 5 | 灰褐色 | 砂を中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量含み、黒褐色土混じりで、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子を微量含み、黒褐色土混じりで、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 8 | 灰褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 9 | 暗褐色 | ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 10 | 暗褐色 | 焼土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 11 | 灰褐色 | 砂を中量、灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 12 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

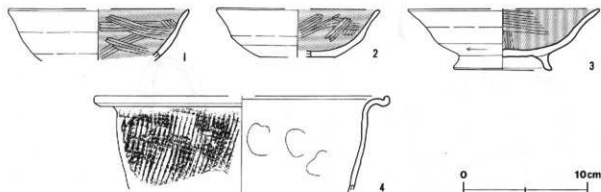
ピット P1は径20cmの円形で、深さ13cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり、ブロック状の堆積状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------------------|
| 1 | 灰褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはなく、崩れやすい。 |
| 3 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性はなく、硬く締まっている。 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 7 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 土師器片104点、須恵器片13点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約45%を占め、北東部から出土したものが約12%、南東部から出土したものが約15%、南西部から出土したものが約13%、北西部から出土したものが約6%、P1と壁溝から出土したものが約6%、その他が約3%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約89%を占める。床面より下のピットと壁溝からのものは約11%である。第109図1の土師器杯が北東コーナー部の床面直上から、2の土師器杯が中央部の覆土中層から、3の土師器高台付杯が東壁寄りの覆土上層と床面直上から、4の須恵器鉢が東壁寄り



第109図 第45号住居跡出土遺物実測図

の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀後葉）と考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図	坏	A [14.4]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 ぶい・黄褐色 普通	20% P311 内面黒色処理 床面直上 (北東コーナー)
2	坏	A [13.0] B 3.9 C [6.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてへラ磨き。底部回転へラ磨り後、ナデ。	雲母 砂粒 内面 黒色 外面 ぶい・橙色 普通	30% P312 内面黒色処理 覆土上層 (中央部)
3	高台付坏	A [15.5] B 4.9 D 8.0 E 1.3	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へラ磨り、内面から底部内面にかけてへラ磨き。底部外面回転へラ磨り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	砂粒 内面 黒色 外面 ぶい・橙色 普通	40% P313 内面黒色処理 底部外面磨付着 床面直上(東壁寄り) 覆土上層(東壁寄り)
4	鉢	A [23.7] B (7.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 ぶい・橙色 普通	10% P314 覆土上層 (東壁寄り)

第46号住居跡（第110図）

位置 調査I区中央部、D6c1区。

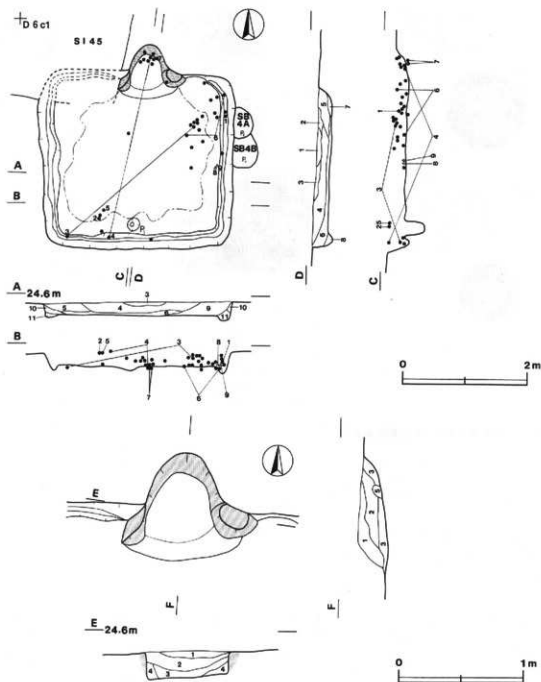
重複関係 本跡は第45号住居跡、第4A・4B号掘立柱建物跡と重複している。第45号住居跡が、本跡の北西コーナー部寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、本跡が、第4A号掘立柱建物跡のP6と、第4B号掘立柱建物跡のP6の一部を掘り込んでいることから、いずれより本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.16m、短軸2.88mの長方形である。

主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は30~35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周していたと推定される。上幅21~32cm、下幅4~12cm、深さ8~12cmで、断面形はU字状である。



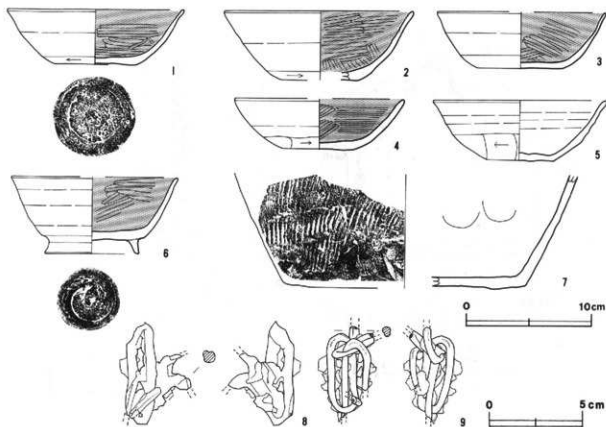
第110図 第46号住居跡実測図

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで87cm、最大幅106cm、壁外への掘り込み45cmである。火床部は、床面を4cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。焚口部から113cm奥の火床部中央に第111図7の須恵器鉢と土師器甕の破片を置き、その上に土製支脚を配置している。煙道部は、外傾して、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。



第111図 第46号住居跡出土遺物実測図

- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを微量含み、黒褐色土混じりで、粘性は弱く、締まりはない。
 4 褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 5 赤褐色 焼土ブロックで、粘性は弱く、締まっている。

ピット P1は径20cmの円形で、深さ33cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量、スコロア粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 4 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
 5 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
 6 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
 7 灰暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、炭化粒子を少量含み、締まっている。
 8 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を多量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを中量、ローム中ブロック・焼土大ブロック・焼土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 10 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロックを中量含み、締まりはない。
 11 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土器器146点、須恵器片47点、土製品1点(支脚)、鉄製品2点(鎖)が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものが約45%をしめる。北東部から出土したものが約21%、南東部から出土したものが約11%、南西部から出土したものが約8%、北西部から出土したものが約7%、壁溝から出土したものが約3%、その他が約5%である。特に、東壁寄りに約32%が集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約31%、覆土中層が約33%、覆土下層と床面直上が約11%。壁溝か

らのものが約5%、その他が約20%である。第111図1の土師器環が東壁寄りの覆土中層から、3の土師器環が東壁寄りの覆土中層と南西コーナー部の床面直上から、4の土師器環が竈内と南壁寄りの覆土上層から、5の須志器環が東壁と南壁寄りの覆土上層から、6の土師器高台付環が東壁寄りの覆土上層と床面直上から、7の須志器鉢が竈内の上製支脚の下から、8と9の鉢が東壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。なお、竈奥の土製支脚は火熱を受け大変もろくなっており、実測不可能である。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀前葉）と考えられる。

第46号住居跡出土遺物観察表

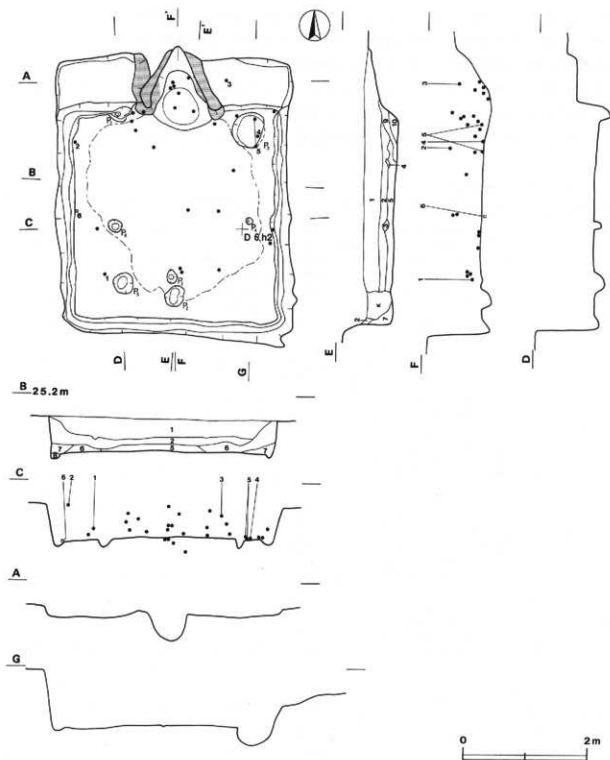
図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	子 辻 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第111図 1	土 師 器 環	A 14.0	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、下位に不明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へう削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転へう削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 内面 黒色 外面 ぶい褐色 普通	90% P315 内面黒色処理 覆土中層 (東壁寄り)
		B 4.4				
		C 6.6				
2	土 師 器 環	A 15.1	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へう削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部へう削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 ぶい黄褐色 普通	50% P316 内面黒色処理 覆土上層 (南壁寄り) 覆土中層(南東部)
		B 3.5				
		C [6.2]				
3	土 師 器 環	A [13.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に不明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転へう削り後、ナデ。	雲母 砂粒 内面 黒色 外面 ぶい褐色 普通	30% P317 内面黒色処理 覆土中層(東壁寄り) 床面直上 (南西コーナー)
		B 4.5				
		C 6.8				
4	土 師 器 環	A [13.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。体部外面下位手持ちへう削り。底部回転へう削り後、ナデ。	砂粒 内面 出色 外面 ぶい褐色 普通	30% P318 内面黒色処理 竈内 覆土上層 (南壁寄り)
		B 4.0				
		C 5.8				
5	須 志 器 環	A 13.7	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへう削り。底部回転へう削り後、一方向のへう削り。	長石 スコリア 砂粒 ぶい黄褐色 普通	80% P319 覆土上層 (東壁寄り、東壁寄り)
		B 4.9				
		C 5.3				
6	高台付環 土 師 器	A [13.3]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、下位に不明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転へう削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	50% P320 内面黒色処理 覆土上層 床面直上 (東壁寄り)
		B 6.1				
		D 7.4				
		E 1.1				
7	鉢	B (9.0)	底部から体部の破片。平底。体部は内響気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タケ、内面アケ具裏有り。	長石 石英 雲母 ぶい褐色 普通	30% P321 二次焼成 竈内
		C [19.3]				

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	鉢	(5.5)	-	-	(17)	覆土下層(東壁寄り)	M37A
9	鉢	(5.0)	-	-	(12)	覆土下層(東壁寄り)	M37B

第47号住居跡（第112・113図）

位置 調査Ⅰ区南部、D 6区I区。

規模と平面形 長軸4.43m、短軸3.69mの長方形である。竈両側の2か所に棚部が付設されている。東側の棚は、長さ135cm、幅76cmの長方形で、床面からの高さは34cmである。西側の棚は、長さ124cm、幅73cmの長方形で、床面からの高さは34cmである。棚部を除いた規模は、長軸3.71m、短軸3.69mの方形である。



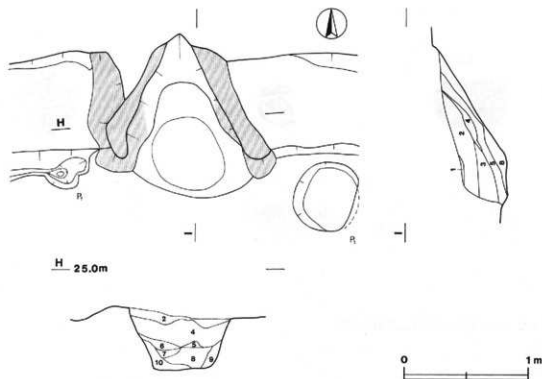
第112図 第47号住居跡実測図

主軸方向 N-3°-E

壁 壁高は47~54cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅15~33cm、下幅3~13cm、深さ6~14cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。



第113図 第47号住居跡電測図

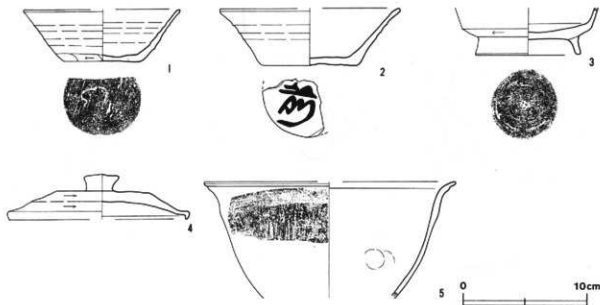
竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで135cm、最大幅152cm、壁外への掘り込み91cmである。火床部は、床面を12cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているが、中央部とそれに接している袖部の際が赤変しているのみで、硬化していない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 灰褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 灰褐色 灰褐色粘土粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・粘土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 6 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、炭化物・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 暗褐色 焼土粒子を多量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰を中量、炭化物・焼土大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 9 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、緩く締まっている。
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム中ブロック・焼土大ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット 7か所 (P1～P7)。P1とP2は、長径22～35cm、短径15～31cmの楕円形と不整楕円形で、深さ11～15cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。P3は、長径57cm、短径48cmの楕円形で、深さ29cmである。北東コーナー部寄りに位置している。P4・P6は、長径12～21cm、短径9～18cmの楕円形で、深さ12～15cmである。それぞれ東壁寄りと西壁寄りに位置している。また、P5は、径33cmほどの円形で、深さ15cmである。南壁寄りに位置している。P7は、長径36cm、短径17cmの不定形で、深さ17cmである。北壁寄りに位置している。P3～P7はともに性格は不明である。

覆土 10層からなり、自然堆積と思われる。



第114図 第47号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 2 黒褐色 ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 3 明褐色 ソフトロームブロックで、粘性を帯び、締まっている。
 4 灰褐色 灰褐色粘土ブロックで、粘性を帯び、締まっている。
 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
 7 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 8 暗褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 9 にぶい褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
 10 褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。

遺物 土師器227点、須恵器片235点、自然遺物1点（漆膜と漆紙）、礫1点、鉄滓1点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約6%、北東部から出土したものが約15%、南東部から出土したものが約23%、南西部から出土したものが約31%、北西部から出土したものが約22%、棚部から出土したものやその他のものが約3%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約30%、覆土中層が約21%、覆土下層と床面直上が約44%と一番多く、その他が約5%である。第114図1の須恵器坏が南西コーナー部の覆土下層から、2の須恵器坏（墨書「前」）が北西コーナー部の覆土上層から、3の須恵器高台付坏が東側の棚部から、4の須恵器蓋が北東コーナー部の覆土下層から、5の須恵器鉢が覆土下層と床面直上からそれぞれ出土している。また、漆膜と漆紙（写真のみ掲載）が西壁寄りの床面直上から出土しているが、これは漆容器として使われていた曲げ物に入っていた漆が硬化したもので、蓋として使われていた紙とともに、曲げ物の木胎が腐食した後に残存したものと考えられる（付章参照）。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第47号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	須恵器	A [12.7]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、内壁気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 砂粒 暗灰黄色 普通	40% P322 覆土下層 (南西コーナー)
		B 4.2				
		C 6.1				

第114号	環 須恵器	A [14.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナ。	雲母 砂粒 内面 灰黄褐色 外面 黒色 普通	10% P 323 底部内面語言前層 復十上層 (北西コーナー)
		B 4.6				
		C 7.4				
3	高台付環 須恵器	B (3.8)	高台部から体部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナ。	長石 石英 砂粒 陪青灰色 普通	50% P 324 覆十上層 (東側側部)
		D 8.5				
		E 1.5				
4	蓋 須恵器	A [14.2]	つまみから口縁部の破片。足高なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、外反気味に開く。口縁部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナ。頂部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 灰色 普通	60% P 325 覆十下層 (北東コーナー)
		B 3.6				
		F 2.9				
		C 1.3				
5	鉢 須恵器	A [20.0]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、小位に明瞭な稜を持つ。肩部は横につまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面平行タタキ。後ヘラナデ。体部内面指頭痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	20% P 326 覆十下層 (北東コーナー) 床面直上 (北東コーナー)
		B (9.3)				

写真図版 番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		径(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
47-6	漆絵と漆紙	14.0	2.8	(1256)	床面直上(古銅壺溝)	同 銅壺の底の土層に埋め込まれた漆器の残片

第48号住居跡 (第115図)

位置 調査1区中央部、D 6 a6区。

重複関係 本跡は第46・47号土坑と重複している。第46号土坑が本跡の南壁中央の覆土を、第47号土坑が本跡の中央部から竈にかけて床面を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.73m、短軸3.48mの方形である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は42~52cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅18~60cm、下幅9~38cm、深さ8~12cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

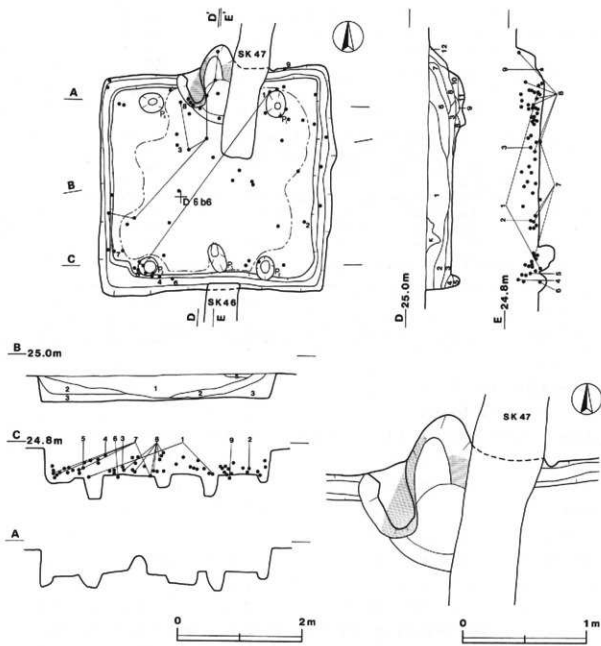
竈 北壁中央に砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と西側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで125cm、最大幅(89)cm、壁外への掘り込み54cmである。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は、階段状に立ち上がる。

ピット 5か所(P1~P5)。P1・P2・P4は長径39~43cm、短径29~31cmの楕円形で、いずれも深さ33~35cmである。P3は径30cmの円形で、深さ37cmである。各コーナー部寄りに位置し、いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径50cm、短径24cmの楕円形で、深さ29cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 12層からなる。1~5層までが住居跡内の上層で、自然堆積と思われる。6~12層は竈の土層である。

土層解説

- 褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 褐色 ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 灰赤褐色 焼土粒子を中量、ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

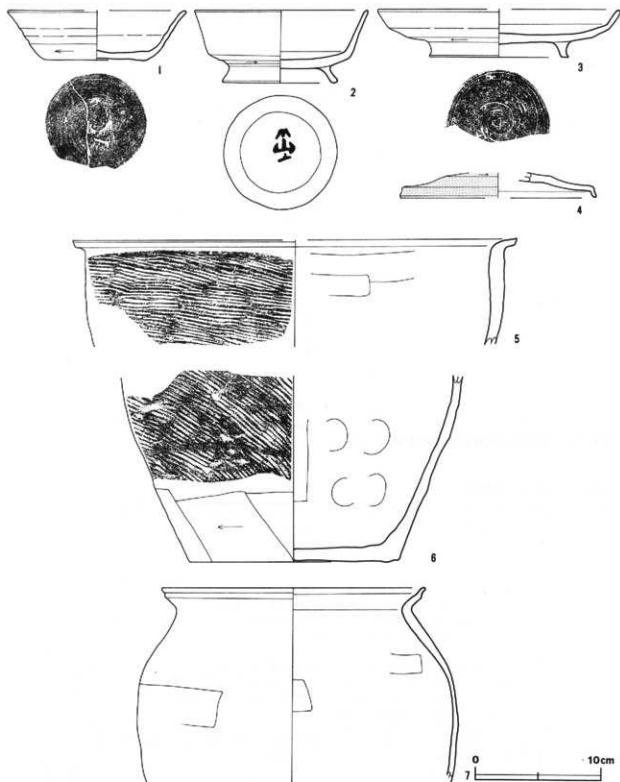


第115図 第48号住居跡実測図

- 7 黒褐色 灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 8 暗赤褐色 焼土粒子を多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 9 極暗赤褐色 炭化粒子を中量、焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 10 にぶい赤褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 11 暗赤褐色 焼土粒子を中量、ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 12 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片373点、須恵器片129点、石製品1点（紡錘車）、石器2点（砥石）が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約11%、北東部から出土したものが約22%、南東部から出土したものが約12%、南西部から出土したものが約25%、北西部から出土したものが約21%、ピットと壁溝から出土したものが約3%、その他が約6%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約32%、覆土中層が約36%、覆土下層と床面直上が約28%、ピットと壁溝からのものが約4%である。

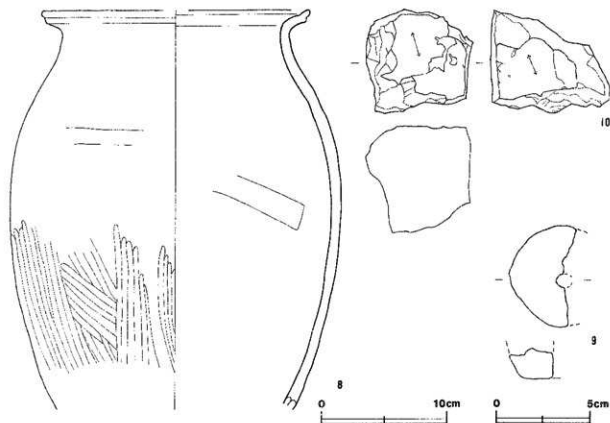
第116図1の須恵器杯が竈東側と南西コーナー部の床面直上から、2の須恵器高台付杯（墨書「□山□」）が東



第116図 第48号住居跡出土遺物実測図(1)

壁寄りの覆土下層から、3の須恵器鉢が中央部の覆土下層から、5の須恵器鉢が南西コーナー部の覆土下層から、6の須恵器鉢が南壁寄りの床面直上から、7の土師器甕が南壁寄りの覆土下層と竈手前の床面直上から、第117図8の土師器甕が竈手前の床面直上と竈内、および覆土上層から、9の石製紡錘車が北壁際の床面直上から、10の砥石が北西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。



第117図 第48号住居跡出土遺物実測図(2)

第48号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	須恵器 環	A [14.0]	底部から口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 灰青色 普通	70% P328 床面直上 (龍東側) (南西コーナー)
		B 3.9				
		C 8.0				
2	高台付須恵器 環	A 13.8	高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ、下位に明瞭な稜を持つ。直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼付け、ロクロナデ。	砂粒 灰白色 普通	100% P329 底部外面遺迹 「口」下層 覆土下層 (東壁寄り)
		B 5.8				
		D 9.2				
		E 1.3				
3	須恵器 鉢	A [19.4]	高台部から底部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ、中位と下位に明瞭な稜を持つ。内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼付け、ロクロナデ。	長石 石英 砂粒 灰青色 普通	50% P330 覆土下層 (中央部)
		B 3.8				
		D 11.0				
		E 1.2				
4	須恵器 蓋	A [15.6]	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、外反気味に開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P332 外面一部自然釉 覆土下層 (南壁寄り)
		B (2.0)				
5	須恵器 鉢	A [35.4]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	長石 砂粒 灰青色 普通	20% P333 覆土下層 (南西コーナー)
		B (8.4)				
6	須恵器 鉢	B [14.8]	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。アタ具痕有り。底部ナデ、モミ痕有り。	石英 雲母 砂粒 暗灰黄色 普通	30% P334 床面直上 (南壁寄り)
		C 16.8				

第116図	発 7	土師器	A 21.0 B (15.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内壁気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明確な線を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 橙色 普通	30% P335
第117図	発 8	土師器	A [2L.0] B (31.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内壁気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明確な線を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。外面中位へラ磨き。	石英 雲母 砂粒 スゴリア にぶい赤褐色 普通	30% P336 甕内床面上 (甕手前) 覆土層

図版番号	種 別	計 測 値					石 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
9	紡錘車	5.4	(3.5)	(1.9)	[0.9]	(23)	滑 石	床面直上(北壁部)	Q13
10	灰 石	5.7	5.7	3.7	-	(183)	凝灰岩	甕土層(北西部)	Q14

第49号住居跡 (第118図)

位置 調査Ⅰ区中央部、D 6 d4区。

重複関係 本跡は第6号掘立柱建物跡と重複している。本跡が、第6号掘立柱建物跡のP4の一部とP5を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.32m、短軸3.00mの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は12～15cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅14～25cm、下幅5～11cm、深さ6～8cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

甕 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部が残存している。また、袖部を構築していた粘土板が確認されている。規模は、煙道部から突口部まで86cm、最大幅[90]cm、壁外への掘り込み52cmである。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

甕土層解説

- 1 灰 黄 色 灰褐色粘土粒子・砂を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 灰 褐 色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、砂を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 赤 褐 色 ローム粒子・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 褐 色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 にぶい褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 にぶい褐色 砂混じりの灰褐色粘土粒子を多量含み、粘性を帯び、締まっている。

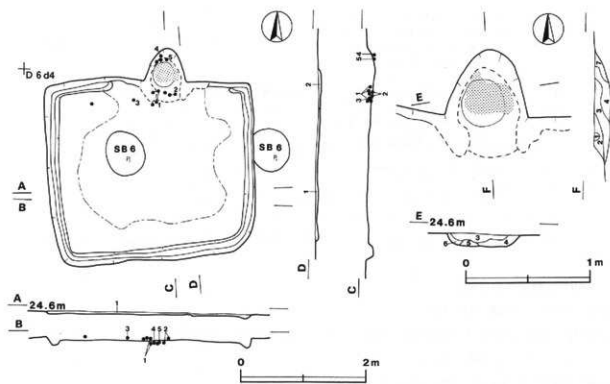
覆土 2層からなるが、覆土が浅いため堆積状況は不明である。

土層解説

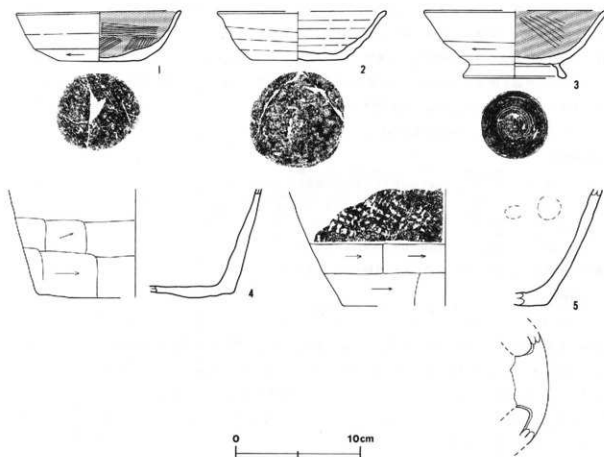
- 1 黒 褐 色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、緩く締まっている。
- 2 灰 褐 色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、緩く締まっている。

遺物 土師器40点、須恵器片8点が出土している。遺物は少数で、甕と住居跡全体の覆土中から出土している。また、第119図1の土師器が甕内と甕手前の覆土中から、2の須恵器が甕内と北西部の覆土中から、3の土師器高台付杯が甕西側の覆土中から、4の須恵器鉢と5の須恵器甕が甕内の煙道部からそれぞれ出土している。突口部付近から出土した土器は、二次焼成を受けておらず、接合関係がほとんどないことから、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。



第118图 第49号住居跡実測図



第119图 第49号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	土 師 器	A 13.2	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけヘラ巻き。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 内面 黒褐色 外面 ぶい赤褐色 普通	60% P 337 内面黒色処理 二次焼成 甕内灰土中 (庵千塚)
		B 4.1				
		C 6.4				
2	土 師 器	A [13.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 ぶい褐色 普通	60% P 338 二次焼成 甕内灰土中 (北西部)
		B 3.9				
		C 7.4				
3	高台付土師器	A [14.6]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけヘラ巻き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 褐色 普通	50% P 339 内面黒色処理 甕上中 (庵西側)
		B 5.4				
		D 8.2				
		E 1.2				
4	鉢 須 恵 器	B (8.8)	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面下位ヘラ削り、内面ヘラナデ。底部内外面ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア ぶい黄色 普通	20% P 340 二次焼成 甕内 (煙道部)
		C [16.5]				
5	甕 須 恵 器	B (9.3)	底部から体部の破片。平底。多孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。内面ナデ、指領痕有り。底部内外面ナデ。	長石 石英 砂粒 ぶい黄褐色 普通	10% P 341 二次焼成 甕内 (煙道部)
		C [16.5]				

第50号住居跡 (第120図)

位置 調査Ⅰ区中央部、D 6 b7区。

重複関係 本跡は第26号掘立柱建物跡、第352・353号土坑と重複している。第352号土坑が、本跡の南西コーナー一部寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、本跡が、第26号掘立柱建物跡のP1とP2、第353号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.09m、短軸2.80mの長方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は32~42cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅18~32cm、下幅2~10cm、深さ2~4cmで、断面形はU字状である。

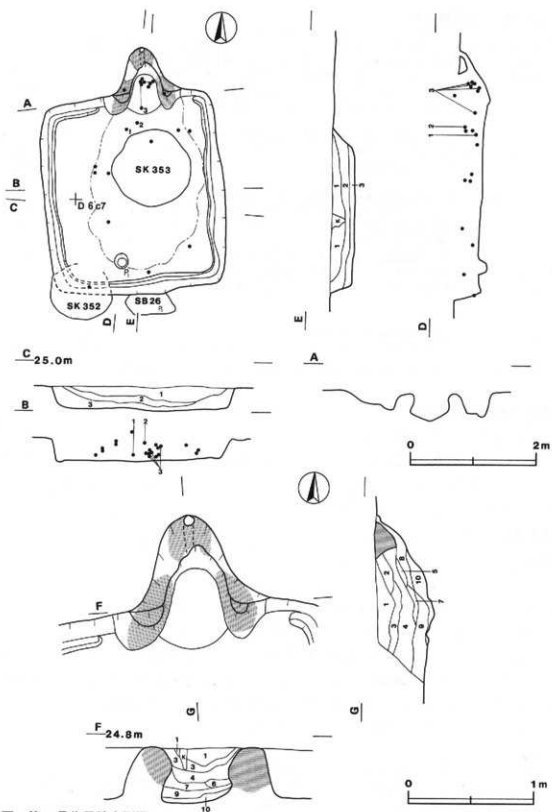
床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央やや東寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで106cm、最大幅111cm、壁外への掘り込み130cmである。火床部は、床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受けているが、赤変硬化していない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がり、火熱を受けて赤変している。

甕土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粘土粒子を多量、ローム粒子を中量、焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含む。粘性は弱く、締まりはない。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まりはない。
- 5 暗褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
- 6 ぶい赤褐色 ローム粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロックを中量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
- 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、焼土小ブロックを微量含む。粘性を帯び、締まっている。
- 8 褐色 ローム粒子を多量、焼土小ブロック・焼土粒子を中量、炭化粒子・焼土小ブロックを少量含む。粘性は弱く、締まりはない。
- 9 暗褐色 ローム粒子・砂を少量、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含む。粘性は弱く、締まっている。
- 10 褐色 ローム粒子を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含む。粘性を帯び、締まっている。

ピット P1は径22cmの円形で、深さ15cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

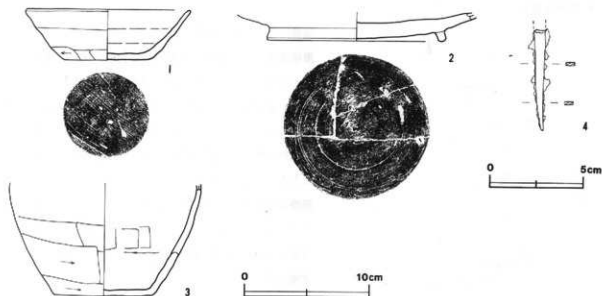


第120図 第50号住居跡実測図

覆土 3層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。



第121図 第50号住居跡出土遺物実測図

- 2 褐 色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
 3 暗 褐 色 ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器172点、須恵器片49点、鉄製品1点(鉄鏝の基部)が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが、竈内から出土したものが一番多く、約36%を占める。北東部から出土したものは約14%、南東部から出土したものは約19%、南西部から出土したものは約16%、北西部から出土したものは約8%、その他が約7%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約52%、覆土中層が約37%、覆土下層と床面直上が約9%、その他が約2%である。第121図1の須恵器杯が竈手前の覆土下層から、2の須恵器盤が覆土上層から、3の土師器小形甕が竈内からそれぞれ出土している。

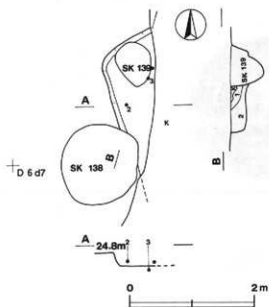
所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。

第50号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第121図 1	杯 須恵器	A 13.0	平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 灰白色 にぶい褐色 普通	100% P342 覆土下層 (竈手前)
		B 4.1				
		C 7.0				
2	盤 須恵器	B (23)	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 灰白色 普通	50% P343 覆土上層 (竈手前)
		D 14.4				
		E 9.0				
		E (0.9)				
3	小形甕 土師器	B (9.0)	底部から体部の破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ、外面下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。輪襷痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 灰黄褐色 普通	30% P344 二次焼成 竈内
		C 8.0				

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	鉄 鏝	(5.5)	0.7	0.15	(2.84)	覆土中	M38 鉄鏝の基部

第51号住居跡 (第122図)



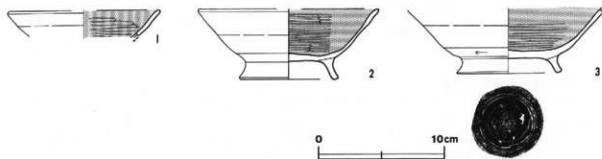
第122図 第51号住居跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含む。粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含む。粘性を帯び、締まっている。

遺物 土師器21点、須恵器2点が出土している。遺物は、ほとんどが細片で、覆土上層から出土している。第123図1の土師器が覆土上層から、2の土師器が西壁寄りの覆土下層から、3の土師器が北西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係と出土遺物から、平安時代前期(9世紀中葉)と考えられる。



第123図 第51号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	土師器	A [12.0] B (2.2)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内嚔気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面へラ磨き。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 にぶい黄褐色 普通	10% P345 内面黒色処理 覆土上層

位置 調査I区中央部、D 6 c7区。

重複関係 本跡は第26号掘立柱建物跡、第138・139号土坑と重複している。第138号土坑が本跡の南壁寄りの床面を、第139号土坑が本跡の北東コーナ一部付近の床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、第26号掘立柱建物跡との新旧関係については、切り合いがないことから不明である。

規模と平面形 形状は不明である。ほとんどが攪乱を受けているため、残存している部分は、東西軸(0.99)m、南北軸(1.96)mの範囲だけである。

主軸方向 不明

壁 壁高は20~25cmで、外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、締まっている。

覆土 2層からなり、自然堆積と思われる。

第123号	高台付床 土 脚 器	A [14.3] B 3.6 D 7.8 E 1.7	高合部から口縁部の破片。高合部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ、下位に明瞭な線をもち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面から底部内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高合部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 スコリア 砂粒 内面 黒色 外面 ぶい・橙色 普通	40% P580 内面黒色処理 覆十下層 (西壁寄り)		
			高台付床 土 脚 器	B (5.2) D 8.0 E 1.1	高合部から体部の破片。高合部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけ、中位と下位に不明瞭な線をもち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下部回転ヘラ削り、内面に内面にかけヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 内面 黒色 外面 ぶい・橙色 普通	50% P591 内面黒色処理 覆十下層 (北西コーナー)

第53号住居跡 (第124図)

位置 調査Ⅰ区南部，D6区5区。

重複関係 本跡は第54号住居跡と重複している。本跡が、第54号住居跡の南壁寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 竈を含む北壁以外が調査区域外であることから、東西軸3.61m、南北軸(1.04)mの長方形または方形と推定される。竈の両側2か所に棚部が付設されている。東側の棚は、長さ121cm、幅40cmの不整長方形で、床面からの高さは39cmである。西側の棚は、長さ135cm、幅70cmの長方形で、床面からの高さは35cmである。衝部を除いた規模は、東西軸3.56m、南北軸(0.60)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は46~52cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。

竈 北壁中央に砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで123cm、最大幅132cm、壁外への掘り込み42cmである。火床部は、床面を5cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて若干赤変しているが、あまり硬化していない。焚口部から63cm奥の火床部中央に第125図8の土製支脚の基部を埋め込んでいる。また、土脚器高台付床を支脚の上に進位で重ね、同時に支脚として利用していたと思われる。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

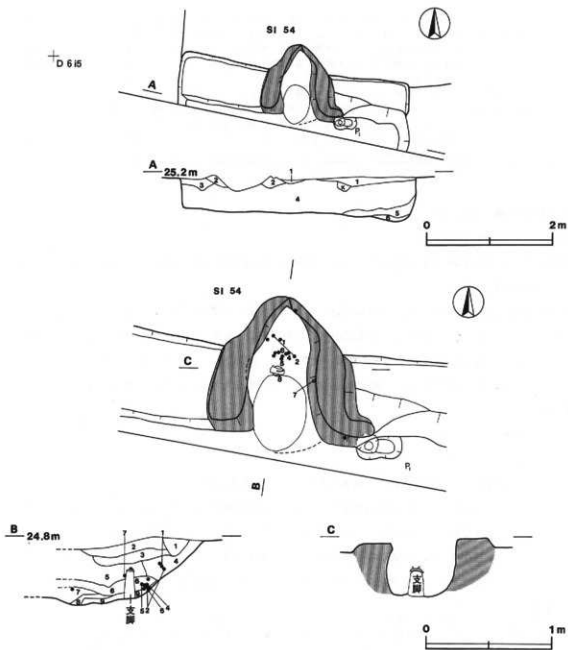
- 1 褐色 灰褐色粘土粒子を多量、ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化物・焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 極暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム粒子・炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 暗褐色 焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 極暗赤褐色 焼土中ブロックを中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化物粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 7 極暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量、炭化物粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット P11は長径37cm、短径16cmの不整楕円形で、深さ16cmである。竈東端部に位置し、性格は不明である。

覆土 6層からなり、4層は一度に埋め戻した状況がうかがえることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子を中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、炭化物・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 3 黒褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 4 極暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。

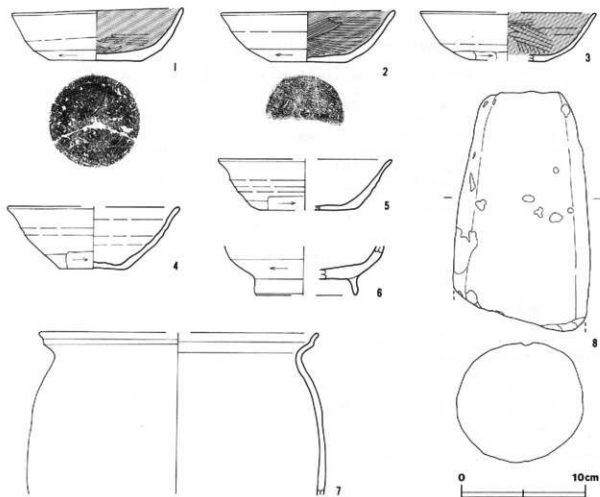


第124図 第53号住居跡実測図

- 5 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、焼土大ブロック・灰褐色粘土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。

遺物 土師器片107点、須恵器片60点、土製品1点(支脚)が出土している。遺物は、竈とその周辺に集中している。竈内から出土したものは約43%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約98%を占め、覆土下層と床面直上が約2%である。第125図1と2の土師器坏、4と5の須恵器坏、6の須恵器高台付坏、7の土師器甕、8の土製支脚が竈内からそれぞれ出土している。竈奥から出土した多くの土器は、二次焼成を受けておらず、接合関係もほとんどないことから、住居廃絶後に投棄されたと考えられる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。



第125図 第53号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 1	土器 器	A 13.7	底部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明確な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 スコリア 砂粒 内面 黒色 外面 黒色 内面 ぶい・橙色 普通	80% P346 内面黒色処理 壺内
		B 4.3				
		C 7.4				
2	土器 器	A 13.9	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明確な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	砂粒 内面 黒色 外面 ぶい・橙色 普通	50% P347 内面黒色処理 壺内
		B 4.2				
		C 6.1				
3	土器 器	A [14.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明確な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 内面 黒色 外面 橙色 普通	20% P349 内面黒色処理 覆土下層
		B 3.9				
		C [6.0]				
4	須恵器	A [13.9]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明確な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	長石 雲母 砂粒 ぶい・橙色 普通	40% P348 二次焼成 壺内
		B 5.0				
		C 5.4				

第12500	環 須恵部	A [13R]	底部から口縁部の破片。平底。体部	口縁部内外面・体部内外面口ロナ	長石 石英 砂粒	20% P350 壺内
		B 4.1	から口縁部にかけて、内彎気味に立ち	ナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り、	黄灰色	
		C [8.0]	上がる。口縁端部はわずかに外反す	底部ヘラ削り後、ナデ。	普通	
6	高台付環 須恵部	B (3.9)	高台部から体部の破片。高台部は長	体部内外面口ロナデ。体部外面下	長石 石英 雲母	30% P351 二次焼成 壺内
		D [8.1]	く、「ハ」の字状に開く。平底。体	位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り	砂粒	
		E 1.4	部から口縁部にかけて、下位に明瞭な	後、ナデ。高台部貼り付け、口ロナ	にふい黄褐色	
7	壺 土脚部	A [12.4]	体部から口縁部の破片。体部から口	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナ	長石 石英 雲母	20% P352 壺内
		B (12.9)	縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	デ。	砂粒	
			口縁部は外反し、中位に明瞭な後を		褐色	
			持つ。端部はつまみ上げられている。		普通	

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
8	支 脚	(19.3)	9.9	9.6	壺内	DP4

第54号住居跡 (第126・127図)

位置 調査1区南部、D6h6区。

重複関係 本跡は第53号住居跡と重複している。第53号住居跡が、本跡の南壁寄りの床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 南壁の一部が第53号住居跡と重複していることから、長軸(5.29)m、短軸(5.15)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁高は34~42cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 重複している部分以外の壁際で確認されていることから、全周していると推定される。上幅16~50cm、下幅4~12cm、深さ8~20cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、各コーナー部にかけて暗褐色土による貼床が施されて、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで127cm、最大幅194cm、壁外への掘り込み32cmである。火床部は、床面を27cmほど掘りくぼめた後、にふい赤褐色土と暗赤褐色土を貼り、深さ6cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受け、赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は緩やかに外傾して、のち垂直に立ち上がる。また、竈両脇にピット(P6・P7)を確認した。掘り方が竈袖部の下まで伸びていることから、竈の袖部を作る前に掘り込まれており、竈施設に伴う柱穴として使用されたと考えられる。竈とP6・P7の土層は24層に分けられた。そのうち、1~9層は天井部や袖部の崩落土など、10~13・16~19層は袖部の土層、14・15層は火床部の貼床層、20・21層はP6の土層、22~24層はP7の土層である。

竈・竈脇ピット土層解説

- 1 根 層 褐色 ローム粒子・焼土粒を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 2 掘削赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 3 暗 褐色 ローム粒子・焼土粒を少量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 4 暗 赤褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を中量、炭化粒子・焼土小ブロックを少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 5 黒 褐色 灰褐色粘土粒子を多量、炭化粒子・焼土粒を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 6 掘削赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、炭化粒子を少量、炭化物を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 7 褐色 灰褐色粘土小ブロックを中量、焼土中ブロックを少量含み、強い粘性を帯び、硬く締まっている。

8	暗褐色	灰褐色粘土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土中ブロックを少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
9	褐色	灰褐色粘土粒子を多量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
10	暗灰色	ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
11	近い灰褐色	砂を多量、灰褐色粘土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
12	近い黄褐色	灰褐色粘土粒子・砂を中量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
13	灰褐色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
14	近い赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム粒子・焼土中ブロック・砂を少量、炭化粒子・焼土大ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
15	暗赤褐色	砂を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
16	暗灰色	砂を中量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
17	灰褐色	ローム粒子・砂を少量、ローム中ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
18	近い黄褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
19	灰黄褐色	砂を多量、灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
20	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム中ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
21	褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
22	暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
23	褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
24	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット 7か所 (P1～P7)。P1～P3は長径35～49cm、短径26～30cmの楕円形で、いずれも深さ37～47cmである。P4は径約34cmほどの円形で、深さ34cmである。いずれも各コーナー部付近に位置し、支柱穴と考えられる。P5は長径40cm、短径35cmの不整形円形で、深さ40cmである。南壁寄り位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は竈の東袖部脇に位置し、径約33cmほどの円形で、深さ36cmである。P7は竈の西袖部脇に位置し、長径46cm、短径40cmの楕円形で、深さ38cmである。上述のように、どちらも竈に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

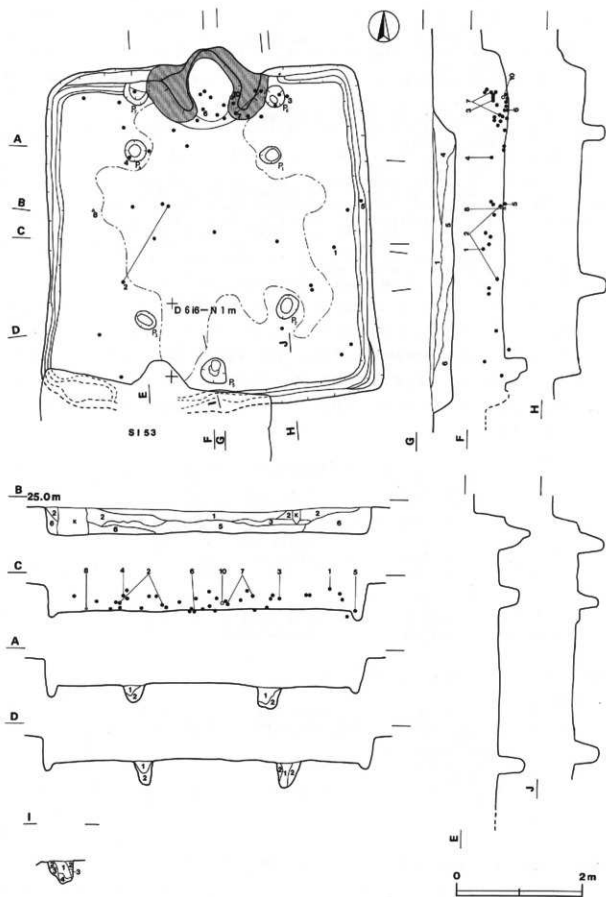
P1	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化物・焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。
P2	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、締まっている。
P3	1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化物・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まりはない。
P4	1	暗褐色	ローム粒子を中量、焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
P5	1	黒褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、炭化物を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
	2	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
	3	暗褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
	4	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。

覆土 6層からなり、自然堆積と思われる。

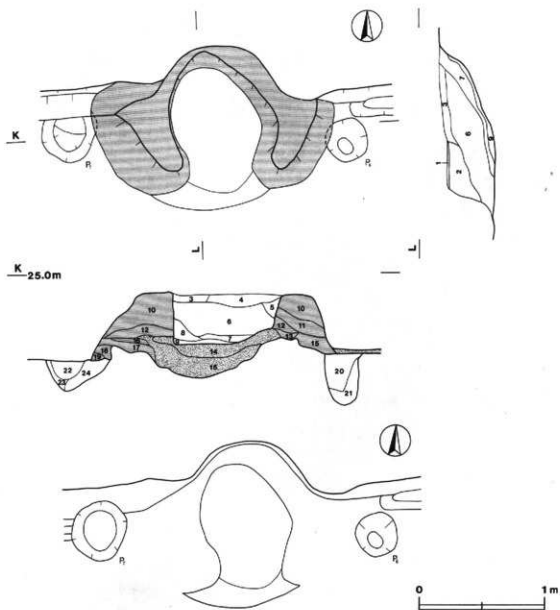
土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
2	極赤褐色	ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
3	暗赤褐色	ローム粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
4	暗赤褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
5	暗赤褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
6	暗赤褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。

遺物 土師器片374点、須恵器片363点、鉄製品2点(釘、不明鉄製品)が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約9%、北東部から出土したものが約20%、南東部から出土したものが約13%、南西部から出土したものが約12%、北西部から出土したものが約34%、ピット内



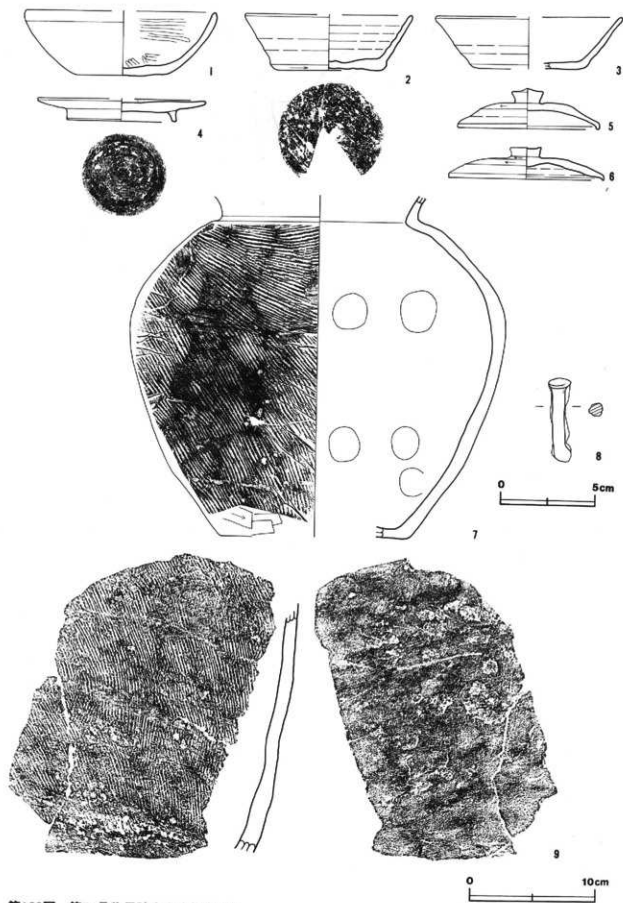
第126图 第54号住居跡実測图(1)



第127図 第54号住居跡電実測図(2)

と床下から出土したものが約2%, その他が約10%である。特に、北側に約54%が集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層から中層が約54%, 覆土中層から下層が約43%, 床下からのものが約3%である。第128図2の須恵器坏が南西部と中央部の覆土下層から、4の土師器高台付皿が北西コーナー部の覆土中層から、5の須恵器蓋(完形)が東壁寄りの床面直上から、6の須恵器蓋が竈内から、7の須恵器蓋が北東部の覆土中層と竈内から、8の不明鉄製品が西壁寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片の多くは、竈上位層から出土しており、火熱を受けていないことから、住居廃絶後に投棄されたと思われる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。



第128图 第54号住居跡出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	土師器 環 土師器	A [15.1]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内壁気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。内面一部へラ磨き。底部外面ナデ。	石灰・雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	50% P354 覆土層～中層 (東壁寄り)
		B 5.1				
		C 7.4				
2	環 須恵器	A [13.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な縁を持ち、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面ド位回転へラ削り。底部回転へラ削り後、一方のへラ削り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	50% P355 覆土下層 (南西部、 中央部)
		B 4.4				
		C 8.6				
3	環 須恵器	A [14.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。底部回転へラ削り後、へラ削り。	長石 石英 雲母 黄灰色 普通	30% P356 覆土中層 (通車側)
		B 4.2				
		C [8.2]				
4	高台付皿 土師器	A [13.5]	高台付部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、内壁気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部内面から底部にかけてへラ磨き。底部回転へラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、口ロナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 にぶい黄褐色 普通	50% P357 覆土中層 (北西コーナー)
		B 1.7				
		D 8.5				
		E 1.0				
		F 1.0				
5	蓋 須恵器	A 11.2	扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、内壁気味で緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面口ロナデ。底部回転へラ削り。	長石 砂粒 灰色 普通	100% P358 床面直上 (東壁寄り)
		B 3.2				
		F 2.5				
		G 1.1				
6	蓋 須恵器	A 12.3	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、内壁気味で緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面口ロナデ。底部回転へラ削り。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	60% P359 竈内
		B 2.5				
		F 2.5				
		G 0.8				
7	環 須恵器	B (27.2)	底部から頸部の破片。平底。体部は内壁気味に立ち上がり、上位で最大径を有する。頸部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面平行タタキ。下位へラ削り。内面アテ具痕有り。	雲母 砂粒 灰白色 普通	40% P360 二次焼成 竈内 覆土中層 (北東部)
		C [15.2]				

図版番号	種 類	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	不明鉄製品	4.5	1.2	0.7	6.75	覆土下層(西壁寄り)	M39

図版番号	器 種	部 分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
9	蓋 須恵器	体 部	外面平行タタキ。内面ナデ。一部へラナデ。アテ具痕有り。	T P24 二次焼成 竈内 灰白色

第56号住居跡 (第129・130図)

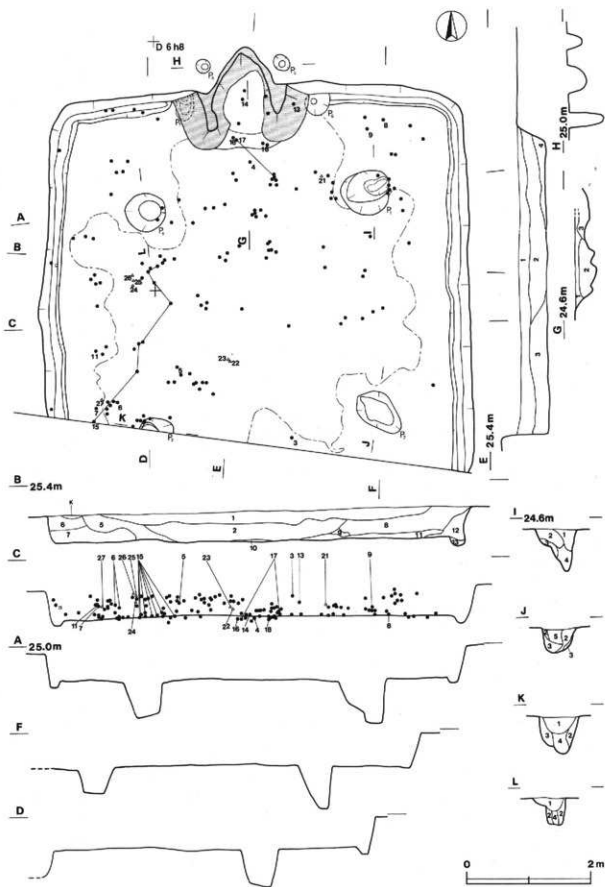
位置 調査I区南東部、D 6 h8区。

規模と平面形 南壁の一部が調査区域外であることから、長軸(6.94)m、短軸(6.00)mの長方形と推定される。主軸方向 N-0°

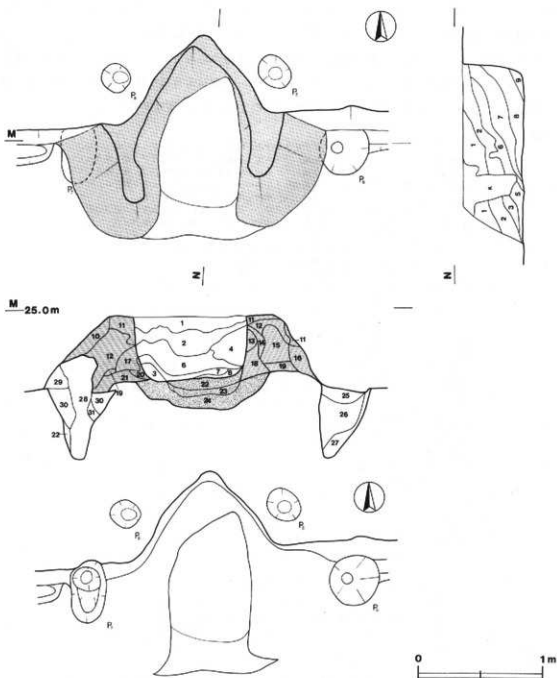
壁 壁高は41～51cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 調査した範囲の壁際で確認されていることから、全周していると推定される。上幅25～35cm、下幅7～18cm、深さ8～11cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、竈焚口部前と各コーナー部付近に、黒褐色土と灰褐色土による貼床が施されて、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。



第129图 第56号住居跡実測図



第130図 第56号住居跡竈実測図

貼床土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム大ブロック・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 灰褐色 ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで164cm、最大幅215cm、壁外への掘り込み66cmである。火床部は、床面を33cmほど掘りくぼめた後、にぶい赤褐色土、にぶい黄褐色土および灰褐色土を貼り、火床面が作られている。その上面は火熱を受け、赤変しているが、あまり硬化していない。焚口部から78cm奥の火床部に

第131図14の須臾器高盤が逆位で置かれており、支脚として利用されたと思われる。煙道部は垂直に立ち上がる。竈袖部両脇と煙道部両脇にピット（P5～P8）を確認した。特に、袖部脇に確認されたP6とP7の掘り方が竈袖部の下まで伸びていることから、竈の袖部を作る前に床面を掘り込んでおり、竈施設に伴う柱穴と考えられる。竈とP6・P7の土層は32層に分けられた。そのうち、1～9層は天井部や袖部の崩落土など、10～21層は袖部の土層、22～24層は火床部の貼床層、25～27層はP6の土層、28～32層はP7の土層である。

竈・竈脇ピット土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
2 灰褐色	灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
3 灰褐色	灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
4 暗赤灰色	焼土小ブロックを中量、焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、締まっている。
5 灰褐色	灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
6 にいり赤褐色	焼土粒子を多量、焼土小ブロックを少量、炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
7 赤褐色	焼土粒子を多量、焼土小ブロックを中量、灰を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
8 にいり赤褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
9 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
10 黒褐色	ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
11 黒褐色	ローム粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
12 褐色	砂を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
13 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
14 明赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を多量、焼土大ブロック・焼土中ブロックを中量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
15 灰褐色	灰褐色粘土粒子を多量、砂を中量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
16 灰褐色	灰褐色粘土粒子を多量、砂を中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
17 黄灰色	灰を多量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、締まっている。
18 にいり赤褐色	焼土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子・砂・灰を少量、炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
19 にいり赤褐色	砂を多量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
20 にいり赤褐色	砂を多量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子・灰を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
21 灰褐色	砂を中量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
22 にいり赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・砂・灰を少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
23 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂・灰を少量、炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
24 にいり赤褐色	灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
25 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム大ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
26 暗褐色	ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
27 灰褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
28 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム大ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
29 褐色	ローム粒子・砂を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
30 灰褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
31 褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
32 褐色	ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット 8か所（P1～P8）。P1～P3は長径55～70cm、短径（20）～69cmの楕円形で、いずれも深さ41～73cmである。P4は径65cmほどの円形で、深さ61cmである。各コーナー部付近に位置し、いずれも主柱穴と考えられる。P5は竈の煙道部東脇に位置し、長径28cm、短径23cmの楕円形で、深さ25cmである。P6は竈の東袖部脇に位置し、径40cmほどの円形で、深さ61cmである。P7は竈の西袖部脇に位置し、長径54cm、短径27cmの楕円形で、深さ70cmである。P8は竈の煙道部西脇に位置し、径24cmほどの円形で、深さ57cmである。上述のように、性格はいずれも竈に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説（P1～P4共通）

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
2 黒褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
3 褐色	ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。
4 黒褐色	焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。柱穴と思われる。
5 暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。

覆土 13層からなり、ブロック状の堆積状況がみられることから、人為堆積と思われる。

土層解説

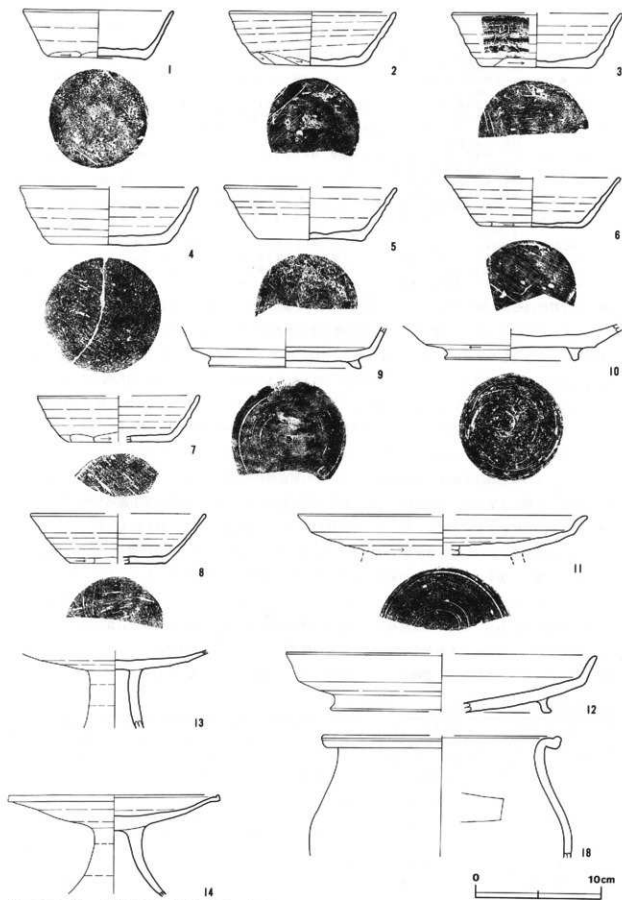
1	暗褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含む。粘性は弱く、締まっている。
2	暗褐色	焼土粒子を多量、ローム粒子・焼土小ブロックを中量、焼土大ブロック・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
3	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
4	褐色	焼土粒子を多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土ブロックを中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土大ブロックを少量含む。粘性を帯び、締まっている。
5	暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を少量含む。粘性は弱く、硬く締まっている。
6	褐色	ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、硬く締まっている。
7	褐色	ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化物・焼土中ブロックを少量含む。粘性を帯び、締まっている。
8	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子を中量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含む。粘性は弱く、締まっている。
9	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量、焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む。粘性を帯び、締まっている。
10	暗褐色	灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・焼土小ブロックを少量含む。粘性を帯び、硬く締まっている。
11	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
12	暗褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含む。粘性は弱く、締まっている。
13	暗褐色	ローム粒子を多量含む。粘性を帯び、締まっている。

遺物 土師器片1485点、須恵器片1551点、灰釉陶器1点、土製品1点(支脚)、鉄製品7点(短刀1、刀子6)、礫13点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約11%、北東部から出土したものが約18%、南東部から出土したものが約8%、南西部から出土したものが約22%、北西部から出土したものが約20%、ピット内と壁溝から出土したものが約2%、その他が約19%である。特に、西壁寄り約42%が集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約32%、覆土中層が約28%、覆土下層と床面直上が約22%、ピット内と壕溝から出土したものが約4%、その他が約14%である。第131図1の須恵器片が竈の西袖内から、2の須恵器片が竈内から、3の須恵器片(刻書「山川」)が南壁寄りの覆土上層から、4の須恵器片が竈手前の床面直上から、8の須恵器片が北東コーナー部の床面直上から、9の須恵器高台付杯が覆土下層から、14の須恵器高盤が竈内の火床部中央から、第132図15の須恵器鉢が西壁から中央部の覆土下層から床面直上にかけて、16と第131図18の土師器甕が竈内から、第133図17の土師器甕が竈手前の覆土下層と竈内から、19の土師器甕がP1の覆土中から、21~23の刀子が中央部の覆土中層から、24~26の刀子が西壁寄りの覆土上層から、27の短刀が南西コーナー部の覆土中層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片の多くは、火熱を受けておらず、竈外から出土したものと接合関係にあることから、住居廃絶後に投棄された可能性がある。また、猿投窯黒笹14号または90号窯式と考えられる灰釉陶器長頸瓶は、覆土上層から出土している。時間的な差があることから、後世の擾乱による混入の可能性が高い。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後半)と考えられる。

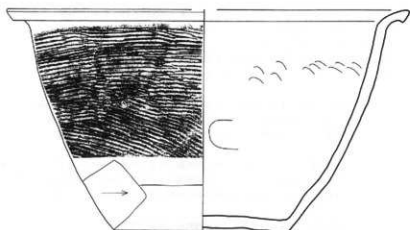
第56号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第131図 1	須恵器	A 12.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	長石 砂粒 灰色 普通	60% P361 竈内(西袖内)
		B 4.9				
		C 8.0				
2	須恵器	A 13.2	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、手持ちヘラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	50% P362 竈内
		B 4.4				
		C 7.4				
3	須恵器	A 13.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P363 体部外面刻書「山川」 覆土上層(南壁寄り)
		B 4.3				
		C 8.8				

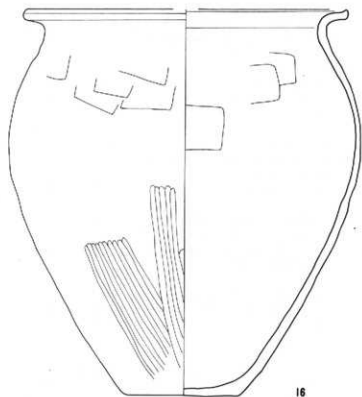


第131图 第56号住居跡出土遺物実測図(1)

第131図	環 須 患 器	A [4.0] B 4.6 C 9.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反している。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。底部手持ちへラ削り後、ナデ。	砂粒 黄灰色 普通	60% P364 床面直上 (籠手前)
5	環 須 患 器	A [13.6] B 4.2 C 8.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。底部回転へラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P365 覆土中層 (中央部)
6	環 須 患 器	A [14.2] B 4.0 C 8.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反している。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。体部外面下位手持ちへラ削り。底部回転へラ切り後、一方のへラ削り。	長石 砂粒 黄灰色 普通	30% P366 覆土中層 (南西コーナー)
7	環 須 患 器	A [12.8] B 3.7 C [8.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反している。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。体部外面下位手持ちへラ削り。底部回転へラ削り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 黄灰色 普通	30% P367 覆土中層 (南西コーナー)
8	環 須 患 器	A [13.8] B 4.0 C [7.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反している。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。体部外面下位手持ちへラ削り。底部回転へラ削り後、一方のへラ削り。	長石 砂粒 灰黄色 普通	30% P368 床面直上 (北東コーナー)
9	高台付環 須 患 器	B (3.3) D 12.0 E 9.8	高台部から体部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。底部回転へラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、口ロナナ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	50% P369 覆土中層 (北東コーナー)
10	盤 須 患 器	B (2.9) D 10.7 E 0.9	高台部から体部の破片。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。体部外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、口ロナナ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	60% P370 覆土上層 (西西部)
11	盤 須 患 器	A [23.0] B (3.2)	底部から口縁部の破片。平底。体部は下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。体部外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P371 覆土中層 (西側寄り)
12	盤 須 患 器	A [24.8] B 4.6 D [7.6] E 1.2	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部は下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。底部回転へラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、口ロナナ。	長石 砂粒 灰白色 普通	30% P372 覆土一部自然粒 覆土中層 (南東部)
13	高 盤 上 須 患 器	B (6.2) E (4.7)	脚部から体部の破片。脚部はラッパ状に広がる。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面口ロナナ。脚部貼り付け、横ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい灰色 普通	30% P374 覆土中層 (東側脚部)
14	高 盤 須 患 器	A 16.7 B (8.0) E (5.6)	脚部から体部の破片。脚部はラッパ状に広がる。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し、端部は直立している。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナ。脚部貼り付け、口ロナナ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	50% P373 壺内 (穴床部中央)
第132図	鉢 須 患 器	A [32.2] B 17.6 C 14.1	底部・体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面口ロナナ。体部外面平行タタキ、下位へラ削り。内面アテ具痕有り。底部ナデ、モミ痕有り。	長石 砂粒 灰黄色 普通	60% P376 覆土下層～ 床面直上 (西壁から中央部 にかけて)
16	変 土 器 器	A [25.5] B 30.7 C 9.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部へラナデ。体部外面中位から下位へラ磨き。底部木葉痕有り。	スコリア 砂粒 灰色 普通	40% P377 壺内
第133図	変 土 器 器	A [23.2] B (26.5)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部は棒状工具による凹線を通す。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部へラナデ。体部外面中位から下位へラ磨き。	長石 石英 雲母 砂粒 明赤褐色 普通	50% P378 壺内 覆土下層 (籠手前)



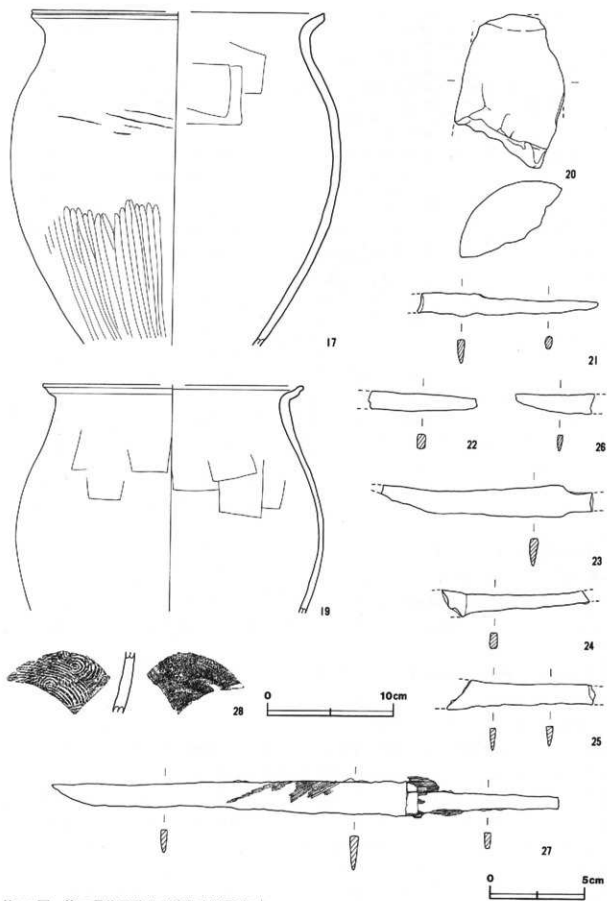
15



16



第132图 第56号住居跡出土遺物実測图(2)



第133图 第56号住居跡出土遺物実測図(3)

第131図	変 土 跡 器	A (19.4) B (9.6)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内湾気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、肩部はつまみ上げられている。口縁部下縁は棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	10% P 379 壺内
第132図	変 土 跡 器	A (21.0) B (17.9)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な棱を持つ。肩部は横につまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	30% P 380 P1覆土中

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
20	支 脚	(82)	(57)	4.0	(134)	覆土中	D P 5

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
21	刀 子	(95)	1.3	0.4	(885)	覆土中層 (中央部)	M41
22	刀 子	(58)	1.1	0.5	(545)	覆土中層 (中央部)	M42
23	刀 子	(112)	1.7	0.5	(1600)	覆土中層 (中央部)	M43
24	刀 子	(78)	1.5	0.5	(880)	覆土上層 (西壁寄り)	M44
25	刀 子	(79)	1.6	0.4	(870)	覆土上層 (西壁寄り)	M45
26	刀 子	(42)	1.1	0.3	(234)	覆土上層 (西壁寄り)	M46
27	短 刀	26.5	2.2	0.4	4600	覆土中層 (南西コーナー)	M47

図版番号	器 種 部 分	器 形 ・ 手 法 の 特 徴		備考 (台帳番号, 出土位置, 色調など)
		体 部	外 面	
28	須 恵 器	外面両面凹状のタテキ。内面ナデ、アテ具痕有り。		T P 25 壺内 灰色

第58号住居跡 (第134・135図)

位置 調査I区南東部、D 6 9区。

重複関係 本跡は第9号掘立柱建物跡、第135号土坑と重複している。本跡が第9号掘立柱建物跡のP6とP7を掘り込んでいることから、本跡が新しい。また、第135号土坑が本跡の西壁寄りの境面を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.96m、短軸5.84mの方形である。

主軸方向 N-7'-W

壁 壁高は44~56cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅21~34cm、下幅4~14cm、深さ7~16cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで164cm、最大幅186cm、壁外への掘り込み72cmである。火床部は、床面を14cmほど掘りくぼめた後、褐色土と暗赤褐色土を貼り、深さ7cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受け、火床部前方と袖部から煙道部の際にかけて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾して、階段状に立ち上がる。竈西脇にピット (P6・P7) を確認した。掘り方が竈袖部の下まで伸びており、竈の袖部を作る前に掘り込まれていることから、竈施設に伴う柱穴と考えられる。竈とP6・P7

の土層は20層に分けられた。そのうち、1～13層は天井部や袖部の崩落土など、14～18層は袖部の土層、19・20層は火床部の貼床層である。

覆土層解説

1 暗赤褐色	灰褐色粘土粒子を中量、焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
2 におい赤褐色	焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
3 灰褐色	灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、炭化粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
4 灰黄色	灰褐色粘土粒子を多量、砂を中量、焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
5 におい赤褐色	焼土小ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
6 におい赤褐色	灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
7 におい赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子を中量、灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
8 黒褐色	灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。火熱を受けた天井部の一部が崩落した層と思われる。
9 灰褐色	焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
10 暗赤褐色	焼土粒子・灰褐色粘土粒子・灰を中量、焼土小ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
11 褐色	灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
12 灰褐色	灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
13 におい赤褐色	灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
14 暗赤褐色	焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
15 暗褐色	ローム粒子・灰を中量、焼土粒子を少量、灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。
16 褐色	灰を少量、ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
17 暗褐色	灰を中量、ローム粒子を少量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
18 黒褐色	ローム粒子を少量、焼土粒子・灰を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
19 暗赤褐色	焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量、炭化物・砂を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
20 褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット 7か所（P1～P7）。P1・P2・P4は径57～74cmの円形で、いずれも深さ30～40cmである。P3は長径68cm、短径57cmの楕円形で、深さ41cmである。いずれも各コーナー部付近に位置し、支柱穴と考えられる。P5は長径68cm、短径61cmの楕円形で、深さ41cmである。南壁寄りに位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は竈の東袖部脇に位置し、径34cmの円形で、深さ21cmである。P7は竈の西袖部脇に位置し、長径35cm、短径28cmの楕円形で、深さ28cmである。上述したように、どちらも竈に伴うピットと考えられる。

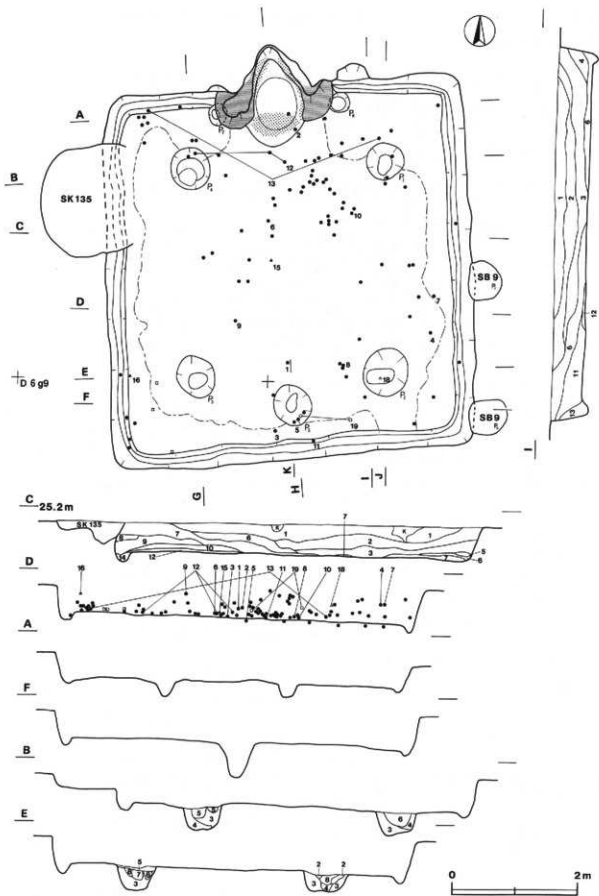
ピット土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化物・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
2 におい赤褐色	灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
3 褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
4 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
5 暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム中ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
7 暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
8 暗褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
9 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量、暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
10 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム大ブロック・黒褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
11 黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・褐色土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
12 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
13 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロック・褐色土を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
14 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂を中量、ローム小ブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

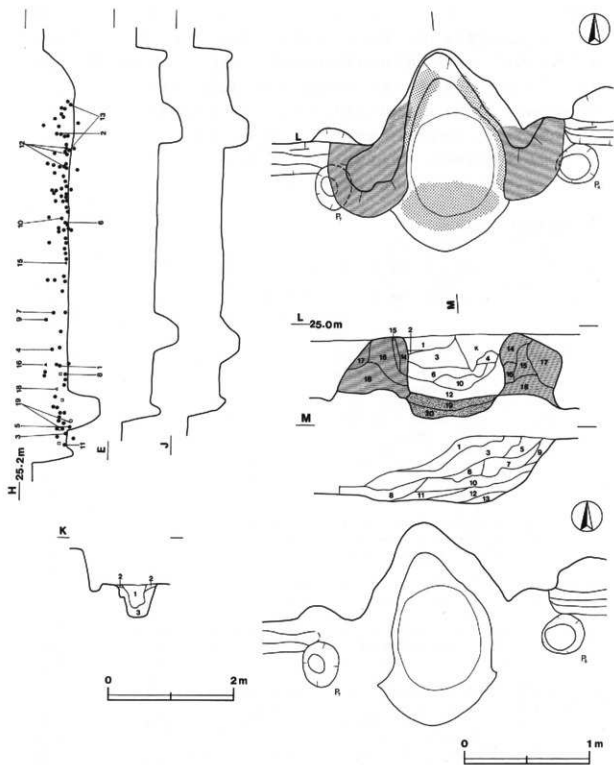
覆土 14層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
3 黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
4 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・褐色土を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
5 褐色	ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
6 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
7 灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
8 黒褐色	ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
9 褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量、暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
10 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を中量、ローム大ブロック・黒褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
11 黒褐色	ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・褐色土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
12 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
13 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量、ローム大ブロック・褐色土を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
14 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂を中量、ローム小ブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。



第134图 第58号住居跡実測图(1)



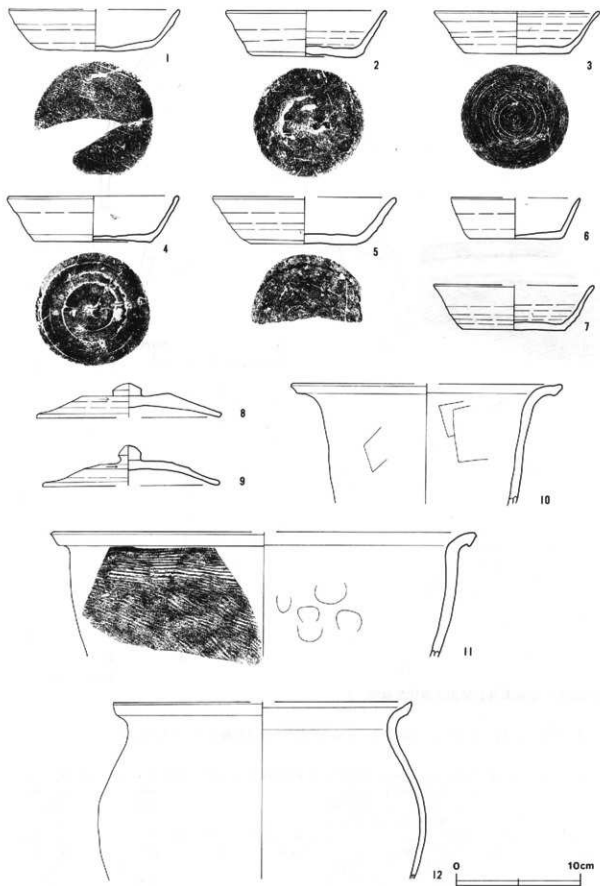
第135図 第58号住居跡実測図(2)

遺物 土師器片1358点、須恵器片438点、土製品3点(支脚)、鉄製品1点(刀子)、礫5点が出土している。また、多量の炭化材が確認されている。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約7%、北東部から出土したものが約18%、南東部から出土したものが約22%、南西部から出土したものが約31%、北西部から出土したものが約21%、P2・P3・P5から出土したものが約1%である。特に、南西部に集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約51%、覆土中層が約28%、覆土下層

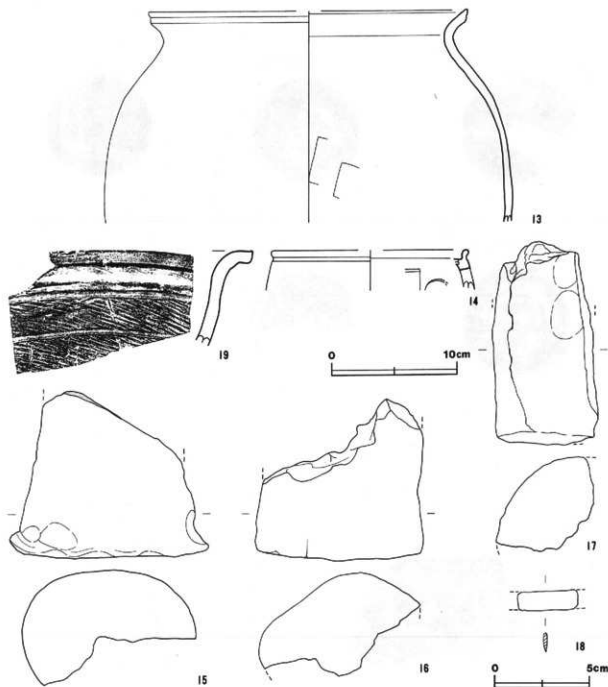
と床面直上が約20%, ピット内が約1%である。第136図1の須恵器が南壁寄りの覆土中層と南西部の覆土下層から, 2の須恵器が電手前の覆土中層から, 3の須恵器が南壁寄りの床面直上から, 4の須恵器が東壁寄りの覆土中層から, 5の須恵器と11の須恵器が南壁寄りの床面直上から, 6の須恵器が中央部の覆土下層から, 8の須恵器が南壁寄りの覆土下層と室内から, 10の須恵器が中央部の覆土下層から, 12の土師器が電手前から北西コーナー部にかけての覆土下層から, 第137図13の土師器が北西コーナー部と北東コーナー部の覆土下層から, 14の須恵器が南東コーナー部の覆土中層から, 15の土製支脚が中央部の覆土下層から, 16の土製支脚が西壁寄りの覆土上層から, 18の刀子が南東コーナー部の覆土中層から, 多重の炭化材が南西コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

第58号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第136図 1	須 恵 器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 中位と下位に不明瞭な稜を持ち, 内響気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部回転ヘラ切り後, 一方の手持ちヘラ削り。	砂粒 褐色 普通	50% P381 覆土中層 (南壁寄り) 覆土下層 (南西部)
		B 3.4				
		C 9.2				
2	須 恵 器	A 12.7	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 下位に不明瞭な稜を持ち, 直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部回転ヘラ切り後, 手持ちヘラ削り。	長石 石英 砂粒 黄灰色 普通	90% P384 覆土中層 (電手前)
		B 3.7				
		C 8.3				
3	須 恵 器	A 13.3	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 中位に不明瞭な稜を持ち, 内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部回転ヘラ削り後, ナデ。	長石 砂粒 相成色 普通	80% P385 床面直上 (南壁寄り)
		B 3.5				
		C 8.5				
4	須 恵 器	A 13.6	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 上位と下位に不明瞭な稜を持ち, 内響気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 灰黄褐色 普通	70% P386 覆土中層 (東壁寄り)
		B 3.8				
		C 9.3				
5	須 恵 器	A [14.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部回転ヘラ削り後, ナデ。	長石 石英 砂粒 浅灰色 普通	50% P387 床面直上 (南壁寄り) P5上層
		B 3.8				
		C 8.8				
6	須 恵 器	A [10.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部内外面ナデ。	長石 石英 砂粒 にふい黄褐色 普通	40% P388 覆土下層 (中央部)
		B 3.3				
		C 7.4				
7	須 恵 器	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて, 内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。底部回転ヘラ削り後, ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	40% P389 覆土中層 (東壁寄り)
		B 3.6				
		C 8.3				
8	須 恵 器	A [15.0]	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で, 緩やかに開く。口縁端部は直曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面クロロナデ。頂部回転ヘラ削り。	雲母 砂粒 灰白色 普通	50% P390 室内 覆土下層 (南壁寄り)
		B 2.7				
		F 23.2				
		G 1.1				
9	須 恵 器	A [14.3]	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で, 緩やかに開く。口縁部は外反して, 端部は直曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面クロロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 黄灰色 普通	30% P391 覆土上層 (中央部)
		B 3.2				
		F 19.9				
		G 1.4				
10	土 師 器	A [21.6]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて, 内響気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し, 中位に不明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 にふい黄褐色 普通	20% P392 覆土下層 (中央部)
		B (9.6)				
11	須 恵 器	A [33.8]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて, 内響気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し, 端部はつまみ上げられ, 折り返されている。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面平行タタキ, 内面ナデ具痕有り。	長石 砂粒 青ネリブ色 普通	20% P394 床面直上 (南壁寄り)
		B (10.0)				



第136图 第58号住居跡出土遺物実測図(1)



第137図 第58号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。

第136図	甕 土 師 器	A [24.0] B (14.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 砂粒 褐灰色 普通	20% P.395 覆土下層 (甕手前～ 北西コーナー)
第137図	甕 土 師 器	A [25.6] B (16.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられ、下部に棒状工具による凹縁が高る。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ、内面一部ヘラナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	20% P.396 覆土下層 (北東コーナー、 北西コーナー)

第137回	内面観	A [156]	脚部から外提の破片。外提は断面が四角形、脚部は内壁気味に立ち上がる。透かし窓は2か所。	脚部内外面ロクロナデ。透かし窓へラ開り。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	5% P397 覆土中層 (南東部)
-------	-----	---------	---	----------------------	-----------------------	--------------------------

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
15	支脚	(8.6)	10.5	5.1	(366)	覆土下層(中央部)	D P 6 A
16	支脚	(8.5)	(9.0)	(5.6)	(290)	覆土上層(西壁寄り)	D P 6 B
17	支脚	(10.7)	(8.7)	(5.0)	(312)	覆土中	D P 14

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
18	刀子	(4.9)	1.7	0.3	(7.00)	覆土中層(南東コーナー)	M48

図版番号	部種	部分	器形・手法の特徴		備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
			鉢	須臾器	
19	鉢	口縁部	体部から口縁部にかけて、内壁気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。踵部はつまみ上げられている。口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平リタキ。		T P 49 覆土中層(南壁寄り) 灰色

第62号住居跡(第138回)

位置 調査1区南東部, D 7 c5区。

規模と平面形 東側3分の2が調査区域外であることから, 東西軸(0.82)m, 南北軸(3.40)mの, 長方形または方形と推定される。

主軸方向 不明

壁 壁高は18~34cmで, 垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁際と西壁際の一部で確認されている。上幅10~17cm, 下幅3~5cm, 深さ12cmで, 断面形はU字状である。

床 全面が平坦で, 締まっている。特に, 中央部が踏み固められている。

覆土 4層からなり, 自然堆積と思われる。

土層解説

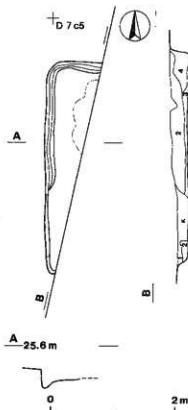
- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 黒褐色 ローム小ブロックを中量, ローム中ブロック・焼土粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 3 暗褐色 ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 4 褐色 ローム粒子を中量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土器器片19点, 須臾器片6点, 鉄製品1点(不明鉄製品)が出土している。第139回1の不明鉄製品が覆土中から出土している。

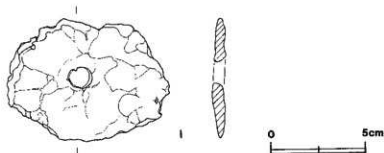
所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代(8世紀)と考えられる。

第62号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第139回1	不明鉄製品	(8.6)	(6.6)	0.6	1.0	(73)	覆土中	M49



第138回 第62号住居跡実測図



第139図 第62号住居跡出土遺物実測図

第63号住居跡 (第140図)

位置 調査I区南東部, D7g1区。

重複関係 本跡は第64号住居跡と重複している。本跡が、第64号住居跡の中央部から南東部にかけての床面を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.36m, 短軸2.90mの長方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は8~26cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面が平坦で、締まっている。東壁寄りと西壁寄りの一部を除いて、踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から笑口部まで85cm, 最大幅108cm, 壁外への掘り込み50cmである。火床部は、特に床面を掘りくぼめてはならず、火熱を受けているが、袖部との際を除いて赤変硬化していない。煙道部は外傾して立ち上がる。竈の土層は10層に分けられた。そのうち、1~6層は天井部や袖部の崩落土など、7~10層は袖部の土層である。

竈土層解説

- | | | |
|----|--------|---|
| 1 | 灰褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロック・砂を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土中ブロック・砂を少量、炭化物・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 赤褐色 | 焼土粒子を多量、焼土小ブロックを中量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子・砂を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 7 | 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 8 | にぶい赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・砂を中量、ローム粒子・炭化粒子を少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 9 | 褐色 | 炭化粒子を中量、ローム粒子・焼土粒子・砂・灰褐色土を少量、炭化物・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 10 | 灰褐色 | ローム粒子を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

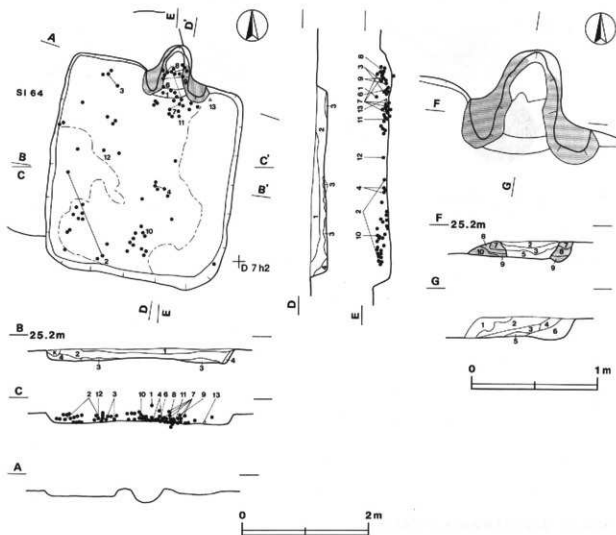
覆土 4層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子・小礫を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・小礫を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | にぶい褐色 | ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 土師器284点, 須恵器片100点, 灰釉陶器2点, 石製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(釘), 礫5点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約19%, 北東部から出土したものが約8%, 南東部から出土したものが約13%, 南西部から出土したものが約29%, 北西部から出土したものが約16%, その他が約15%である。特に、北東部が希薄である。また、竈を除いた遺物の出土層

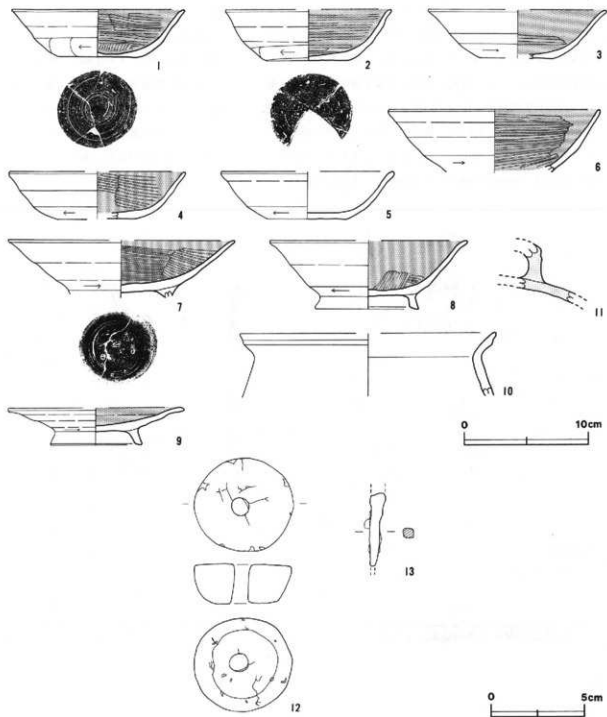
位は、覆土が浅いことから覆土上層から中層が約78%と多くを占め、覆土下層と床面直上が約20%、その他が約2%である。第141図1の土師器環と6・8の土師器高台付環、9の土師器高台付皿が竈内から、2の土師器環が西壁と南壁寄りの覆土下層から、3の土師器環が北西コーナー部の覆土下層から、4の土師器環が中央部の覆土下層から、7の土師器高台付環が竈手前の覆土下層と竈内から、11の灰軸陶器平飯が竈手前の覆土下層から、12の石製紡錘車が中央部の覆土中層から、13の釘が竈東袖脇の覆土下層からそれぞれ出土している。11の灰軸陶器片は第13号住居跡の覆土中から出土した灰軸陶器片と接合しており、狹投竈産黒笹14号窯式のものと考えられる。また、竈の中で竈手前から出土した2点については、火熱を受けた痕があり、赤変している。所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀後葉）と考えられる。



第140図 第63号住居跡実測図

第63号住居跡出土遺物観表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 1	環	A 13.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き、底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 スコリア	90% P399 内面黒色処理 竈内
	土師器	B 3.8			内面 黒色 外面 橙色	
		C 6.2			普通	



第141図 第63号住居跡出土遺物実測図

第141図 2	坏 土 師 器	A [134]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	砂粒 内面 黑色 外面 濃い黄褐色	50% P 400 内面黒色処理 覆土下層 (西壁寄り、北壁寄り)
		B 41				
		C 64			普通	
3	坏 土 師 器	A [146]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	砂粒 内面 黑色 外面 濃い赤褐色	40% P 401 内面黒色処理 覆土下層 (北西コーナー)
		B 39				
		C [60]			普通	

第141図 4	環 土 脚 器	A [14.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	雲母 スコリア 砂粒 内面 外面 普通	30% P 402 内面黒色処理 覆土下層 (中央部)
		B 3.8				
		C [6.2]				
5	環 須 器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P 403 覆土中
		B 3.8				
		C 5.4				
6	高台付環 土 脚 器	A 17.0	高台部と底部欠損。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面ヘラ磨き。	砂粒 内面 外面 普通	70% P 404 内面黒色処理 覆土内
		B (5.1)				
7	高台付環 土 脚 器	A [18.3]	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	砂粒 内面 外面 普通	40% P 405 内面黒色処理 覆土覆土下層 (覆土前)
		B (4.6)				
		E (0.4)				
8	高台付環 土 脚 器	A [15.9]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	砂粒 内面 外面 普通	40% P 406 内面黒色処理 覆土内
		B 5.5				
		D 8.3 E 1.3				
9	高台付環 上 脚 器	A [14.0]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	砂粒 内面 外面 普通	30% P 407 内面黒色処理 覆土内
		B 3.0				
		D 7.2 E 1.3				
10	壺 土 脚 器	A [20.6]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。蓋部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい赤褐色 普通	10% P 409 覆土上層 (南壁寄り)
		B (5.0)				
11	平 瓶 灰釉陶器	B (4.8)	把手付き天井部の破片。天井部は緩やかに広がり、把手は直立する。	天井部内外面ロクロナデ。胴部一段、把手貼り付け。外面精粗毛織り。	雲母 砂粒 灰黄色 柄 灰オリーブ色 良好	10% P 410 覆土下層(電子顕) SI13様上中 瀬投産産 良好 (黒管14号産式)

図版番号	種 別	計 測 値					石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
12	枋 鉢 車	5.2	5.0	2.2	1.0	68	滑 石	覆土中層(中央部)	Q15

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
13	釘	(3.9)	0.6	0.5	(2.92)	覆土下層(龍泉地蔵)	M59

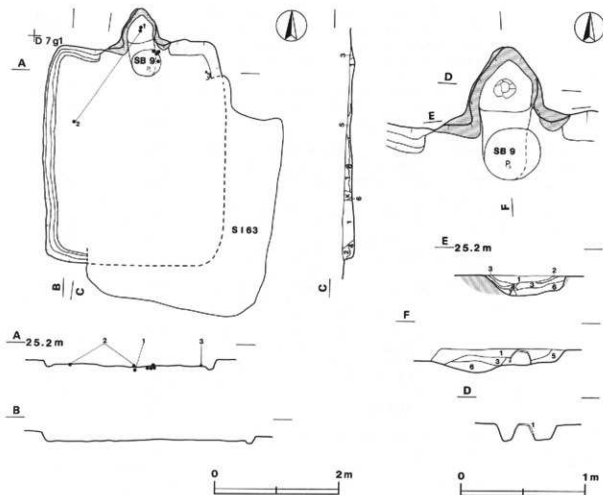
第64号住居跡 (第142図)

位置 調査I区南東部、D7g1区。

重複関係 本跡は第63号住居跡、第9号掘立柱建物跡と重複している。第63号住居跡が、本跡の中央部から南東部にかけての床面を掘り込んでいることから、本跡が古い。また、本跡が第9号掘立柱建物跡のP6を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸3.44m、短軸2.77mの長方形と推定される。

主軸方向 N-0°



第142図 第64号住居跡実測図

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナー部際から南西コーナー部際にかけて巡っている。上幅14~17cm、下幅4~11cm、深さ2~6cmで、断面形はU字状である。

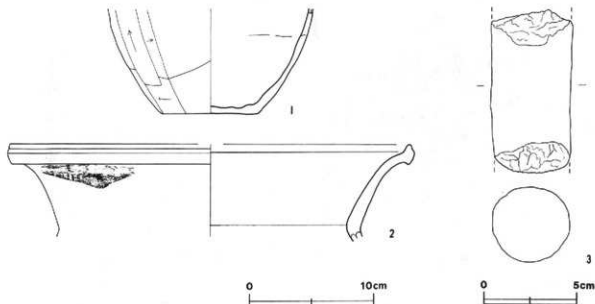
床 全面が平坦で、締まっている。

竈 北壁中央に砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで106cm、最大幅108cm、壁外への掘り込み61cmである。焚口部から火床部にかけては、床面を7cmほど掘りくぼめている。火熱を受けているが、袖部との際を除いて赤変硬化していない。焚口部から72cm奥の火床部に第143図1の土師器甕が逆位で埋め込まれている。火熱を受けていることから、支脚として利用されたものと思われる。煙道部は外傾して、垂直に立ち上がる。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を中量、ローム小ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 灰褐色 灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子を少量含み、強い粘性を帯び、締まっている。
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量、炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 暗褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と思われる。



第143図 第64号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロック・黒褐色土を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 灰褐色 ローム粒子・暗褐色土を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 6 褐色 ローム粒子・暗褐色土を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器40点、須恵器片20点、土製品1点(支脚)が出土している。遺物は、細片が多く、竈内から約25%が出土している。第143図1の土師器小形甕が竈内の火床部中央から、2の須恵器甕が西壁寄りの覆土下層と竈内から、3の土製支脚が北東コーナー部の床面直上からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期(9世紀中葉)と考えられる。

第64号住居跡出土遺物観察表

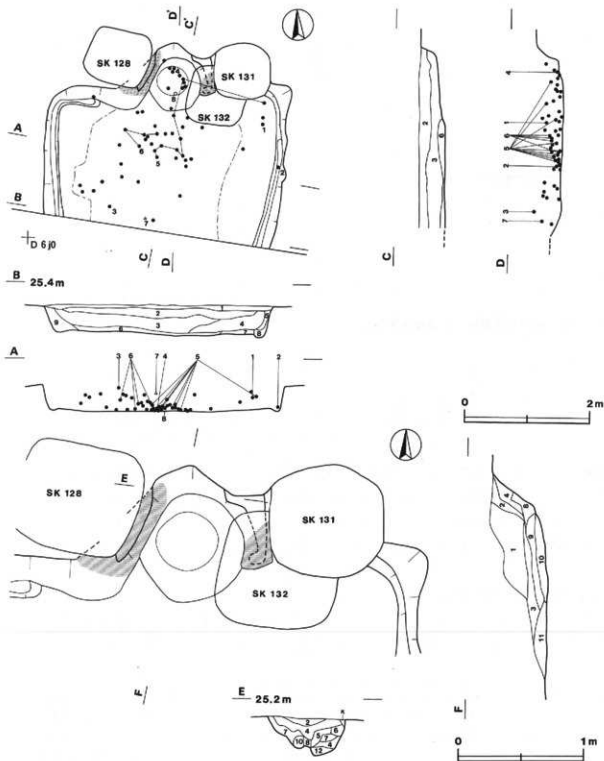
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 1	小形甕 土師器	B (8.4)	底部から体部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	体部外面下位へラ削り。内面ナデ、輪積痕有り。底部ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% P412 竈内
		C 7.8				
2	甕 須恵器	A (32.2)	口縁部の破片。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられ、中位に明確な稜を持つ。口唇部に棒状工具による凹線を施す。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	雲母 砂粒 灰色 普通	10% P411 竈内覆土下層 (西壁寄り)
		B (7.8)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	支脚	(9.8)	4.4	4.0	(173)	床面直上(北東コーナー)	DP7

第65号住居跡(第144図)

位置 調査I区南東部、D610区。

重複関係 本跡は第128・131・132号土坑と重複している。第128号土坑が本跡の竈西袖部を、131・132号土坑



第144図 第65号住跡実測図

が竈東袖部上部から北東コーナー部にかけての床面を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が古い。
規模と平面形 南側部分が調査区域外であることから、東西軸(3.79)m、南北軸(2.58)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は37cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁際と西壁際を巡っている。上幅18～32cm、下幅4～10cm、深さ2～6cmで、断面形はJ字状である。
床 全面が平坦で、締まっている。各コーナー部に暗褐色土による貼床が施され、特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、東側袖部の上半分は土坑により破壊されている。火床部、煙道部、西側の袖部と東側袖部の一部が残存している。規模は、煙道部から焚き口部まで109cm、最大幅(132)cm、壁外への掘り込み76cmである。火床部は、床面を掘りくぼめておらず、火熱を受けて、焚き口部手前と火床部中央が赤変しているが、硬化していない。煙道部は外傾して、はじめ階段状に、のち垂直に立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|-----------|--|
| 1 灰褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、灰褐色粘土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 2 赤褐色 | 焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量、ローム粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 にいふ赤褐色 | 灰褐色粘土小ブロック・粒子を中量、焼土小ブロック・焼土粒子を少量、ローム小ブロック・炭化物を微量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 4 明赤褐色 | 焼土粒子を多量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 7 赤褐色 | 焼土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 8 にいふ赤褐色 | 焼土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 9 にいふ赤褐色 | 灰褐色粘土粒子を多量、焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを中量、焼土小ブロックを少量、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み、強い粘性を帯び、締まっている。 |
| 10 にいふ赤褐色 | 焼土粒子・灰を中量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、炭化物・炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 11 明赤褐色 | 灰褐色粘土粒子を多量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、強い粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 12 暗褐色 | 炭化粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

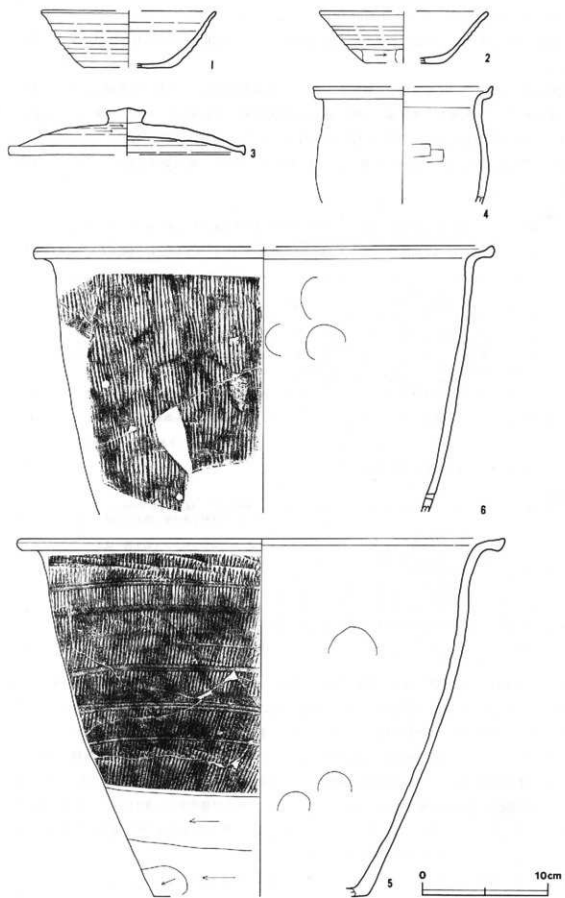
覆土 9層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

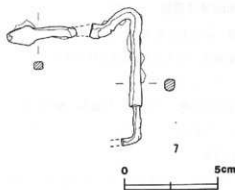
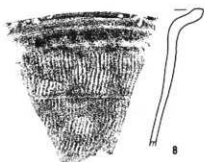
- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化物・焼土粒子・白色粒子を少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 2 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、焼土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を中量、ローム中ブロック・炭化物・焼土中・小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 9 極暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、炭化粒子を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 土師器301点、須恵器片224点、鉄製品1点(鉄鏃)、鉄滓2点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約13%、東半分から出土したものが約40%、西半分から出土したものが約19%、その他が約27%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約51%、覆土中層が約28%、覆土下層と床面直上が約21%である。第145図2の須恵器帯が東壁寄りの覆土下層から、4の上師器小形甕が竈内から、5の須恵器甕が竈手前から中央部にかけての覆土中層と覆土下層、および竈内から、6の須恵器甕が竈手前の覆土中層から覆土下層にかけて、および竈内から、第146図7の鉄鏃が中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器は、火熱を受けておらず、竈外から出土したものと接合していることから、住居廃絶後に投棄されたと思われる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後半)と考えられる。



第145图 第65号住居跡出土遺物実測図(1)



第146図 第65号住居跡出土遺物実測図(2)

第65号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第145図 1	坏 須臾器	A [13.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	雲母 スコリア 砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P413 覆土中層 (北東コーナー)
		B 4.5				
		C [7.0]				
2	坏 須臾器	A [13.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り。	砂粒 黄灰色 普通	20% P414 覆土下層 (東壁寄り)
		B 4.1				
		C [6.0]				
3	蓋 須臾器	A [18.8]	つまみから口縁部の破片。扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 浅黄色 普通	20% P415 覆土上層 (中央西壁寄り)
		B 3.8				
		F 3.1				
		G 1.3				
4	小形 土師器	A [14.4]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	20% P416 甕内
		B (9.3)				
5	瓶 須臾器	A 38.6	底部から口縁部の破片。平底。多孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面上位平行タタキ。下位ヘラ削り。内外面アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	60% P417 甕内 覆土中層～下層 (中央部 ～甕手前)
		B 28.5				
		C [16.9]				
6	瓶 須臾器	A [36.4]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。2つの小孔を有する。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面上位平行タタキ。内面アテ具痕有り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P418 甕内 覆土中層～下層 (甕手前)
		B (21.1)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第146図7	鉄 鍬	(159)	1.1	0.6	(149)	覆土中層(中央部)	MS1

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
8	瓶 須臾器	体部 ～ 口縁部	口縁部は強く外反して、端部はつまみ上げられている。口縁部内外面ロクロナデ。外面平行タタキ。内面ナデ。アテ具痕有り。	T P26 甕内 灰白色

第66号住居跡（第147図）

位置 調査Ⅰ区南東部，D7i3区。

重複関係 本跡は第145号土坑と重複している。第145号土坑が，本跡の竪西側の北壁を床面まで掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形 東側部分が調査区域外であることから，東西軸（2.47）m，南北軸（4.66）mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 増高は13～20cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁際から南壁際にかけて通っている。上幅22～29cm，下幅4～17cm，深さ2～11cmで，断面形はU字状である。

床 全面が平坦で締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，煙道部から焚口部まで128cm，最大幅（86）cm，壁外への掘り込み40cmである。火床部は，床面を8cmほど掘りくぼめており，火熱を受けているが，あまり赤変硬化していない。焚口部から103cm奥の火床部に土師器環を2つ逆位で重ね，支脚として利用している。煙道部は外傾して，緩やかに，のち垂直に立ち上がる。

覆土層解説

- 1 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量，焼土小ブロック・砂を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 5 灰褐色 灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子を少量，炭化物・焼土小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
- 6 暗赤褐色 焼土粒子を少量，ローム粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 7 灰褐色 灰を多量，焼土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子を少量，炭化物を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
- 8 明赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒を中量，ローム粒子・焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 9 におい赤褐色 ローム粒子を少量，炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

ピット 2か所（P1・P2）。P1とP2は径32～34cmの円形で，いずれも深さ40～50cmである。それぞれ南壁寄りと北壁寄りに位置し，いずれも主柱穴と考えられる。

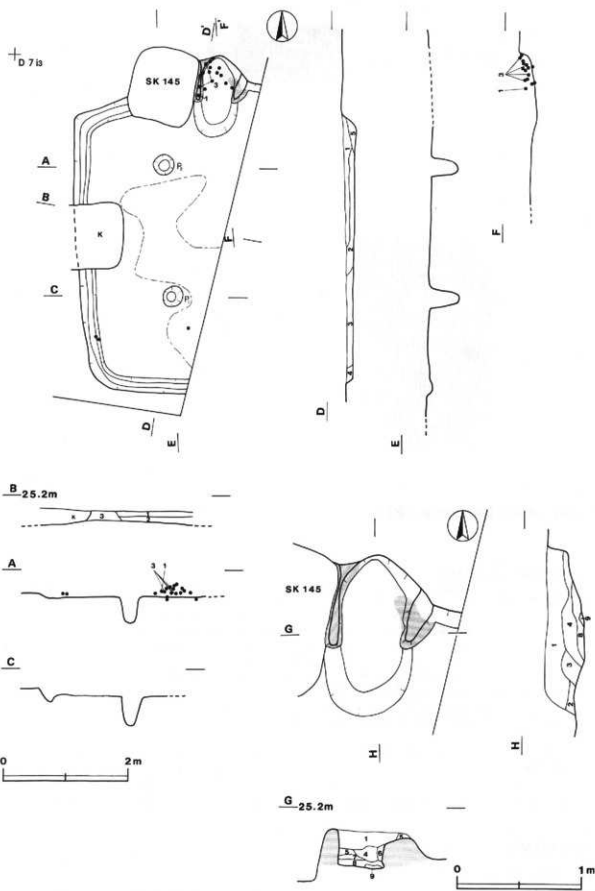
覆土 5層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

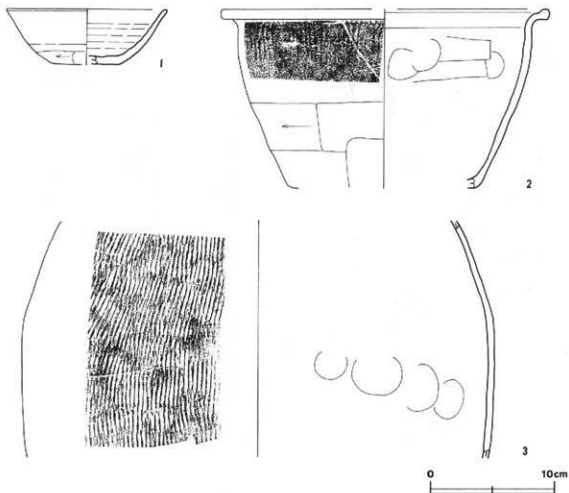
- 1 暗褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を中量，焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 5 暗褐色 焼土粒子を少量，ローム粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。

遺物 土師器片77点，須恵器片39点が出土している。遺物は，細片が多く，覆土が浅かったために，少量であるが，竈と住居跡全体の覆土中から出土している。竈内から出土したものは約43%で，その他約57%が特定の場所に偏ることなく，全体に分布している。第148図1の須恵器環，2の須恵器鉢，3の須恵器甕が竈内からそれぞれ出土している。また，竈内から出土した土器片の多くは，細片で火熱を受けておらず，竈外から出土したものと接合していることから，住居焼絶後に投棄されたと思われる。支脚として利用されていたと考えられる2つの土師器環は，図示できなかった。

所見 時期は，遺構の形態や出土遺物から，平安時代前期（9世紀前半）と考えられる。



第147图 第66号住居跡実測図



第148図 第66号住居跡出土遺物実測図

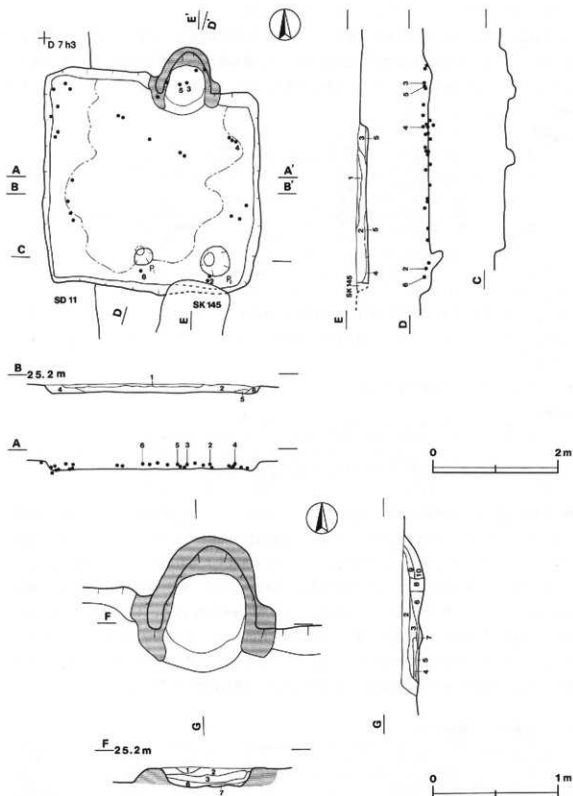
第66号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第148図 1	須恵器	A 12.8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。口縁部はわずかに外反する。	砂粒 灰黄色 普通	60% P419 二次焼成 壺内
		B 4.4				
		C 5.2				
2	鉢 須恵器	A [26.2]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、下位ヘラ削り。内面一部ヘラナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 砂粒 灰黄色 普通	40% P420 二次焼成 壺内
		B 14.4				
		C [15.0]				
3	須恵器	B (19.1)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面平行タタキ。内面アテ具痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 棕色 普通	20% P421 二次焼成 壺内

第67号住居跡 (第149図)

位置 調査I区南東部, D7h3区。

重複関係 本跡は第1号堀, 第145号土坑と重複している。第145号土坑が本跡の南壁を床面まで掘り込んでいることから, 本跡が古い。また, 本跡が第1号堀の東壁寄り掘り込んでいることから, 本跡が新しい。



第149図 第67号住居跡実測図

規模と平面形 長軸3.44m，短軸3.40mの方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 壁高は10~14cmで，外傾して立ち上がる。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁東寄りに砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで107cm、最大幅114cm、壁外への掘り込み42cmである。火床部は、床面を8cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて、赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | | |
|----|--------|---|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | 暗褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、強い粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 4 | 黒褐色 | 炭化物を中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 5 | 褐色 | 砂を中量、ローム粒子を少量、炭化物粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、硬く締まっている。 |
| 6 | 黒褐色 | 炭化物・炭化物粒子を中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 7 | にぶい赤褐色 | ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 8 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 9 | 赤褐色 | 焼土小ブロックを中量、ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム小ブロックを微量含み、締まりはない。 |
| 10 | 明赤褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂を少量、焼土中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

ピット 2か所（P1・P2）。P1は長径31cm、短径28cmの楕円形で、深さ19cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は径48cmの円形で、深さ14cmである。南東コーナー部に位置し、性格は不明である。

覆土 6層からなり、自然堆積と思われる。

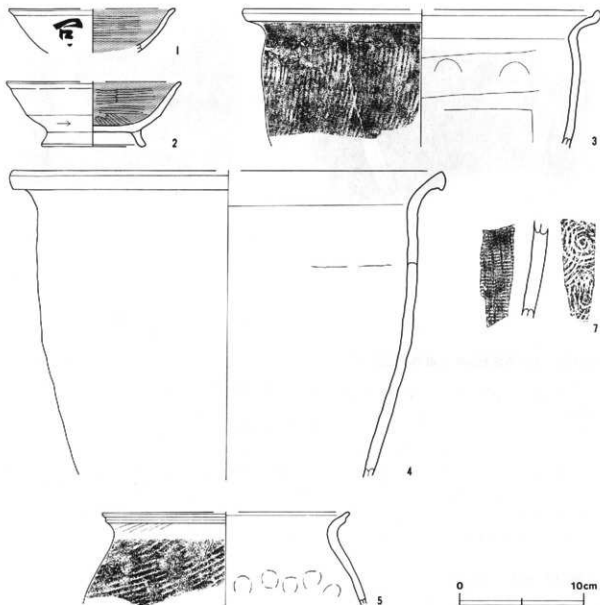
土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化物粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 3 | 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・炭化物粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 土師器片210点、須恵器片105点、瓦1点、鉄滓1点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約19%、北東部から出土したものが約17%、南東部から出土したものが約10%、南西部から出土したものが約23%、北西部から出土したものが約27%、その他が約4%である。特に、南壁寄りに約50%が集中している。第150図1の土師器環（墨書「富」）が覆土中から、2の土師器高台付坏が南東コーナー部の覆土中から、3の須恵器鉢と5の土師器甕が竈内から、4の須恵器鉢が東壁寄りの覆土中から、第151図6の九瓦が南壁寄りの覆土中からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片の多くは、火熱を受けておらず、竈外から出土したものと接合していることから、住居廃絶後に投棄されたと思われる。所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀後半）と考えられる。

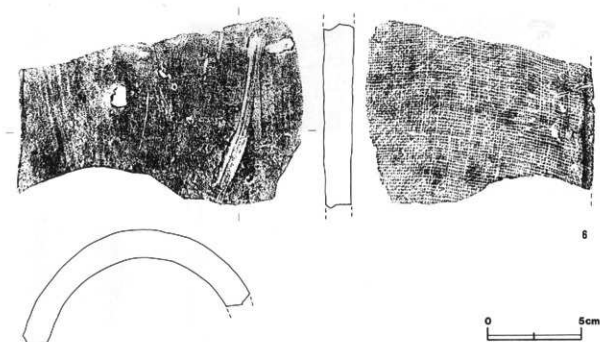
第67号住居跡出土遺物観察表

図番番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	土師器 環	A 13.3	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面へう磨き。	雲母 砂粒 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	10% P422
		B (3.5)				
2	高台付坏 土師器	A 14.1	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に薄く、平底。体部から口縁部にかけて、中位に明確な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へう削り、内面から底部内面にかけて磨き。底部回転へう削り後、ナデ。高台部貼り付け。ロクロナデ。	雲母 砂粒 スリア 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	50% P423 内面黒色処理 覆土中 (南東コーナー)
		B 5.2				
		D 8.2				
		E 1.2				



第150図 第67号住居跡出土遺物実測図(1)

第150図	鉢 須恵器	A [28.6]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面ヘラナデ、アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 スコリア 砂粒 にふい橙色 普通	20% P425 甕内
		B (11.0)				
4	鉢 須恵器	A [34.4]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ、折り返されている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部内面輪積痕有り。	石英 雲母 砂粒 灰青色 普通	20% P426 覆土中 (東壁寄り)
		B (24.0)				
5	甕 土師器	A [19.8]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を返らす。	口縁部内外面横ナデ。外面一部平行タタキ。頸部外面ヘラナデ。体部外面平行タタキ。内面ナデ、指頭痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア 橙色 普通	20% P424 甕内
		B (7.4)				



第151図 第67号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値				器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
第151図 6	丸瓦	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	彎曲している。 凸面へう割り。 凹面垂直目肌。	T 9 覆土中(南壁寄り) 黄灰色
		10.2	12.6	1.6	312		

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
第150図 7	堿 須恵器	体部	外面格子タタキ, 内面同心円状のアナ具痕有り。	TP 27 覆土中 灰色

第68号住居跡(第152図)

位置 調査I区南東部, D7g4区。

重複関係 本跡は第69号住居跡と重複している。本跡が, 第69号住居跡の南側部分の覆土を掘り込んでいることから, 本跡が新しい。

規模と平面形 東側部分が調査区域外であることから, 東西軸(2.54)m, 南北軸(3.42)mの長方形または方形と推定される。

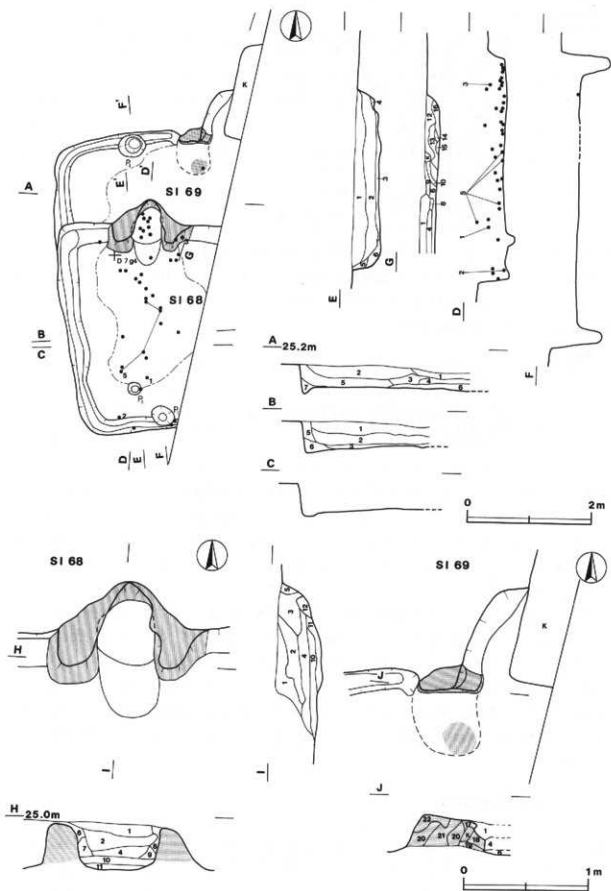
主軸方向 N-10°-E

壁 壁高は26~51cmで, 垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁際から南壁際にかけて巡っている。上幅12~41cm, 下幅4~27cm, 深さ8cmで, 断面形はU字状である。

床 全面が平坦で, 締まっている。特に, 中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 火床部, 煙道部と両側の袖部は残存している。規模は, 煙道部から焚口部まで106cm, 最大幅122cm, 壁外への掘り込み41cmである。火床部は, 床面を7cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けているが, あまり赤変硬化していない。煙道部は外傾して, はじめは階段状に, のち垂直に立ち上がる。



第152图 第68·69号住居跡実測图

覆土層解説

- 1 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 灰 褐色 灰褐色粘土粒を中量、ローム粒子・焼土粒子・砂を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 暗 褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・焼土大ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 4 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量、灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 5 暗 褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 6 灰 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を中量、ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 におい赤褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒を少量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 灰 褐色 灰褐色粘土粒子・砂を中量、ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 9 におい赤褐色 ローム粒子を少量含み、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 10 暗 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を多量、灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。火熱を受けた天井部の一部が露出したと思われる。
- 11 灰 褐色 灰褐色、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 12 鮮 褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。

ピット 2か所 (P1・P2)。P1は長径38cm、短径28cmの楕円形で、深さ40cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2は径21cmの円形で、深さ15cmである。南壁寄りに位置しており、性格は不明である。P1は第69号住居跡の支柱穴の可能性がある。

覆土 6層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

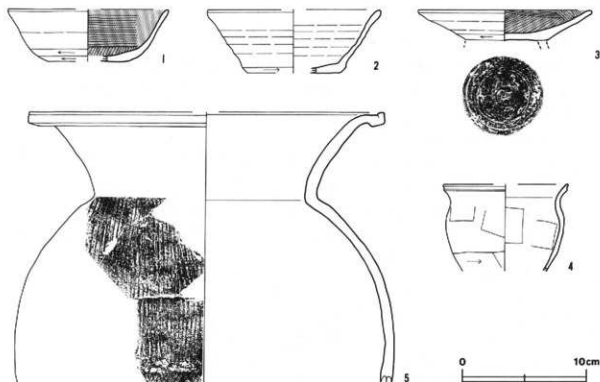
- 1 暗 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を中量、炭化物・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量、焼土中ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 鮮 褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗 褐色 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 5 暗 褐色 ローム粒子を少量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 6 鮮 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器片175点、須恵器片161点が出上している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出上しており、竈内から出土したものは約21%、北東部から出土したものが約7%、南東部から出土したものが約18%、南西部から出土したものが約14%、北西部から出土したものが約30%、その他が約10%である。特に、南西部に約44%が集中している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約47%、覆土中層が約17%、覆土下層と床面直上が約31%、その他が約5%である。第153図1の上師器環が南西コーナー部の覆土中層から、2の須恵器環が覆土下層から、3の土師器高台付皿と4の上師器小形甕が竈内から、5の須恵器甕が中央部の覆土上層から床面直上にかけてそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片の多くは、火熱を受けておらず、竈外から出土したものと接合していることから、住居廃絶後に投棄されたと思われる。

所見 本跡の床面の高さは、第69号住居跡の床面の高さと同じである。西壁と溝は一直線上に並び、幅と深さはほぼ同一であることから、廃絶した第69号住居跡の床や溝の一部を利用して構築された可能性がある。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀前葉）と考えられ、第69号住居跡との時期差は少ないと思われる。

第68号住居跡出土遺物観察表

図庫番号	器 種	引測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第153図	環	A [12] 8	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な線をもち、内厚気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へら削り、内面から底部内面にかけへら磨き。底部回転へら削り後、ナデ。	スコリア 砂粒	20% P427
1	土 師 器	B 42 C 1 62			内面 黒色 外面 におい橙色	内面黒色処理 覆土中層 (南西コーナー)



第153図 第68号住居跡出土遺物実測図

第153図 2	坏 須臾器	A [13.8] B 5.1 C [7.4]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ヘラ削り。	砂粒 灰黄色 普通	30% P 428 覆土下層 (南西コーナー)
	高台付皿 土師器	A 14.4 B (2.5)	高台部の欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	長石 石英 砂粒 内面 黒色 外面 濃い褐色 普通	90% P 429 内面黒色処理 壺内
	小形美 土師器	A [10.0] B (6.9)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を巡らす。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ、上位から中位ヘラナデ、下位ヘラ削り。内面ナデ、一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	30% P 430 壺内
5	甕 須臾器	A [28.4] B (21.7)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ、折り返されている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	長石 雲母 砂粒 暗灰色 普通	20% P 431 覆土上層～ 床面直土 (中央部)

第69号住居跡 (第152図)

位置 調査I区南東部、D7f4区。

重複関係 本跡は第68号住居跡と重複している。第68号住居跡が、本跡の南側部分の覆土を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 東側部分が調査区域外であることから、東西軸(2.92)m、南北軸(4.71)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は28~34cmで、垂直に立ち上がる。

壁溝 北壁際から西壁際にかけて巡っている。上幅12~30cm、下幅7~11cm、深さ8cmで、断面形はU字状である。
床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。竈東側が攪乱を受け、天井部は崩落しており、火床部、煙道部と西側の袖部の一部が残存している。規模は、煙道部から袖部先端まで124cm、最大幅(100)cm、壁外への掘り込み72cmである。火床部は、床面をほとんど掘りくぼめておらず、火熱を受けているが、あまり赤変硬化していない。煙道部は外傾して立ち上がる。

ピット P1は長径42cm、短径34cmの楕円形で、深さ45cmである。北壁寄りに位置しており、性格不明のピットであるが、第68号住居跡のP1と一直線上に並び、掘り方に共通性が見られることから、同時に主柱穴として利用されていた可能性がある。また、第68号住居跡のP2を使用した可能性はあるが、詳細は不明である。

覆土 9層(1~9層)からなり、ブロック状の堆積状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説(竈土層を含む)

- 1 灰褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 2 黒褐色 ローム小ブロックを少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 3 暗褐色 焼土粒子を少量、ローム粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 灰褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 黒褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 7 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 灰褐色 灰褐色粘土粒子を多量含み、強い粘性を帯び、硬く締まっている。
- 9 におい褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 10 灰褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。以下は竈の土層である。
- 11 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 12 黒褐色 焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 13 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 14 灰褐色 焼土粒子・灰を少量、灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 15 暗赤褐色 焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 16 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 17 におい褐色 灰褐色粘土粒子を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。以下は竈西側袖部の土層である。
- 18 灰褐色 灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 19 におい褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 20 暗褐色 灰褐色粘土粒子を多量、ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。
- 21 暗褐色 灰褐色粘土粒子を多量、ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 22 灰褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器片121点、須恵器片128点が出土している。遺物は、竈周辺を中心に出土しているが、竈内から出土したものはない。竈東側から出土したものが約46%、竈西側から出土したものが約51%、P1から出土したものを含めて、その他が約3%である。また、遺物の出土層位は、覆土上層が約40%、覆土中層が約45%、覆土下層と床面直上が約15%である。第154図1の須恵器が北壁寄りの覆土上層から、2の須恵器が中央部の覆土下層から、3の須恵器が覆土上層から出土している。

所見 本跡の床面の高さは、第68号住居跡の床面の高さと同じであり、西壁と溝は一直線上に並び、幅、深さはほぼ同一であることから、廃絶した本跡の北壁(竈部分を含む)以外の施設を利用して、第68号住居跡が構築された可能性がある。時期は、遺溝の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後半)と考えられる。



第154図 第69号住居跡出土遺物実測図

第69号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第154図 1	坏 須恵器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナデ。体部外面ト臼手回転ヘリ有り。	長石 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	10% P432 覆土上層 (北壁寄り)
		B 4.4				
		C [6.6]				
2	坏 須恵器	A [15.0]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナデ。体部外面ト臼手回転ヘリ有り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	10% P433 覆土下層 (中央部)
		B (4.3)				
3	坏 須恵器	A [12.8]	底部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナデ。体部外面ト臼手持ちヘリ有り。	長石 雲母 砂粒 暗灰黄色 普通	10% P434 覆土上層 (中央部)
		B 4.5				
		C [6.8]				

第70号住居跡 (第155図)

位置 調査Ⅰ区東部, D7 d3区。

規模と平面形 竈を含む北壁から東壁にかけて攪乱を受けていることから, 東西軸(3.80)m, 南北軸(4.50)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 不明

壁 壁高は62~66cmで, 垂直に立ち上がる。

壁溝 北西コーナー部の際から東壁際にかけて巡っている。上幅16~36cm, 下幅4~18cm, 深さ6~14cmで, 断面形はU字状である。

床 全面が平坦で, 締まっている。特に, 中央部が踏み固められている。

ピット 5か所(P1~P5)。P1は長径(62)cmで, 北東コーナー部寄りに位置している。P2は長径29cm, 短径23cmの楕円形で, 深さ54cmである。P3とP4は長径69cm, 短径45~64cmの不整楕円形で, 深さ40~48cmである。それぞれ各コーナー部寄りに位置し, いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径24cm, 短径18cmの楕円形で, 深さ15cmである。南壁寄りに位置し, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

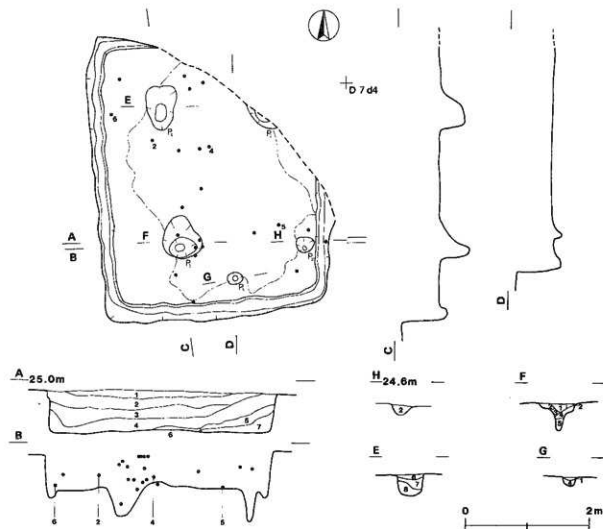
ピット土層解説

- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 灰 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 2 | 灰 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロック・炭化物を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 3 | 暗 褐色 | ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |
| 4 | 灰 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム大ブロック・ローム小ブロックを中量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。 |
| 5 | 灰 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| 6 | 灰 褐色 | ローム粒子を多量, 炭化物・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 7 | 灰 褐色 | ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 8 | 灰 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |

覆土 7層からなり, 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|------|---|
| 1 | 灰 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| 2 | 暗 褐色 | 焼土小ブロックを中量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。 |
| 3 | 暗 褐色 | ローム中ブロックを中量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 4 | 暗 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 5 | 黒 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子を中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 6 | 暗 褐色 | ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, 炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。 |
| 7 | 灰 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量, 焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。 |

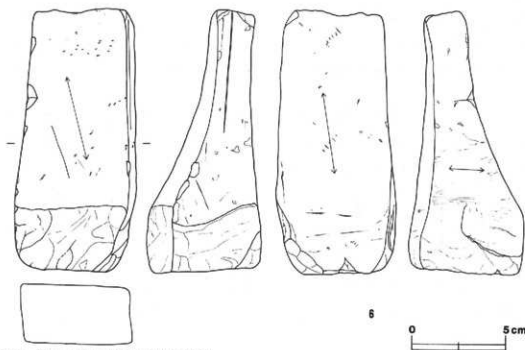
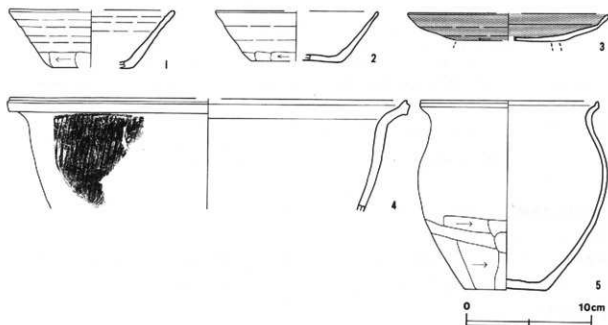


第155図 第70号住居跡実測図

遺物 土師器片353点、須恵器片300点、石器1点（砥石）、礫2点（軽石、雲母片岩）が出土している。遺物は、住居跡全体の覆土中から出土している。北半分から出土したものが約51%、南半分から出土したものが約27%、P1・P4、壁溝から出土したものを含めて、その他が約22%である。また、遺物の出土層位は、覆土上層が約37%、覆土中層が約34%、覆土下層と床面直上が約26%、P1・P4、壁溝から出土したものが約3%である。第156図1の須恵器坏が覆土上層から、5の土師器小形甕が東壁寄りの覆土下層から、2の須恵器坏が西壁寄りの覆土中層から、6の砥石が覆土下層から、3の土師器盤が東壁寄りの覆土上層から覆土中層にかけて、4の須恵器鉢が中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

第70号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第156図1	坏	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。	砂粒	20% P435
	須恵器	B 4.6	体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	体部外面下位手持ちヘラ削り。	にぶい褐色	覆土上層
		C [6.4]		普通		
2	坏	A [12.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り様、手持ちヘラ削り。	長石 砂粒	40% P436
	須恵器	B 4.0			褐色	覆土中層 (西壁寄り)
		C [7.2]			普通	



第156図 第70号住居跡出土遺物実測図

所見 北壁に攪乱を受けているため、竈が存在したかどうかは不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第156図 3	甕 土 師 器	A [16.2] B (2.2)	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、上位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へラ削り。底部回転へラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	30% P437 内外面黒色処理 覆土上層～中層 (東部)
4	鉢 須 恵 器	A [31.6] B (8.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具による凹線を画らす。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。	石英 雲母 砂粒 褐色 普通	10% P439 覆土中層 (中央部)

第156図	小形 変 土 師 器	A 14.2 B 15.0 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面下位へリ削り。底部外面木葉痕有り。	石英 雲母 砂粒 スコリア にぶい赤褐色 普通	50% P438 覆土下層 (東壁寄り)
-------	---------------	---------------------------	---	---	----------------------------------	----------------------------

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
6	砥 石	14.0	6.4	6.0	542	凝灰岩	墓土層 (西壁寄り)	Q16

第71号住居跡 (第157図)

位置 調査Ⅰ区東部、D6d0区。

重複関係 本跡は第121・122号土坑と重複している。第121号土坑が本跡の西壁から甕手前の床面を、第122号土坑が本跡の東壁寄りの床面を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が古い。

規模と平面形 一辺2.60mの方形である。

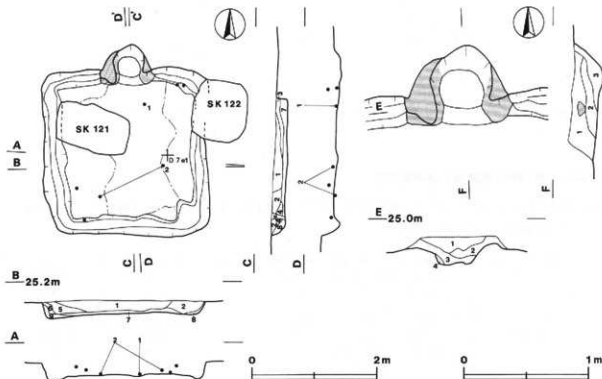
主軸方向 N-2'-W

壁 壁高は29~31cmで、外傾して立ち上がる。

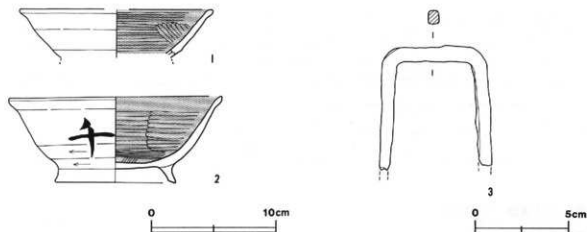
壁溝 全周していると推定される。上幅21~56cm、下幅5~36cm、深さ5~8cmで、断面形はU字状である。

床 全面がほぼ平坦で、締まっているが、南側から北側に向かって若干の傾斜がある。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央やや東寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで65cm、最大幅88cm、壁外への掘り込み38cmである。火床部は、床面を7cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙



第157図 第71号住居跡実測図



第158図 第71号住居跡出土遺物実測図

遺物は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、炭化物・炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 2 暗褐色 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子・炭化粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。

覆土 9層からなり、5層は人為堆積の可能性があり、他は自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック中量、炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を多量、焼土中ブロックを中量、ローム粒子・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。この層だけ投棄された可能性がある。
- 6 暗褐色 ローム粒子を中量、炭化物・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 極暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 9 褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量含み、粘性は弱く、締まっている。

遺物 土師器95点、須恵器片89点、鉄製品1点(門)が出土している。遺物は覆土が浅かったため、少量であったが、竈と住居跡全体の覆土中から出土している。竈内から出土したものは約35%、北東部から出土したものが約17%、南東部から出土したものが約18%、西南部から出土したものが約10%、北西部から出土したものが約6%、その他が約14%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約91%、覆土下層と床面直上が約9%である。第158図1の土師器高台付坏が竈手前の覆土下層から、2の土師器高台付坏(墨書「千」)が東壁寄りと南西コーナー部の覆土下層から、3の門が覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期(9世紀後葉)と考えられる。

第71号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第158図	高台付坏	A [15.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ、中位に不明瞭な稜を持ち、内唇気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナテ。体部外面下位回転へう削り、内面へう磨き。	砂粒 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	30% P440 内面黒色処理 覆土下層 (竈手前)
1	土師器	B (3.8)				

2	高台付環土器部	A 17.1	体部と口縁部の一部欠損。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部は反外する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	スコリア 砂粒 橙色 普通	90% P 441 内面黒色処理 体部外面黒書「千」 覆土下層 (須賀野, 西側コーナ)
	B 7.0					
	D 9.6					
	E 1.4					

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
3	門	(6.7)	0.8	0.6	(24)	覆土下層	M52

第72号住居跡 (第159図)

位置 調査I区東部, D7 a3区。

規模と平面形 南半分に擾乱を受けていることから, 東西軸 (2.86) m, 南北軸 (1.03) m の長方形または方形と推定される。

主軸方向 不明

壁 壁高は33~36cmで, 外傾して立ち上がる。

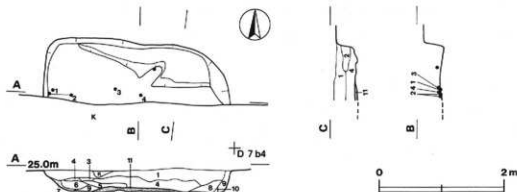
床 全面が平坦で, 締まっている。褐色土による貼床が中央部に施されている。

覆土 10層からなり, 自然堆積と思われる。11層は貼床の層である。

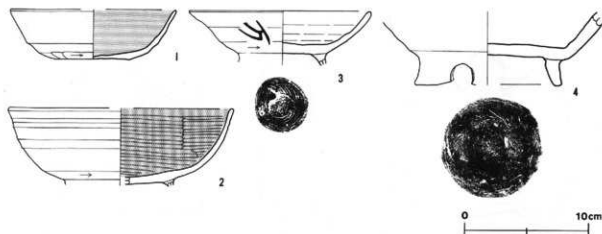
土層解説

- 褐色 ローム粒子を多量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 黒褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, 炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
- 明赤褐色 焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を多量, ローム粒子・炭化物を少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 褐色 灰褐色粘土ブロックを中量, ローム粒子・炭化物・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 褐色 灰褐色粘土粒子を多量, ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量, 炭化粒子を少量含み, 粘性は弱く, 硬く締まっている。
- 暗褐色 ローム粒子を中量, 炭化粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 褐色 ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量, ローム大ブロックを中量, 炭化物を少量含み, 粘性を帯び, 硬く締まっている。

遺物 土器器片78点, 須恵器片32点が出土している。遺物は, 住居跡全体の覆土中から出土している。遺物の出土層位は, 覆土上層が約65%, 覆土中層から覆土下層と床面直上が約32%, その他が約13%である。第160図1の土器器片が西壁寄りの床面直上から, 2の土器器片が覆土下層から, 3 (墨書「万」) と4の須恵器



第159図 第72号住居跡実測図



第160図 第72号住居跡出土遺物実測図

高台付環が中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀前葉）と考えられる。

第72号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 1	環 土 師 器	A [13.2]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、一方向のヘラ削り。	長石 砂粒 内面 黒褐色 外面 にぶい褐色 普通	20% P 442 二次焼成 内面黒色処理 床面直上 (西壁寄り)
		B 4.0				
		C [6.2]				
2	高台付環 土 師 器	A [18.2]	高台部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	30% P 444 内面黒色処理 覆土下層 (西壁寄り)
		B (6.2)				
		E (0.4)				
3	高台付環 須 恵 器	A 14.6	体部と口縁部の一部欠損。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内響気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後、ナデ。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 褐色 普通	70% P 443 体部外面黒色「万」 覆土下層 (中央部)
		B (4.4)				
		E (0.9)				
4	高台付環 須 恵 器	B (5.9)	高台部から体部の破片。高台部は長く、指押による2つの遺かしを持ち、「ハ」の字状に開く。平底。体部は直線的に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け、ロクロナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 浅黄色 普通	50% P 445 覆土下層 (中央部)
		D [12.0]				
		E 1.8				

第73号住居跡（第161図）

位置 調査I区東部，C 6 i0区。

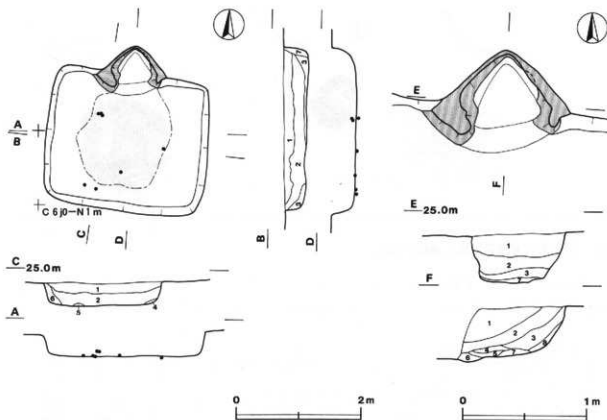
規模と平面形 長軸2.59m，短軸2.17mの長方形である。

主軸方向 N - 4° - E

壁 壁高は32～35cmで，外傾して立ち上がる。

床 全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，煙道部から焚口部まで78cm，最大幅107cm，壁外への掘り込み43cmである。火床部は，床面をほとんど掘りくぼめておらず，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。煙道部は外傾して，緩やかに，のち垂直に立ち上がる。



第161図 第73号住居跡実測図

覆土層解説

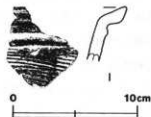
- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | 褐色 | ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 | にぶい赤褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子・灰褐色粘土粒子を中量、焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 7 | 灰褐色 | 灰を多量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 8 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を中量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

覆土 7層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。 |
| 7 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 土師器片139点、須恵器片141点が出土している。遺物は、ほとんど細片で、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約6%、北東部から出土したものが約24%、南東部から出土したものが約30%、南西部から出土したものが約16%、北西部から出土したものが約24%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約44%、覆土中層が約32%、覆土下層と床面直上が約24%である。第162図1の須恵器甕が覆土中から出土している。



第162図 第73号住居跡出土遺物実測図

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。

第73号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号、出土位置、色調など)
第163図 1	甌 須臾器	体部 — 口縁部	口縁部は強く外反して、端部はつまみ上げられている。口縁部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ。内面ナデ。	T P 28 覆土中 灰色

第74号住居跡 (第163図)

位置 調査Ⅰ区東部, C 7 h3k。

重複関係 本跡は第123号土坑と重複している。第123号土坑が本跡の竪を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.73m, 短軸3.63mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は31~35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅14~28cm, 下幅3~10cm, 深さ5~8cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部から南壁にかけてが踏み固められている。

竪 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。竪奥を第123号土坑に掘り込まれており、天井部は崩落し、火床部と両側の袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで96cm, 最大幅130cm, 壁外への掘り込み57cmである。火床部は、床面を6cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、ほとんど硬化していない。

覆土層解説

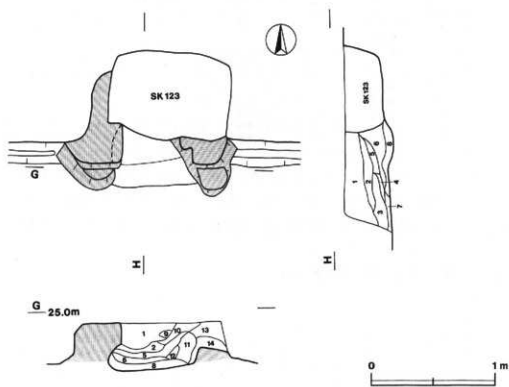
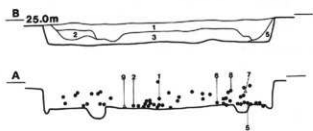
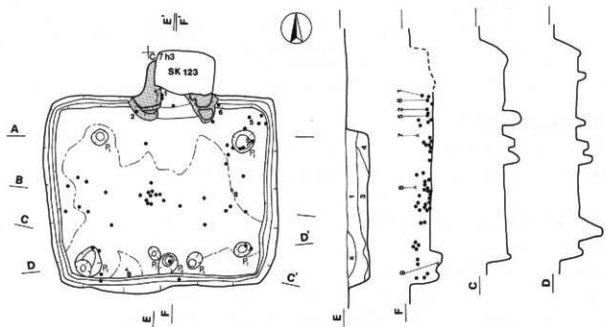
- 1 暗褐色 ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 林暗褐色 ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 暗赤褐色 焼土粒子を多量、焼土中ブロック・焼土小ブロックを中量、ローム粒子・炭化粒子・焼土大ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 6 極暗褐色 炭層。ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 暗褐色 焼土粒子を中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 9 にぶい褐色 火熱を受けた灰褐色粘土ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 10 にぶい褐色 灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 11 灰赤色 灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 12 灰赤色 灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 13 にぶい褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 14 灰褐色 炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット 7か所 (P1~P7)。P1とP3は長径38~48cm, 短径34~43cmの楕円形で、深さ14~40cmである。P2とP4は径24~27cmの円形で、深さ13~18cmである。いずれも各コーナー部寄りに位置し、主柱穴と考えられる。P5~P7は長径24~37cm, 短径18~30cmの楕円形で、深さ20~29cmである。いずれも南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・炭化物を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 褐色 焼土粒子を多量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土小ブロックを中量、炭化粒子・焼土大ブロック・焼土中ブロック・灰褐色粘土大ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを中量、炭化粒子・焼土小ブロックを少量含み、粘性を帯び、締まっている。



第163图 第74号住居跡実測图

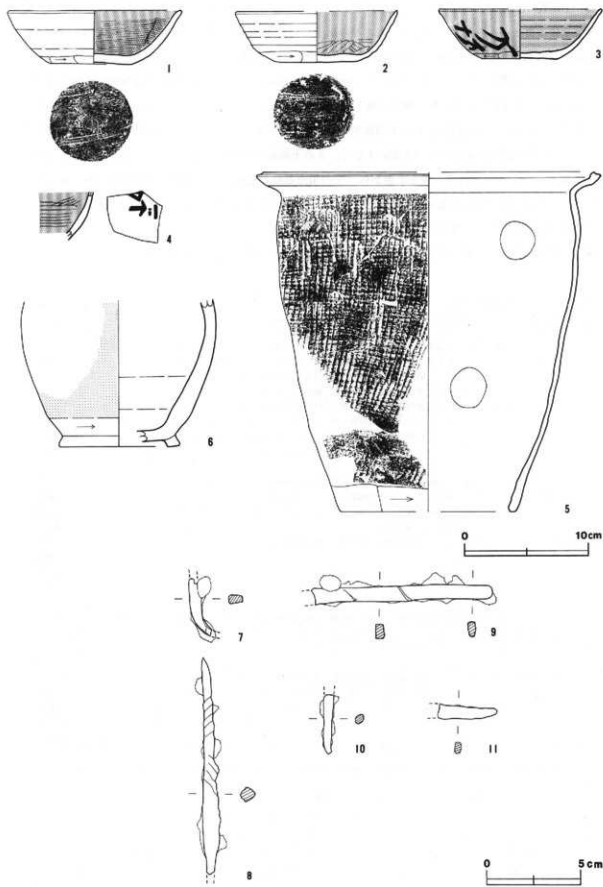
遺物 土師器片365点, 須恵器片231点, 鉄製品5点(刀子1, 不明鉄製品4)が出土している。遺物は, 甕と住居跡全体の覆土中から出土している。甕内から出土したものは約19%, 北東部から出土したものが約20%, 南東部から出土したものが約16%, 南西部から出土したものが約24%, 北西部から出土したものが約12%, ビット内と貼床から出土したものが約2%, その他が約8%である。また, 甕を除いた遺物の出土層位は, 覆土上層が約43%, 覆土中層が約48%, 覆土下層と床面直上が約7%で, ビット内と貼床から出土したものが約2%である。第164図1の土師器坏, 10の不明鉄製品と11の刀子が甕内から, 2の土師器坏が甕西袖脇の覆土下層から, 9の不明鉄製品が南壁寄りの床面直上から, 3の土師器坏(墨書「万坏」)がP3覆土中から, 4の土師器坏(墨書「口不」)が南西部の覆土中層から, 5の須恵器瓶が北西部から南東部の覆土中層から覆土下層にかけて, 6の須恵器長頸瓶が甕東袖脇の覆土下層から, 7の不明鉄製品が北東コーナー部の覆土中層から, 8の不明鉄製品が東壁寄りの覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代前期(9世紀中葉)と考えられる。

第74号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第164図 1	土師器 坏	A 13.9	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ, 中位に不明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り, 内面から底部内面にかけヘラ磨き。外面同転ヘラ削り後, ヘラ削り。	スコリア 砂粒 内面 黒色 外面 褐色 普通	80% P447 内面黒色処理 甕内
		B 4.4				
		C 6.5				
2	土師器 坏	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ, 中位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り, 内面から底部内面にかけヘラ磨き。外面同転ヘラ削り後, 手持ちヘラ削り。	長石 雲母 砂粒 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	60% P448 内面黒色処理 覆土下層 (甕西袖脇)
		B 4.1				
		C 6.2				
3	土師器 坏	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけ, 下位に明瞭な稜を持ち, 内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り, 底部手持ちヘラ削り後, ナデ。	スコリア 砂粒 黒色 普通	30% P449 内外面黒色処理 体部外面墨書「万坏」 P3覆土中
		B 4.0				
		C 6.2				
4	土師器 坏	B (3.9)	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ, 内面ヘラ磨き。	砂粒 内面 黒色 外面 にぶい褐色 普通	10% P450 内面黒色処理 体部外面墨書「口不」 覆土中層 (南西部)
5	須恵器 瓶	A [26.6]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し, 中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面上位格子タタキ, 下位ヘラ削り。内外面アテ具痕有り。	長石 砂粒 灰黄色 普通	30% P452 甕内 覆土中層～下層 (北西部～南東部)
		B 27.3				
		C [14.0]				
6	長頸須恵器 瓶	B (11.8)	高台部から体部の破片。高台部は短く, 「ハ」の字状に開く。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部内外面ロクロナデ。体部外面下位同転ヘラ削り, 底部同転ヘラ削り。高台部磨り付け, ロクロナデ。	長石 砂粒 灰色 釉 黒色 普通	20% P451 外面一部自然釉 体部外面一部剥離 覆土下層 (甕東袖脇)
		D [9.6]				
		E 0.9				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	不明鉄製品	(3.5)	0.7	0.5	(2.88)	覆土中層(北東コーナー)	M53
8	不明鉄製品	(11.6)	0.9	0.8	(22.00)	覆土上層(東壁寄り)	M54
9	不明鉄製品	(9.7)	0.8	0.4	(16.00)	床面直上(南壁寄り)	M55
10	不明鉄製品	(3.1)	0.6	0.4	(1.80)	甕内	M56
11	刀子	(3.2)	0.8	0.4	(1.12)	甕内	M72



第164图 第74号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡（第165図）

位置 調査Ⅰ区東部，C7h5区。

規模と平面形 長軸3.80m，短軸3.17mの長方形である。竈の両側に棚部が付設されている。長さ81cm，幅24cmの長方形である。棚部を除いた規模は，長軸3.47m，短軸3.17mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は33~44cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅11~27cm，下幅3~11cm，深さ6~16cmで，断面形はU字状である。

床 全面が平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂泥じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，煙道部から焚口部まで104cm，最大幅155cm，壁外への掘り込み50cmである。火床部は，床面を5cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化していない。焚口部から55cm奥の火床部に土を盛り上げ，第166図5の須恵器高坏を逆立て設置し，支脚として利用している。煙道部は，緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

1	黒褐色	ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
3	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	にぶい褐色	ローム粒子を中量，焼土粒子を少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を少量，焼1粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
6	灰褐色	灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	灰褐色	ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量，ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。
8	暗赤褐色	ローム粒子を少量，焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
9	暗灰色	灰を多量，ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
10	灰褐色	灰褐色粘土粒子を中量，焼土粒子・灰を少量含み，粘性を帯び，締まりはない。
11	にぶい褐色	焼土粒子を中量，灰褐色粘土粒子を少量，灰を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
12	暗赤褐色	焼土粒子を中量，焼土小ブロックを少量，灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。

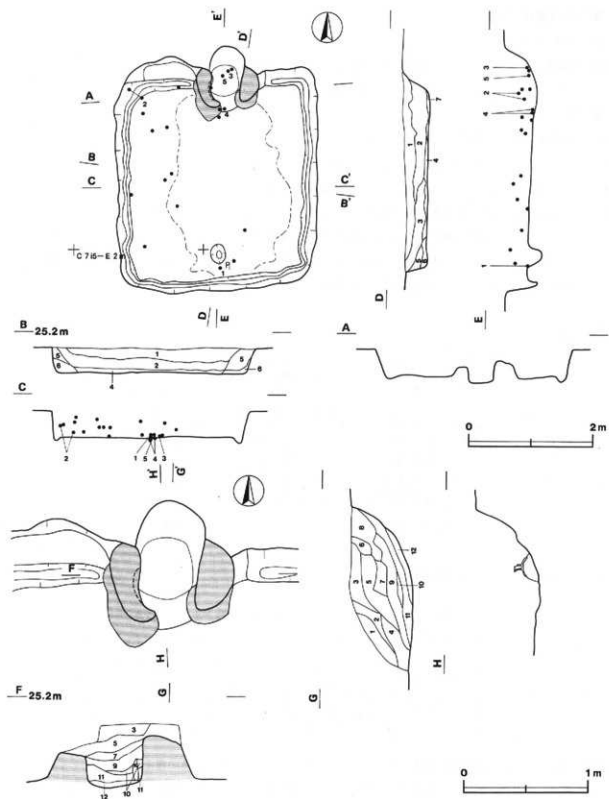
ピット P1は長径31cm，短径24cmの楕円形で，深さ24cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を中量，ローム中ブロック・炭化物・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
2	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
3	黒褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
5	暗褐色	ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化物・炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
6	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
7	にぶい褐色	灰褐色粘土小ブロック・黄褐色粘土粒子を多量，ローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。

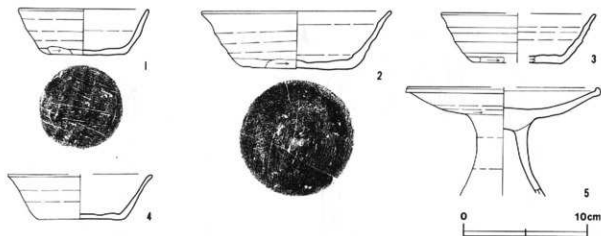
遺物 土師器片70点，須恵器片80点が出土している。遺物は，竈と住居跡全体の覆土中から出土しており，竈内から出土したものは約16%，北東部から出土したものが約8%，南東部から出土したものが約11%，南西部から出土したものが約26%，北西部から出土したものが約27%，その他が約12%である。特に，西半分に約53%が集中している。また，竈を除いた遺物の出土層位は，覆土上層が約63%，覆土中層が約26%，覆土下層と床面直上が約11%である。第166図1の須恵器高坏が南壁寄りの覆土下層から，2の須恵器高坏が北西コーナー部の覆土中層から覆土下層にかけて，3の須恵器高坏と5の須恵器高坏が竈内から，4の須恵器高坏が竈内と覆土中からそれぞれ出土している。竈内から出土した土師器片は，火熱を受けておらず，竈外から出土したものと接



第165図 第75号住居跡実測図

合していることから、住居廃絶後に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後葉）と考えられる。



第166図 第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土遺物観察表

原番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第166図	須恵器 坏	A 10.4	平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへう割り。底部回転へう割り後、へう割り。	長石 砂粒 灰色 普通	100% P453 覆土下層 (南壁寄り)
		B 3.7				
		C 6.4				
2	須恵器 坏	A 15.2	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへう割り。底部回転へう割り後、手持ちへう割り。	石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	80% P454 覆土中層～下層 (北西コーナー)
		B 4.8				
		C 9.0				
3	須恵器 坏	A [12.2]	底面から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへう割り。底部回転へう割り。	石英 雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	20% P455 甕内
		B 4.0				
		C [7.0]				
4	須恵器 坏	A [11.7]	底面から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転へう割り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 灰白色 普通	40% P456 甕内
		B 3.6				
		C 7.0				
5	高須恵器 盤	A [15.6]	脚部から口縁部の破片。脚部はラッパ状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。端部は屈曲して直立する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転へう割り。脚部貼り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 黄灰色 普通	60% P458 底部内面二次焼成 甕内 支脚転用
		B (8.8)				
		E (5.7)				

第76号住居跡 (第167図)

位置 調査I区東部、C7g4区。

規模と平面形 長軸3.34m、短軸3.23mの方形である。

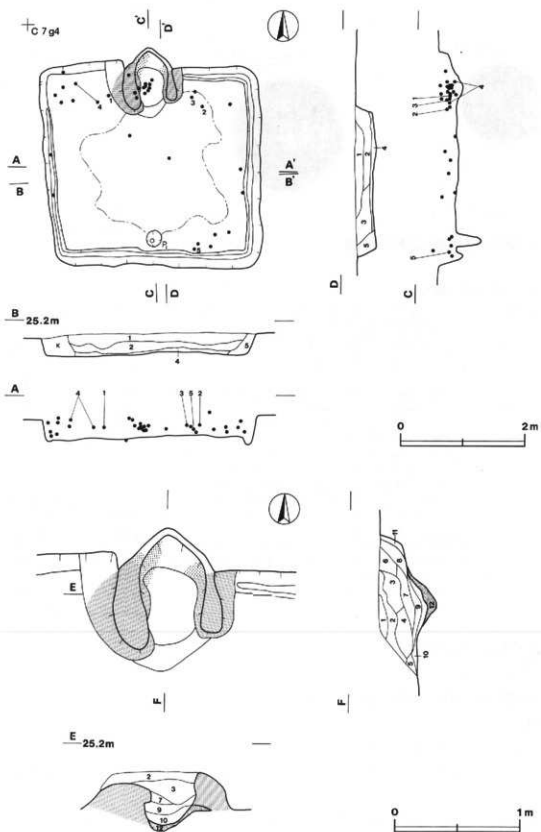
主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は27～35cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西コーナーの際を除いて廻っている。上幅14～29cm、下幅4～10cm、深さ2～12cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、煙道部から焚口部まで112cm、最大幅120cm、壁外への掘り込み13cmである。火床部は、床面を20cmほど掘りくぼめた後、黒褐色土を貼り、深さ12cmほどの火床面が作られている。その上面は火熱を受けて、袖部の際を中心に赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は外傾して、階段状に立



第167图 第76号住居跡実測图

ち上がる。竈の土層は12層に分けられた。そのうち、1～11層は天井部や袖部の崩落土など、12層は火床部の貼床層である。

竈土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・砂混じりの灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 灰 褐色 ローム粒子・砂混じりの灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 灰 褐色 砂混じりの灰褐色粘土粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 褐 灰色 砂混じりの灰褐色粘土粒子を多量、焼土小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 5 褐色 焼土粒子・砂混じりの灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 にぶい赤褐色 炭化物を多量、焼土粒子を中量、灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 にぶい赤褐色 砂混じりの灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を少量、焼土小ブロックを微量含み、粘性を弱く、締まりはない。
- 8 赤 褐色 焼土粒子を中量、焼土小ブロックを少量、ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 9 赤 褐色 焼土粒子を中量、灰を少量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 10 暗赤褐色 焼土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 11 褐色 ローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 12 黒 褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。

ピット P1は径25cmの円形で、深さ42cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

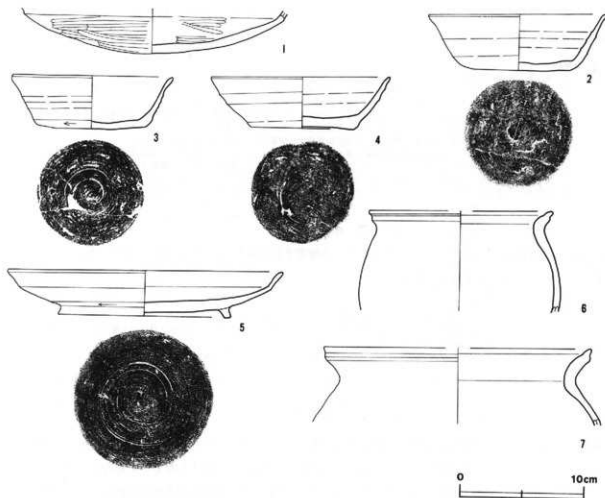
- 1 暗 褐色 ローム粒子を中量、炭化粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロック・ローム大ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性を弱く、締まっている。
- 5 暗 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土小ブロックを少量含み、粘性はなく、締まっている。

遺物 土師器片176点、須恵器片104点、鉄滓2点、鏝2点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約28%と多く、北東部から出土したものが約22%、南東部から出土したものが約17%、南西部から出土したものが約7%、北西部から出土したものが約18%、その他が約9%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層から覆土中層が約51%、覆土下層と床面直上が約33%、その他が約16%である。第168図1の土師器環が竈西袖脇の覆土中層から、2と3の須恵器環が竈東袖脇の覆土中層から、4の須恵器環が北西コーナー部の覆土上層から覆土中層にかけて、5の須恵器蓋が竈東寄りの覆土下層から、6の土師器小形甕と7の土師器甕が竈内からそれぞれ出土している。竈内から出土した土器片は、火熱を受けておらず、竈外から出土したものと接合していることから、住居廃絶後に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期（8世紀後半）と考えられる。

第76号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徵	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第168図 1	環 土師器	H (3.7)	底部から口縁部の破片。丸底。体部から口縁部にかけて、内筒気味に立ち上がる。口縁端部は外反する。	体部内外面・底部内外面ヘラ磨き。	赤褐色 スクリア 褐色 普通	60% P459 覆土中層 (竈西袖脇)
2	環 須恵器	A 14.2	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内筒気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	石英・雲母 砂粒 にぶい赤褐色 普通	80% P460 覆土中層 (竈東袖脇)
		B 4.6				
		C 8.6				
3	環 須恵器	A 12.8	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外下位回転ヘラ切り。底部回転ヘラ切り後、ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	90% P461 覆土中層 (竈東袖脇)
		B 4.3				
		C 8.5				



第168図 第76号住居跡出土遺物実測図

第168図 4	坏 須恵器	A 14.3	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ削り後、一方方向の手持ちヘラ削り。底部内面ナデ。	長石 雲母 砂粒 褐色 普通	80% P462 覆土上層～中層 (北西コーナー)
		B 4.3				
		C 8.2				
5	盤 須恵器	A 22.1	体部と口縁部の一部欠損。高台部は短く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け。ロクロナデ。	長石 石英 雲母 スコリア 砂粒 暗灰黄色 普通	70% P463 覆土下層 (南壁寄り)
		B 3.8				
		D 13.8				
		E 1.0				
6	小形 変 土 器	A [14.6]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を施す。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	20% P464 壺内
		B (8.0)				
7	壺 土 器	A [21.6]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	10% P465 壺内
		B (6.1)				

第79号住居跡（第169図）

位置 調査Ⅰ区東部，C7B区。

規模と平面形 長軸3.62m，短軸3.50mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は53～57cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 全周しており，北西コーナー部付近では幅が広がっている。上幅21～91cm，下幅5～68cm，深さ4～11cmで，断面形はU字状である。

床 全面が平坦で，締まっている。特に，中央部から南東部にかけて踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規矩は，焚口部から煙道部まで134cm，最大幅114cm，壁外への掘り込み74cmである。火床部は，床面を7cmほど掘りくぼめており，火熱を受けている。火床部と両袖部の際を中心に，赤変しているが，あまり硬化はしていない。煙道部は外傾して，垂直に立ち上がる。

竈土層解説

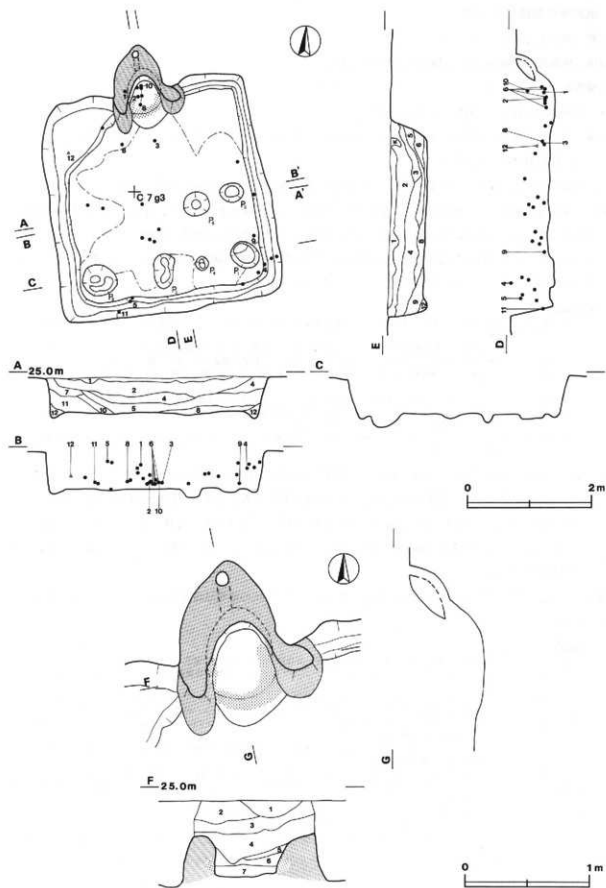
- 1 黒褐色 灰褐色粘土小ブロックを中量，ローム粒子を少量，ローム中ブロック・ローム小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粒子・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 3 暗褐色 灰褐色粘土小ブロックを少量，ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 4 暗褐色 ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 5 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 6 黒褐色 焼土粒子を中量，ローム粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土小ブロックを少量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土中ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 7 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量，炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まっている。

ピット 6か所（P1～P6）。P1は長径45cm，短径37cmの楕円形，P2は径54cmの円形で，いずれも深さ25cmである。南東と南西コーナー部寄りに位置し，いずれも支柱穴と考えられる。P3とP4は長径21～38cm，短径18～28cmの楕円形で，深さ14～17cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。P5とP6は長径38～40cm，短径30～40cmの楕円形または円形で，深さ7～18cmである。いずれも東壁寄りに位置し，性格は不明である。

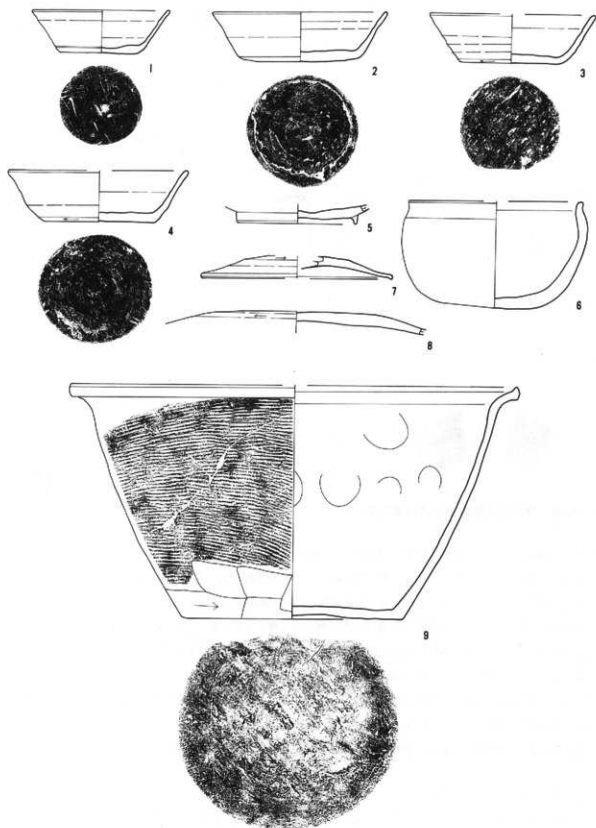
覆土 12層からなり，ロームブロックが非常に多く，ブロック状の堆積状況がみられることから，人為堆積と思われる。

土層解説

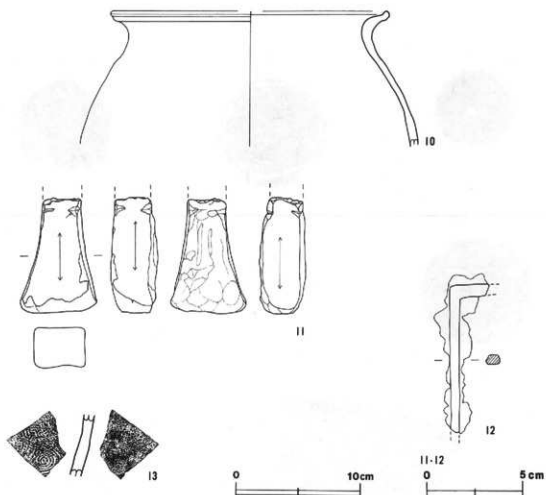
- 1 暗褐色 ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量，灰褐色粘土小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロック・炭化物・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性を帯び，締まっている。
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを中量，炭化物・炭化粒子・焼土大ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム中ブロックを中量，炭化粒子・焼土小ブロック・黒色上粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 6 暗褐色 ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，炭化粒子・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まっている。
- 7 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロックを中量，炭化物を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 8 褐色 ローム粒子を多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・黒色上粒子を中量，ローム大ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土中ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 9 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子を多量，炭化物を中量，ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 10 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量，焼土粒子を中量，炭化物・焼土小ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 11 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量，ローム大ブロックを中量，炭化粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 12 暗褐色 ローム粒子を多量，ローム小ブロックを中量，ローム大ブロック・ローム中ブロックを少量含み，粘性は弱く，締まりはない。



第169图 第79号住居跡実測图



第170图 第79号住居跡出土遺物実測図(1)



第171図 第79号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 土師器片137点, 須恵器片44点, 石器1点(砥石), 鉄製品1点(門)が出土している。遺物は, 竈と住居跡全体の覆土中から出土しており, 竈内から出土したものは約19%, 北東部から出土したものが約30%, 南東部から出土したものが約20%, 南西部から出土したものが約18%, 北西部から出土したものが約7%, その他が約6%である。また, 竈を除いた遺物の出土層位は, 覆土上層が約53%, 覆土中層が約43%, 覆土下層と床面直上が約4%である。第170図1と2の須恵器坏, 6の土師器碗が竈内から, 3の須恵器坏と8の須恵器蓋が竈手前の覆土下層から, 5の須恵器高台付坏が南壁寄りの覆土上層から, 9の須恵器鉢が東壁寄りの覆土下層から, 第171図10の土師器甕が北東部の覆土上層と竈内から, 11の砥石が南壁寄りの覆土下層から, 12の門が西壁寄りの覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代後期(8世紀後葉)と考えられる。

第79号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第170図 1	坏	A 11.1	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後, 一方向の手持ちヘラ削り。	長石 雲母 砂粒	80% P 466
	須恵器	B 3.6			灰色	竈内
		C 6.3	口縁部はわずかに外反する。		普通	
2	坏	A 14.2	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて, 直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後, ナデ。	雲母 砂粒	70% P 467
	須恵器	B 3.9			灰黄色	竈内
		C 7.5	口縁部はわずかに外反する。		普通	

第170回	環	A [13.5]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナデ。体部外面下位回転へう削り。底部回転へう削り後、一方向のへう削り。	長石 石英 砂粒 灰白色 普通	60% P 468 覆上下層 (電子筒)
3	須恵器	B 4.0 C 8.2				
4	環	A [14.3]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナナデ。体部外面下位回転へう削り。底部回転へう削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 浅灰色 普通	40% P 469 覆土中層 (南東コーナー)
5	高台付環	B (1.6)	高台部から底部の破片。高台部は短く、直線的に開く。平底。	底部回転へう切り後、ナデ。高台部貼り付け、口ロナナデ。	長石 雲母 砂粒 黄灰色 普通	30% P 470 底部外面面付着 凝結用 覆土上層 (西壁寄り)
6	土師器	A [14.2] B 8.6 C 7.0	底部・体部・口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は内傾し、端部は直立する。	口縁部内外面口ロナナデ。底部内外面ナデ。	雲母 砂粒 ぶい黄褐色 普通	80% P 471 二次焼成 竈内
7	壺	A [13.4] B (1.8)	天井部から口縁部の破片。天井部は平皿で、緩やかに開く。口縁端部は屈曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面口ロナナデ。頂部回転へう削り。	砂粒 灰赤褐色 普通	30% P 472 覆土中
8	壺	B (1.6)	天井部から口縁部の破片。天井部は平皿で、緩やかに開く。	天井部内外面・口縁部内外面口ロナナデ。頂部回転へう削り。	雲母 砂粒 灰黄色 普通	40% P 473 覆土下層 (壁手前)
9	鉢	A [36.0] B 18.7 C 18.0	底部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面口ロナナデ。体部外面平行タタキ。下位へう削り。内面ナテ具痕有り。底部内外面ナデ。外面モミ痕有り。	石英 雲母 砂粒 黄灰色 普通	60% P 474 覆土下層 (東壁寄り)
第171回	甕	A [22.4] B (10.8)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。下端に棒状工具による凹線を通らる。	口縁部内外面口ロナナデ。体部内外面ナデ。	長石 砂粒 ぶい橙色 普通	20% P 475 竈内 覆土上層 (北東部)

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
11	瓶	4	(6.2)	4.1	2.4	(65)	凝灰岩 覆土下層(西壁寄り)	Q17

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
12	門		(8.5)	0.5	0.5	(14)	覆土中層(西壁寄り)	M57

図版番号	器 種	部 分	器 形 ・ 手 法 の 特 徴		備考(台帳番号、出土位置、色調など)
			体 部	外 面 凹 心 円 状 の タ タ キ , 内 面 ナ デ , ア ナ 具 痕 有 り 。	
13	須 恵 器	体 部	外 面 凹 心 円 状 の タ タ キ , 内 面 ナ デ , ア ナ 具 痕 有 り 。		T P 29 覆土中層(南東部) 灰黄色

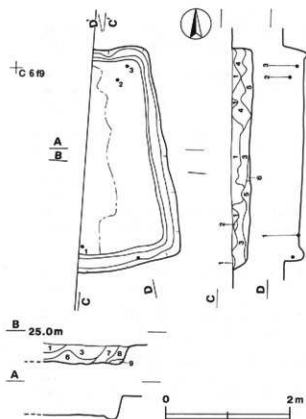
第80号住居跡(第172回)

位置 調査I区東部、C 69区。

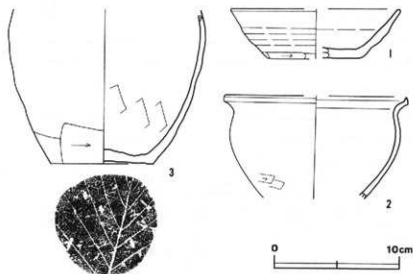
規模と平面形 竈を含む西半部分が調査区域外であることから、東西軸(1.66)m、南北軸(3.48)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 不明

壁 壁高は24~32cmで、外傾して立ち上がる。



第172図 第80号住居跡実測図



第173図 第80号住居跡出土遺物実測図

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代前期（8世紀前葉）と考えられる。

第80号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173図	須恵器	A [3.8] B 4.0 C [7.1]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中に明瞭な線をもち、内摩気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちへつ割り。底部回転へつ割り後、手持ちへつ割り。	灰石 蛭母 砂粒 灰黄褐色 普通	30% P476 覆土下層 (南壁寄り)

壁溝 北東コーナー部の際から南壁際にかけて延っている。上幅16~33cm, 下幅4~15cm, 深さ5~8cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況がみられることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 2 褐色 ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 4 褐色 ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム中ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 6 黒褐色 ローム粒子を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 7 暗褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 8 灰褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器片13点、須恵器片28点が出土している。遺物は、住居跡全体の覆土中から出土している。遺物の出土層位は、覆土上層から覆土中層にかけてが多い。第173図1の須恵器片が南壁寄りの覆土下層から、2の土師器小形壺が北東コーナー部の覆土上層から、3の土師器小形壺が覆土中層からそれぞれ出土している。

第173号	小形 美 上 部 器	A [14c] B (8z)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内壁気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面下位へラ削り。	空母 スコアア 砂粒 に白い黄褐色 普通	20% P 477 覆土上層 (北東コーナー)
3	小形 美 上 部 器	B (12d) C 8z	底部から体部の破片。平底。体部は内壁気味に立ち上がる。	体部内外面ナデ。体部外面下位へラ削り。内面ヘラナデ。底部水取痕有り。	長石 砂粒 に白い赤褐色 普通	50% P 478 覆土中層 (北東コーナー)

第81号住居跡 (第174図)

位置 調査1区東部、C 7 d2区。

重複関係 本跡は第58号土坑と重複している。第58号土坑が、本跡の西壁の覆土上層を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸3.52m、短軸3.37mの方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は51~58cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅12~33cm、下幅2~10cm、深さ2~5cmで、断面形はU字状である。

床 全面がほぼ平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで129cm、最大幅94cm、壁外への掘り込み31cmである。火床部は、床面を3cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化はしていない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

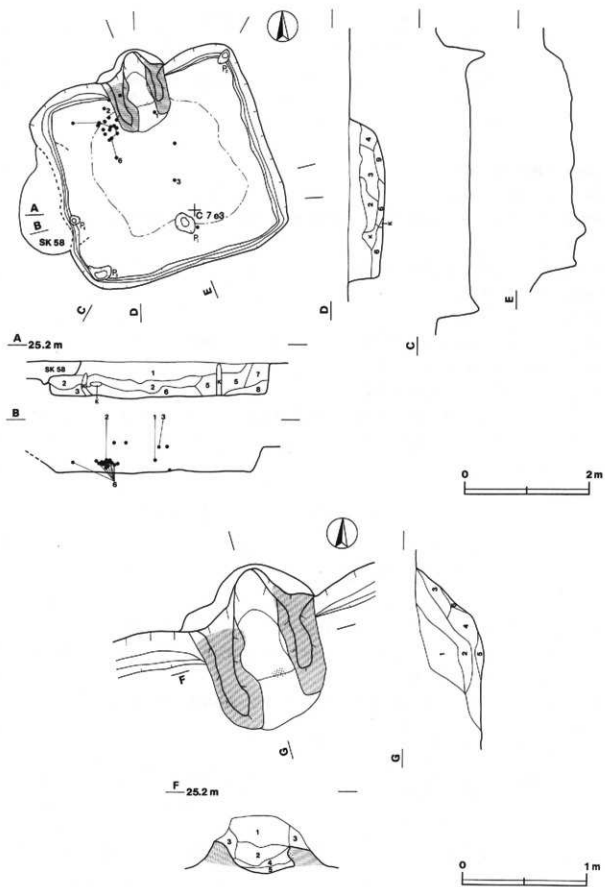
- 1 褐 色 ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、ローム中ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 2 灰 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 3 灰 褐色 灰褐色粘土小ブロックを少量、ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 に白い赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。
- 5 灰 褐色 焼土粒子を少量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まりはない。
- 6 褐 色 ローム粒子を中量、灰を少量含み、粘性を帯び、締まりはない。

ピット 4か所 (P1~P4)。P1は長径37cm、短径28cmの楕円形で、深さ26cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。P2とP3は長径25~31cm、短径16~20cmの楕円形で、深さ22~32cmである。P4は径17cmの円形で、深さ17cmである。P2は北東コーナー部に、P3は南西コーナー部に、P4は西壁脇に位置し、いずれも性格は不明である。

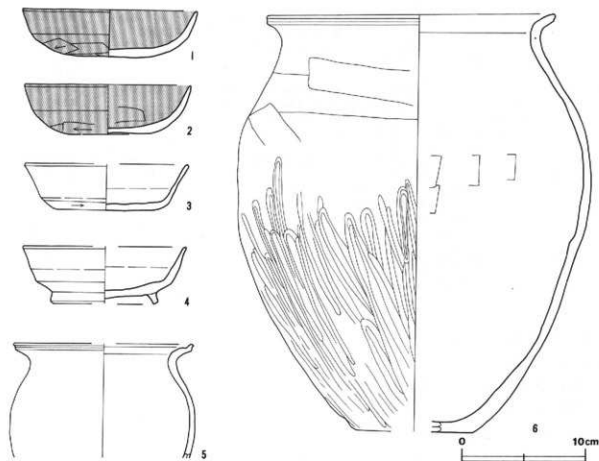
覆土 9層からなり、ブロック状の堆積状況がみられることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロック・ローム中ブロックを中量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 暗 褐色 ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量、炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子・黒色土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 4 暗 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 5 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、炭化物を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 6 黒 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロック・炭化粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 7 褐 色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、黒色土粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 8 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム大ブロックを中量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 9 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子を多量、ローム中ブロックを中量、ローム大ブロックを少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。



第174图 第81号住居跡実測图



第175図 第81号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片82点、須恵器片10点、灰軸陶器1点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約27%、北東部から出土したものが約32%、南東部から出土したものが約11%、南西部から出土したものが約5%、北西部から出土したものが約13%、その他が約12%である。特に、竈手前の北東部と北西部に集中して出土している。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約63%と多く、覆土中層が約22%、覆土下層と床面直上が約15%である。第175図1の土師器片が竈内焚口部から、2の土師器片が竈西袖脇の覆土中層から、3の須恵器片が中央部の覆土中層と東部の覆土中層から、6の土師器片が竈手前から北西コーナー部にかけての覆土中層から覆土下層、および竈内からそれぞれ出土している。また、出土した灰軸陶器長頸瓶は猿投窯産黒笹14号窯式のもので、時期差があることから、後世の攪乱による混入と考えられる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代前期（8世紀前葉）と考えられる。

第81号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第175図 1	土師器	A 140	口縁部の一部欠損。丸底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面一部ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 スコリア 砂粒 橙色 普通	90% P480 内外面黒色処理 竈内 (焚口部)
		B 3.8				
2	土師器	A 134	口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 砂粒 内ふい黄橙色 普通	90% P481 内外面黒色処理 覆土中層 (竈西袖脇)
		B 3.9				
		C 6.0				

第175号	環 須恵部	A [13.1]	底部から口縁部の破片。平底、体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内層気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底面回転ヘラ切り後、ナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	60% P 482 覆土中層 (中央部) 覆土中 (東部)
		B 3.7				
		C 8.2				
4	高台付環 須恵部	A [13.2]	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底、体部から口縁部にかけて、下位に明瞭な稜を持ち、内層気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。底面回転ヘラ削り後、ナデ。高台部削り付け、ロクロナデ。	雲母 砂粒 灰色 普通	40% P 483 覆土中
		B 4.6				
		D [8.7] E 1.0				
5	小形美 上層部	A [14.6]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内層気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口縁部に棒状工具による凹線が通らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	雲母 砂粒 黒褐色 普通	20% P 485 覆土中層
		B (9.1)				
6	美 十層部	A 23.1	底部・体部・口縁部の一部欠損；平底、体部から口縁部にかけて、内層気味に立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。口縁部に棒状工具による凹線が通らす。	口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ、上位ヘラナデ、下位ヘラ磨き。内面ナデ、一部ヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 灰色 普通	80% P 484 覆土中層～下層 (覆土前～ 北西コーナー)
		B 33.5				
		C 9.6				

第82号住居跡 (第176図)

位置 調査I区東部，C7d4区。

規模と平面形 長軸2.86m，短軸2.74mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は35～47cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅12～27cm，下幅2～10cm，深さ5～7cmで，断面形はU字状である。

床 全面がほぼ平坦で，締まっている。特に，中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており，火床部，煙道部と両側の袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで103cm，最大幅111cm，壁外への掘り込み43cmである。火床部は，床面を16cmほど掘りくぼめており，火熱を受けて赤変しているが，あまり硬化はしていない。煙道部は外傾して，緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

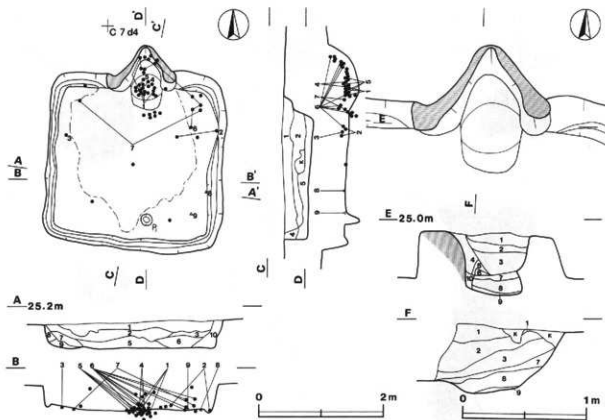
- 暗褐色 ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 暗褐色 ローム粒子を少量，焼土粒子・灰褐色粘土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 暗褐色 ローム粒子を中量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 暗褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 褐色 灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子を少量，焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を少量，灰褐色粘土粒子を少量，炭化粒子を微量含み，粘性は弱く，締まっている。
- 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰を少量，ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 暗褐色 灰を中量，焼土粒子を少量，ローム粒子・焼土小ブロックを微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 暗褐色 灰褐色粘土粒子を中量，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，粘性は弱く，締まっている。

ピット P1は径18cmの円形で，深さ25cmである。南壁寄りに位置し，出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり，自然堆積と思われる。

土層解説

- 褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子・暗褐色土を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。
- 暗褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
- 暗褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まっている。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
- 暗褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロックを微量含み，粘性を帯び，硬く締まっている。
- 暗褐色 ローム粒子を少量，ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み，粘性を帯び，締まりはない。
- 暗褐色 ローム粒子を微量含み，粘性は弱く，締まりはない。



第176図 第82号住居跡実測図

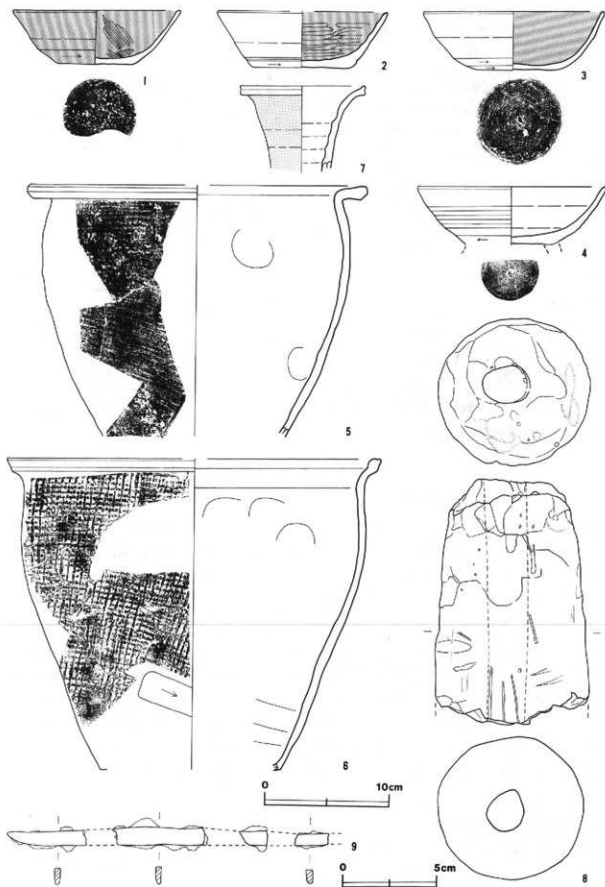
- 9 黒褐色 灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
 10 褐色 ローム粒子・暗褐色土を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器片131点、須恵器片32点、灰軸陶器3点、土製品1点（羽口）、鉄製品1点（刀子）が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが、竈を中心に集中している。竈内から出土したものは約40%、北東部から出土したものが約20%、南東部から出土したものが約17%、南西部から出土したものが約5%、北西部から出土したものが約13%、その他が約5%である。また、竈を除いた遺物の出土層位は、覆土上層が約35%、覆土中層が約48%、覆土下層と床面直上が約16%、その他が約1%である。第177図1の土師器坏と4の須恵器高台付坏が竈内から、2の土師器坏が南東部の覆土中層、東壁から中央部にかけての覆土下層および竈内から、3の土師器坏が西壁寄りの覆土下層から、5の須恵器鉢が北西部の覆土上層と竈内から、6の須恵器鉢が竈内と北東コーナー部の覆土中層から覆土下層にかけて、7の灰軸陶器長頸瓶が北東コーナー部と北西コーナー部の覆土下層から、8の羽口が東壁寄りの床面直上から、9の刀子が南東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。7の灰軸陶器長頸瓶は猿投窯産黒90号窯式のものと考えられる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀中葉）と考えられる。

第82号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第177図 1	土師器	A 13.4	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部に向け、中位に明瞭な稜を持ち、内壁気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り、内面から底部内面にかけて磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	スコリア 砂粒	50% P487 内面黒色処理 二次焼成 竈内
		B 4.4				
		C 6.0				



第177图 第82号住居跡出土遺物実測図

第177号	坏土師器	A [13.4] B 4.5 C 7.6	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、下位に凹線を高らせ、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけて磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 褐色 外面 ぶい・橙褐色 普通	50% P487 内面褐色処理 内面土層(南東部) 覆土下層 (東壁寄り-中央部)
3	坏土師器	A 14.5 B 48-48 C 6.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ヘラ削り。	スコリア 砂粒 ぶい・黄褐色 普通	60% P488 内面褐色処理 覆土下層 (西壁寄り)
4	高台付坏須恵器	A 15.2 B (4.7) E (0.5)	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	長石 砂粒 灰黄褐色 普通	50% P489 二次焼成 甕内
5	鉢須恵器	A [27.0] B (21.0)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面口ロナデ。体部外面上位格子タタキ。下位ヘラ削り。内面アツナ具痕有り。	雲母 スコリア 砂粒 灰黄褐色 普通	20% P491 二次焼成 スス付着 甕内覆土上層 (北西部)
6	鉢須恵器	A [30.2] B 23.0 C [14.6]	体部から口縁部の破片。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、端部はつまみ上げられている。口唇部に棒状工具による凹線を高らす。	口縁部内外面口ロナデ。体部外面上位格子タタキ。下位ヘラ削り。内面一部ヘラナデ、アツナ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 褐色 普通	30% P490 二次焼成 甕内 覆土中層-ド層 (北東コーナー)
7	長頸瓶状須恵陶器	A [10.0] B (6.9)	頸部から口縁部の破片。頸部はラッパ状に開き、口縁部で外反する。端部は中位に明瞭な稜を持ち、つまみ上げられている。	口縁部内外面口ロナデ。粘附毛痕有り。	長石 砂粒 灰白 粘 オリーブ黄色 良好	20% P479 覆土ド層(北東コーナー、北西コーナー) 仮定底面 (黒径90号形式)

図版番号	種別	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
8	瓶口	(13.1)	8.2	7.6	(2.4)	(675)	床面直上(東壁寄り)	DP8
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
9	刀子	[17.0]	0.9	0.4	(11)	覆土下層(南東コーナー)	M58	

第84A号住居跡(第178図)

位置 調査ⅡA区北部、D4g7区。

重複関係 本跡は第84B号住居跡、第14号掘立柱建物跡と重複している。本跡が、第84B号住居跡の東壁寄りの覆土と、第14号掘立柱建物跡のP1を掘り込んでいることから、いずれよりも本跡が新しい。

規模と平面形 北側部分が調査区域外であることから、東西軸(2.92)m、南北軸(1.66)mの長方形または方形と推定される。

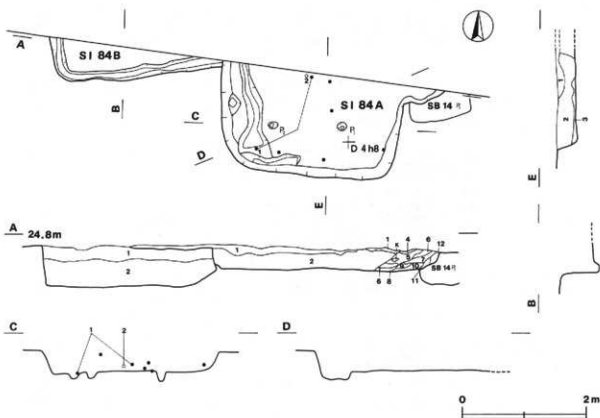
主軸方向 N-89°-E

壁 壁高は30~34cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁際から南西コーナー部の際にかけて巡っている。上幅15~50cm、下幅4~33cm、深さ8~12cmで、断面形はU字状である。

床 全面がほぼ平坦で、締まっている。

竈 東壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部が残存している。袖部は特に張り出していない。規模は、東壁から煙道部まで(70)cm、最大幅(30)cm、壁外への掘り込み



第178図 第84A・84B住居跡実測図

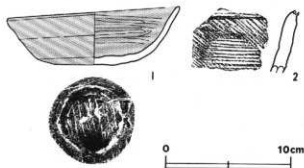
70cmである。火床部は、床面を2cmほど掘りくぼめているが、あまり火熱を受けていない。煙道部は外傾して立ち上がる。

ピット 2か所 (P1・P2)。P1とP2は長径16cm、短径10~12cmの楕円形で、深さ11~15cmである。それぞれ南東・南西コーナー部寄りに位置し、いずれも支柱穴と考えられる。

覆土 3層 (1~3層) からなり、ロームの堆積状況から、人為堆積と思われる。4~12層は竈の土層である。

土層・竈土層解説

- | | |
|----------|--|
| 1 黒褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を中量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 3 褐色 | ローム粒子を多量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量含み、粘性を帯び、硬く締まっている。 |
| 4 褐色 | ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 灰褐色 | 灰褐色粘土粒子を中量、ローム粒子を少量、ローム小ブロック・焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 6 褐色 | 灰褐色粘土粒子を少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 7 暗赤褐色 | 焼土粒子を中量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 8 にぶい赤褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子・炭を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |



- | | |
|-----------|---|
| 9 暗赤褐色 | 焼土粒子を多量、炭を中量、焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりは悪い。 |
| 10 にぶい赤褐色 | 焼土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子・焼土小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 11 暗赤褐色 | ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 12 極暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

第179図 第84A号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片87点, 須恵器片1点が出土している。遺物の出土層位は, 覆土上層が約57%, 覆土下層が約43%である。第179図1の土師器坏が完形で中央部と南西コーナー部の覆土下層から, 2の須恵器鉢が中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 平安時代前期(9世紀前葉)と考えられる。

第84A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第179図 1	土師器 坏	A 13.8	平底。体部から口縁部にかけて, 上位と下位に不明瞭な線をもち, 内響気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面クロロナデ。体部内面から底部内面にかけて磨き。底部外面回転へう切り後, ナデ。底部内面指頭痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	100% P49 内面黒色処理 覆土下層(中央部, 南西コーナー)
		B 4.8				
		C 7.0				

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
2	鉢 須恵器	体部	外面平行タタキ, 内面横ナデ。	TP30 覆土下層(中央部) 灰色

第84B号住居跡(第178図)

位置 調査ⅡA区北部, D4g7区。

重複関係 本跡は第84A号住居跡と重複している。第84A号住居跡が本跡の東壁寄りの覆土を掘り込んでいることから, 本跡が古い。

規模と平面形 竈を含む北半部分が調査区域外であることから, 東西軸(2.60)m, 南北軸(0.64)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 不明

壁 壁高は42~48cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 南西コーナー部の際から南壁際にかけて通っている。上幅17~22cm, 下幅2~12cm, 深さ9cmで, 断面形はU字状である。

床 全面がほぼ平坦で, 締まっている。

覆土 2層からなり, ロームの堆積状況から, 人為堆積と思われる。

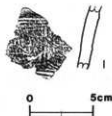
土層解説

- 黒褐色 ローム粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 暗褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロックを中量, ローム中ブロックを少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片11点, 須恵器片4点が出土している。遺物は, 第180図1の須恵器鉢を含め, すべて覆土上層から出土している。

所見 時期は, 重複関係や出土遺物から, 平安時代前期(9世紀前葉)と考えられ,

第84A号住居跡との時期差はあまりないと思われる。



第180図
第84B号住居跡
出土遺物実測図

第84B号住居跡出土遺物拓影図表

図版番号	器種	部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号, 出土位置, 色調など)
第180図 1	鉢 須恵器	体部	外面平行タタキ, 内面横ナデ。	TP31 覆土上層 灰色

第85号住居跡 (第181図)

位置 調査ⅡA区東部, D49区。

規模と平面形 西壁から南壁にかけてが調査区域外であることから, 長軸(3.95)m, 短軸(3.34)mの長方形と推定される。

主軸方向 N-25°-W

壁 壁高は36~42cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全面がほぼ平坦で, 締まっている。特に, 中央部が踏み固められている。

竈 北壁やや東壁寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 火床部, 煙道部と両側の袖部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部まで124cm, 最大幅132cm, 壁外への掘り込み61cmである。火床部は, 床面を10cmほど掘りくぼめており, 火熱を受けて赤変しているが, あまり硬化はしていない。煙道部は外傾して, 緩やかに, のち垂直に立ち上がる。

竈土層解説

- 1 硝 褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 灰 褐色 灰褐色粘土粒子を中量, ローム粒子・灰を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 3 灰 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 4 硝 褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 5 灰 褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子・灰を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 6 黒 褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量, 炭化粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 7 硝 褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量, ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 8 硝 褐色 炭化粒子を中量, ローム粒子・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量, 焼土中ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 9 灰 黄色 灰褐色粘土粒子を中量, ローム粒子を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 10 灰 褐色 炭化物・炭化粒子を中量, ローム粒子を少量, 砂を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 11 硝 色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 12 灰 褐色 ローム粒子・砂を少量, ローム小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 13 硝 色 ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量, 炭化粒子・焼土粒子を微量含み, 粘性を帯び, 締まっている。
- 14 褐色 焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 15 灰 褐色 ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

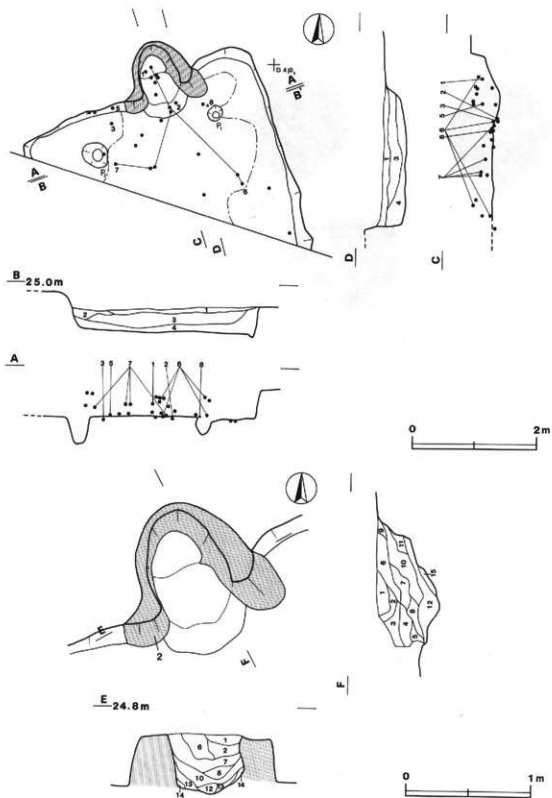
ピット 2か所(P1・P2)。P1とP2は長径25~45cm, 短径22~32cmの楕円形で, 深さ24~44cmである。北東および北西コーナー部寄りに位置し, いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり, 自然堆積と思われる。

土層解説

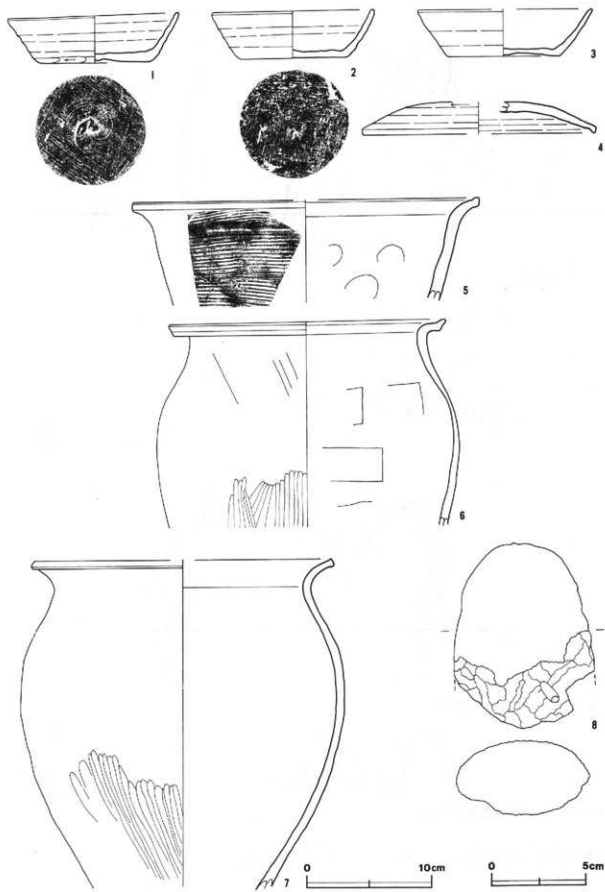
- 1 硝 褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 硝 褐色 ローム粒子を多量, ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を中量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 硝 褐色 ローム粒子を多量, ローム中ブロック・ローム小ブロックを中量, 炭化物・炭化粒子・焼土粒子を少量, 焼土小ブロックを微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 4 硝 褐色 ローム粒子を中量, 炭化粒子・焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片125点, 須恵器片35点, 土製品1点(支脚)が出土している。遺物は, 竈と住居跡全体の覆土中から出土しており, 竈内から出土したものは約27%, 北東部から出土したものが約10%, 南東部から出土したものが約27%, 南西部から出土したものが約19%, 北西部から出土したものが約14%, その他が約3%である。また, 竈を除いた遺物の出土層位は, 覆土上層が約50%と多く, 覆土中層が約39%, 覆土下層と床面直上が約9%, その他が約2%である。第182図1と2の須恵器坏, 4の須恵器蓋が竈内から, 3の須恵器坏が北西部の覆土中層と竈西袖脇の床面直上から, 6の土師器甕が竈内と東壁寄りの覆土上層から覆土下層にかけて, 7の土師器甕が竈内と中央部の覆土中層から覆土下層にかけて, 8の土製支脚が竈東袖手前の覆土下層からそれぞれ出土している。竈内から出土した多数の土師器片は, 火熱を受けておらず, 竈外から出土したものと接合していることから, 住居廃絶後に投棄されたと思われる。



第181図 第85号住居跡実測図

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代中期（8世紀中葉）と考えられる。



第182图 第85号住居跡出土遺物実測図

第85号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第182図 1	環 須恵器	A 13.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。体部外面下片持ちへラ削り。底部回転へラ切り後、一向向の手持ちへラ削り。	石灰 雲母 砂粒 灰黄色 普通	90% P 493 体部内面油漣付着 窠内
		B 3.9				
		C 9.0				
2	環 須恵器	A 13.0	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。底部回転へラ削り後、手持ちへラ削り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰黄色 普通	90% P 494 窠内
		B 3.8				
		C 8.6				
3	環 須恵器	A [14.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口ロナデ。底部回転へラ切り後、ナデ。	雲母 砂粒 にぶい黄色 普通	50% P 495 床面直上 (東西軸脇) 覆土中層 (北西部)
		B 3.8				
		C 9.0				
4	壺 須恵器	A [18.9] ; B (2.6)	天井部から口縁部の破片。天井部は平坦で、緩やかに廣く。口縁部は曲曲して垂下する。	天井部内外面・口縁部内外面口ロナデ。頂部回転へラ削り。	雲母 砂粒 灰黄褐色 普通	40% P 496 窠内
		A [27.8] ; B (8.3)				
A 22.4 ; B (16.4)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部へラナデ。体部外面中位からへラ磨き、内面輪積痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 にぶい黄色 普通	40% P 498 2次焼成 窠内 覆土上層～下層 (東壁寄り)		
A [24.0] ; B (26.3)					体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面中位からへラ磨き。
A [24.0] ; B (26.3)	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。肩部はつまみ上げられている。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面中位からへラ磨き。	長石 石英 雲母 スコリア 砂粒 にぶい黄褐色 普通	40% P 499 窠内 覆土中層～下層 (中央部)		

図版番号	種 別	計 測 値				出 上 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	支 脚	(99)	75	40	(219)	覆土下層(藍染袖手前)	DP9

第86号住居跡 (第183図)

位置 調査ⅡA区東部, D 417区。

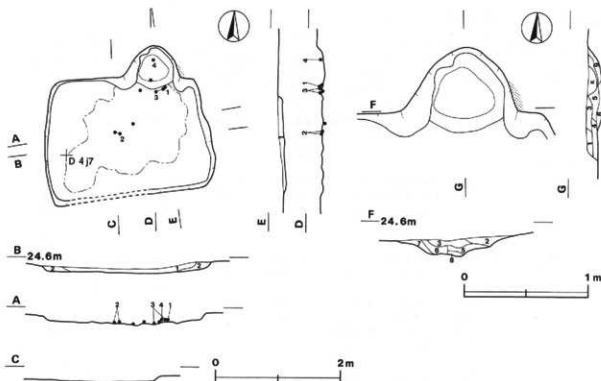
規模と平面形 長軸2.68m, 短軸1.96mの長方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は8~13cmで、外傾して立ち上がる。

床 全面がほぼ平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

窠 北壁東寄りに砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存しているが、袖部の張り出しは少なく、粘土はほとんど残存していない。焚口部は確認されていない。規模は、焚口部から煙道部まで70cm, 最大幅130cm, 壁外への掘り込み49cmである。火床部は、床面を10cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化はしていない。焚口部から50cm奥の火床面に第184図4の雲母片岩を埋め込んでいる。火熱を受けて赤変していることから、支脚として利用されたものと考えられる。煙道部は外傾して、緩やかに、のち垂直に立ち上がる。



第183図 第86号住居跡実測図

土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を少量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子を少量、焼土粒子・灰褐色粘土粒子・砂を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子を中量、ローム粒子・焼土小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム中ブロック・ローム小ブロックを少量、炭化粒子・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く締まっている。 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性を帯び、締まっている。 |
| 8 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |
| 9 灰褐色 | ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

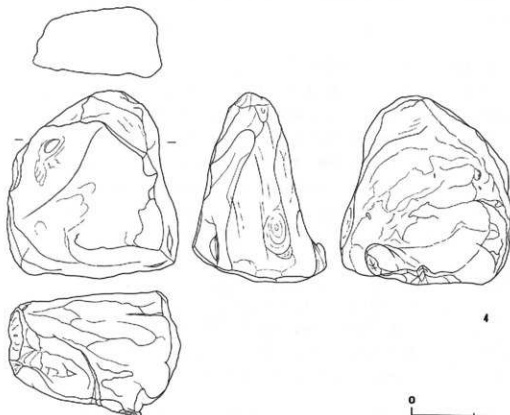
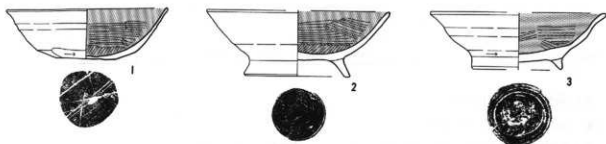
覆土 2層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子を中量含み、粘性は弱く、締まっている。 |

遺物 土師器片69点、須恵器片14点、灰軸陶器1点、石1点（雲母片岩）が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが、細片が多く、覆土が浅かったためか、竈に集中しており、竈内から出土したものは約43%である。第184図1の土師器坏、3の土師器高台付坏と4の雲母片岩が竈内から、2の土師器高台付坏が中央部の床面直上からそれぞれ出土している。灰軸陶器長頸瓶は細片で図示できないが、猿投窯産井ヶ谷78号窯式のもので、時期的に一致している。竈内から出土した多数の土器片は、火熱を受けておらず、竈外から出土しているものと接合していることから、住居廃絶後に投棄されたと思われる。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代前期（9世紀中葉）と考えられる。



第184図 第86号住居跡出土遺物実測図

第86号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第184図 1	土 器	A 12.8	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけて、中位と下位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。	雲母 スコリア 砂粒 黒褐色 外面 しぶい黄褐色 普通	70% P500 内面黒色処理 体部外面スス付着 壺内
		B 4.2				
		C 4.8				
2	高台付土 器	A [14.6]	高台部から口縁部の破片。高台部は長く、「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、下位に不明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、ナデ。高台部貼り付け。ロクロナデ。	砂粒 内面 黒褐色 外面 しぶい褐色 普通	50% P501 内面黒色処理 底部外面油煙付着 床面直上 (中央部)
		B 5.2				
		E 8.2				
		E 1.6				
3	高台付土 器	A [14.1]	高台部から口縁部の破片。高台部は「ハ」の字状に開く。平底。体部から口縁部にかけて、中位に明瞭な稜を持ち、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。内面から底部内面にかけてヘラ磨き。底部回転ヘラ削り。高台部貼り付け。ロクロナデ。	石英 砂粒 内面 黒色 外面 しぶい褐色 普通	40% P502 内面黒色処理 底部外面油煙付着 壺内
		B 4.5				
		D [7.4]				
		E 1.0				

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第184図4	石	15.0	13.7	10.0	2310	雲母片岩	竈内	Q18 支脚転用

第87号住居跡 (第185図)

位置 調査ⅡA区南部, D4i3区。

規模と平面形 南壁部分が調査区域外であることから, 東西軸(3.36)m, 南北軸(2.25)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は17~22cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 南壁際を除いて巡っている。上幅15~25cm, 下幅2~7cm, 深さ5~7cmで, 断面形はU字状である。

床 全面がほぼ平坦で, 締まっている。特に, 竈手前から中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており, 火床部, 煙道部と両側の袖部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部まで89cm, 最大幅117cm, 壁外への掘り込み56cmである。火床部は, 床面を6cmほど掘りくはめており, 火熱を受けて赤変しているが, あまり硬化はしていない。焚口部から40cm奥の火床面に第186図7の土製支脚が埋め込まれている。煙道部は外傾して, 緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量, ローム小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子を中量, ローム粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 5 灰褐色 ローム粒子・灰褐色粘土小ブロック・灰褐色粘土粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 6 無暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量, ローム粒子・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。
- 7 暗赤褐色 ローム粒子を少量, 焼土粒子を少量含み, 粘性は弱く, 締まりはない。

ピット P1は径32cmの円形で, 深さ19cmである。北西コーナー部に位置し, 性格は不明である。

覆土 5層からなり, ブロック状の堆積状況から, 人為堆積と思われる。

土層解説

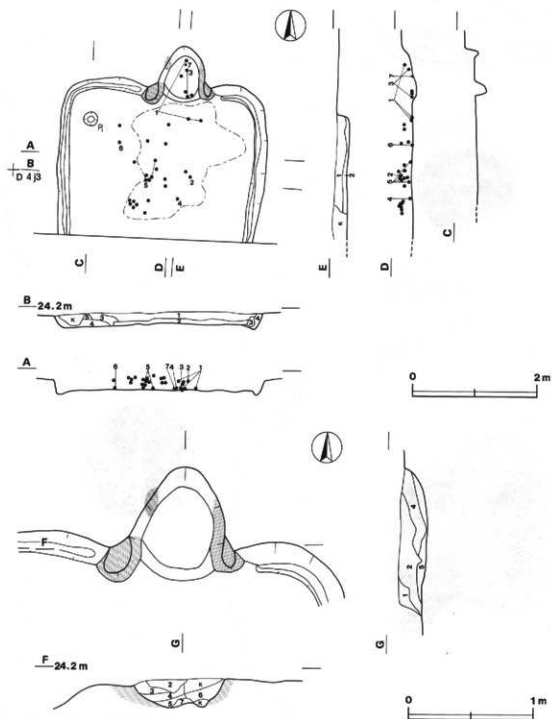
- 1 褐色 ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を中量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量, 焼土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 4 暗褐色 ローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量含み, 粘性は弱く, 締まっている。
- 5 褐色 ローム粒子を少量, ローム小ブロック・灰褐色粘土粒子を微量含み, 粘性は弱く, 締まっている。

遺物 土師器片94点, 須恵器片70点, 土製品1点(支脚)が出土している。遺物は, 竈と住居跡全体の覆土中から出土しているが, 細片が多く, 覆土が浅いことから, 竈に集中している。竈内から出土したものは約46%, 北東部から出土したものが約18%, 南東部から出土したものが約9%, 南西部から出土したものが約14%, 北西部から出土したものが約14%, その他が約6%である。第186図1の土師器片, 3の須恵器片と7の上製支脚が竈内から, 2の須恵器片が中央部と南東部の覆土上層から, 4の須恵器片が中央部の覆土下層から, 5の土師器片が覆土上層から覆土下層にかけて, 6の須恵器片が床面直上からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 遺構の形態や出土遺物から, 奈良時代中期(8世紀中葉)と考えられる。

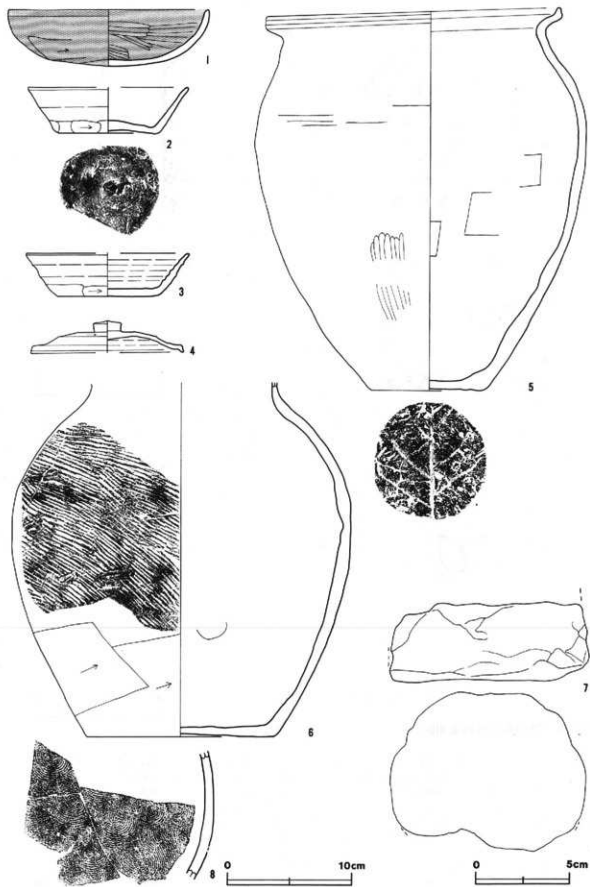
第87号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第185図	環	A 16.0	底部からL線部の破片。丸底。体部からL線部にかけて, 内響気味に立ち上がる。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部外面から底部外面にかけ手持ちへう削り, 内面から底部内面にかけへう磨き。	砂粒	40% P504
	土師器	B 4.5			灰黄褐色	内外両面黒色処理 竈内
					一部黒褐色	
					普通	



第185図 第87号住居跡実測図

第186図 2	坏 須 患 器	A [12.8]	底部から口縁部の破片。平底。体部	口縁部内外面・体部内外面ロクロナ	灰石 砂粒	50% P505
		B 3.7	から口縁部にかけて、直線的に立ち上	デ。体部外面下位手持ちヘラ削り。	灰黄色	覆土上層
		C 8.0	がる。口縁部はわずかに外反する。	底部回転ヘラ切り後、ナデ。	普通	(中央部、南東部)
3	坏 須 患 器	A [13.0]	底部から口縁部の破片。平底。体部	口縁部内外面・体部内外面ロクロナ	石英 雲母 砂粒	30% P506
		B 3.5	から口縁部にかけて、内彎気味に立ち	ナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。	灰色	甕内
		C [8.0]	上がる。口縁部はわずかに外反す	底部回転ヘラ切り後、一方向の手持	普通	
4	釜 須 患 器	A [24]	つまみから口縁部の破片。扁平なボ	つまみ・天井部内外面・口縁部内外	石英 雲母 砂粒	50% P507
		B 2.5	タン状のつまみが付く。天井部は平	面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	灰色	覆土下層
		F 2.3	坦で、外反気味に開く。口縁部は		普通	(中央部)
		G 0.8	屈曲して垂下する			



第186图 第67号住居跡出土遺物実測図

第186図 5	壺 土師器	A 23.6	体部と口縁部の一部欠損。平底。体部から口縁部にかけ、内壁気味に立ち上がる。口縁部は外反し、中位に明瞭な稜を持つ。端部はつまみ上げられ、口唇部に棒状工具で凹線を添らす。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。体部外面中位ヘラ磨き。底部内外面ナデ。	雲母 スコリア 砂粒 棕色 普通	90% P508 二次焼成 覆土上層～下層 (中央部)
		B 30.7				
		C 9.2				
6	壺 須恵器	B (28.4)	底部から体部の破片。平底。体部は内壁気味に立ち上がり、中位で最大径を持つ。	体部外面上位から中位平行タタキ、下位ヘラ磨り。内面アテ具痕有り。	長石 石英 雲母 砂粒 灰色 普通	40% P509 床面直上 (中央部)
		C [15.3]				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
7	支脚	(4.3)	10.5	8.5	(321)	壺内	DP10

図版番号	器種部分	器形・手法の特徴	備考(台帳番号、出土位置、色調など)
8	壺 須恵器 体部	外面同心円状のタタキ、内面横ナデ。	TP32 覆土上層(中央部) 黒灰色

第88号住居跡(第187図)

位置 調査ⅡA区南部、D413区。

重複関係 本跡は第89号住居跡と重複している。本跡が、第89号住居跡の北壁寄りの覆土を除いて掘り込んでいることから、本跡が新しい。

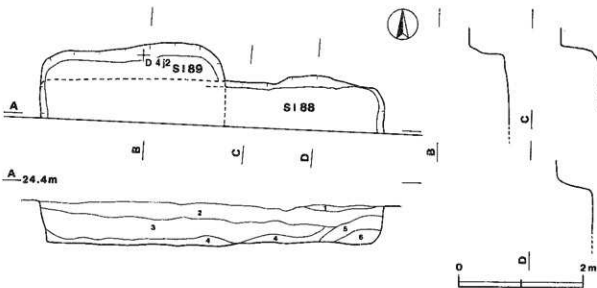
規模と平面形 南部分が調査区域外であることから、東西軸(5.50)m、南北軸(0.88)mの長方形または方形と推定される。

主軸方向 不明

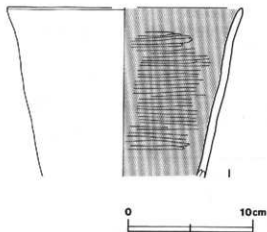
壁 壁高は55～65cmで、垂直に立ち上がる。

床 全面がほぼ平坦で、締まっている。

覆土 6層からなり、自然堆積と思われる。



第187図 第88・89号住居跡実測図



第188図 第88号住居跡出土遺物実測図

土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を中量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 4 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 5 | 黒褐色 | ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。 |
| 6 | 黒褐色 | ローム粒子を中量、ローム小ブロックを少量含み、粘性は弱く、締まりはない。 |

遺物 土師器片52点、須恵器片19点が出土している。遺物の出土層位は、第188図1の土師器鉢を含め、ほとんどが覆土上層である。

所見 第89号住居跡と床面の高さが同じことから、第89号住居跡の廃絶後に、床面を利用して作られたと考えられる。竈は不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代（9世紀）の可能性がある。

第88号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第188図	鉢	A [18.8]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。体部内面へラ磨き。	石英 雲母 砂粒 スコリア 内面 黒色 外面 ぶい黄褐色 普通	10% P510 内面黒色処理 覆土上層
1	土師器	B (13.6)				

第89号住居跡（第187図）

位置 調査ⅡA区南部、D 4 2区。

重複関係 本跡は第88号住居跡と重複している。第88号住居跡が、本跡の北壁寄りの覆土を除いて掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 南部が調査区域外であることから、東西軸(3.16)m、南北軸(1.20)mの長方形または方形と推定される。

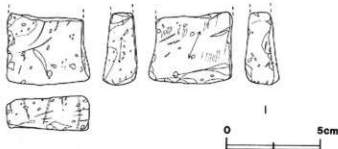
主軸方向 不明

壁 壁高は55～65cmで、垂直に立ち上がる。

床 全面がほぼ平坦で、締まっている。

遺物 土師器片42点、須恵器片34点、石器1点（砥石）が出土している。遺物は、第189図1の砥石を含め、ほとんどが細片で、その多くは覆土上層から出土している。

所見 本跡の廃絶後に、第88号住居跡が本跡の床面を利用して建てられたものと考えられる。竈は不明である。時期は、遺構の形態や出土遺物から、平安時代（9世紀）の可能性がある。



第189図 第89号住居跡出土遺物実測図

第89号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第189図1	砥	4.1	(3.9)	4.4	1.8	(42)	凝灰岩	覆土下層	Q19

第90号住居跡(第190図)

位置 調査ⅡA区西部、D3i0区。

規模と平面形 長軸4.34m, 短軸4.30mの方形である。

主軸方向 N-8°-W

壁 壁高は10~17cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅11~27cm, 下幅2~19cm, 深さ6~12cmで、断面形はU字状である。

床 全面が平坦で、締まっている。特に、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央に砂混じりの灰褐色粘土で構築されている。天井部は崩落しており、火床部、煙道部と両側の袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで100cm, 最大幅115cm, 壁外への掘り込み24cmである。火床部は、床面を9cmほど掘りくぼめており、火熱を受けて、赤変しているが、あまり硬化はしていない。煙道部は外傾して、緩やかに立ち上がる。

壁土層解説

- 1 赤褐色 焼土中ブロックを多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 暗褐色 ローム粒子を少量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子を少量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりはない。
- 4 褐色 ローム粒子・灰褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりはない。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は長径23~35cm, 短径18~30cmの楕円形で、深さ46~68cmである。各コーナー部寄りに位置し、いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径27cm, 短径24cmの楕円形で、深さ30cmである。南壁寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり、自然堆積と思われる。

土層解説

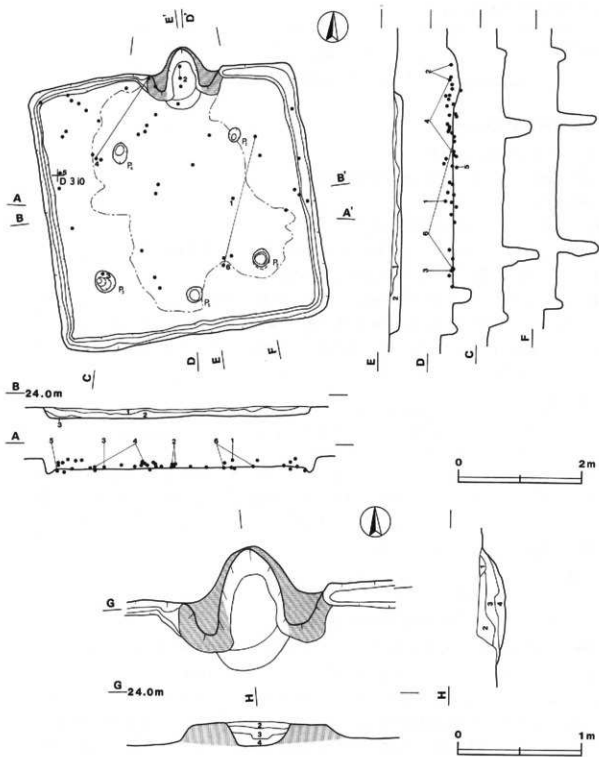
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子を少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 2 褐色 ローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム中ブロックを少量、炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性は弱く、締まっている。
- 3 褐色 ローム粒子を多量含み、粘性は弱く、締まりはない。

遺物 土師器片132点, 須恵器片118点が出土している。遺物は、竈と住居跡全体の覆土中から出土しており、竈内から出土したものは約23%, 北東部から出土したものが約16%, 南東部から出土したものが約8%, 南西部から出土したものが約35%, 北西部から出土したものが約6%, その他が約12%である。第191図1の須恵器坏が中央部の覆土上層から覆土中層にかけて、2の須恵器坏が竈内から、3の須恵器坏が南西コーナー部の床面直上から、4の須恵器蓋が竈西袖部の覆土上層と西壁寄りの覆土下層から、5の須恵器鉢が西壁寄りの床面直上から、6の土師器小形壺が東壁および南壁寄りの床面直上からそれぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、奈良時代後期(8世紀後半)と考えられる。

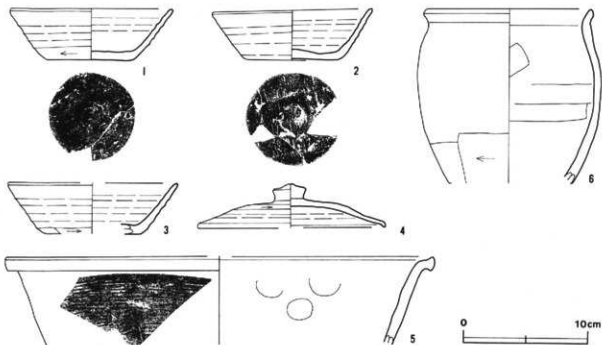
第90号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	器測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第191図1	須恵器坏	A 13.0 B 4.1 C 7.0	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り後、一方向の手持ちヘラ削り。	灰石 砂粒 黄灰色 普通	60% P511 覆土上層~中層 (中央部)



第190図 第90号住居跡実測図

第191図 2	環 須恵器	A 12.9	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。底部回転ヘラ切り後、一方のヘラ削り。	石英 雲母 砂粒 耐灰黄色 普通	50% P512 二次焼成 甕内
		B 4.1				
		C 7.0				
3	環 須恵器	A [13.6]	底部から口縁部の破片。平底。体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。	口縁部内外面・体部内外面口クロナデ。体部外面下位手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後、ナデ。	長石 砂粒 黄灰色 普通	30% P513 床面直上 (南西コーナー)
		B 4.1				
		C [7.6]				



第191図 第90号住居跡出土遺物実測図

第191図 4	壺 須恵器	A [14.9]	つまみから口縁部の破片。足高なボタン状のつまみが付く。天井部は平坦で、緩やかに開く。口縁周部は屈曲して垂下する。	つまみ・天井部内外面・口縁部内外面ロクロナデ。頂部回転ヘラ削り。	長石 砂粒 にぶい黄褐色 普通	50% P514 覆土上層 (東西軸脇) 覆土下層 (西壁寄り)
		B 7.6				
		F 2.6				
		G 1.3				
5	鉢 須恵器	A [34.4]	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は強く外反し、中位に明確な稜を持つ。端部はつまみ上げられている。	口縁部内外面・体部内外面ロクロナデ。体部外面平行タタキ、内面アテ具痕有り。	石英 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	10% P515 床面直上 (西壁寄り)
		B (7.1)				
6	小形壺 土器	A 13.2	体部から口縁部の破片。体部から口縁部にかけて、内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。一部ヘラナデ。外面下位ヘラ削り。	長石 石英 砂粒 スコリア にぶい橙色 普通	60% P517 床面直上 (東壁寄り、 南壁寄り)
		B 14.0				

茨城県教育財団文化財調査報告第155集
中根・金田台特定土地地区画整理事業
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
中原遺跡
(上巻)

平成12(2000)年3月16日 印刷

平成12(2000)年3月21日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 あけぼの印刷社
〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号
TEL 029-227-5505